

# 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXIV

## 堂の前遺跡

2010

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXIV

## どう 堂 の 前 遺 跡

2 0 1 0

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

日本海沿岸東北自動車道は新潟市を起点に、日本海側を北上し青森県に至る高規格幹線道路です。新潟県内では平成 21 年に村上市の荒川胎内インターチェンジまでが開通しました。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがあります。平成 15 年末の国土開発幹線自動車道建設会議において、日本海沿岸東北自動車道の中条－朝日間は日本道路公団が有料道路として建設することとなりました。その後、公団の民営化により、平成 17 年 10 月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成 18 年 2 月の国土開発幹線自動車道建設会議において、荒川－朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。

日本海沿岸東北自動車道は地域内外の経済的な交流・連携を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送等「命の高速道」としての役割を期待されており、早期の開通が望まれています。

本書は、この日本海沿岸東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「堂の前遺跡」の調査報告書です。調査によって弥生時代中期後半から後期前半の遺構・遺物が見つかりました。新潟県北部の平野部では当該期の調査事例が少なく、当時の人々の暮らしぶりはよく分かっていません。堂の前遺跡では堅穴住居や掘立柱建物が見つかり、当時の河川岸には小規模な橋や護岸施設などを想起させる遺構が検出されました。遺物は東北地方の影響が色濃い弥生土器、石器のほかガラス小玉や金属製品が出土しました。特にガラス小玉や金属製品の出土は珍しく、西日本の文化流入の一端を示す資料として貴重です。

今回の発掘調査成果が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方に活用されることを願っています。

最後に地元の方々や区長並びに村上市教育委員会には、多大なご協力とご援助をいただきました。また、国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所、東日本高速道路株式会社新潟管理局村上工事事務所、三面川沿岸土地改良区には調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成 22 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 武 藤 克 己

## 例　　言

- 1 本書は新潟県村上市下新保字高田 2351.2 に所在する堂の前道路の発掘調査記録である。
- 2 本発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道（以下、「日沿道」とする）建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする）が国土交通省から受託したものである。調査は県教委が主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする）に委託し、埋文事業団の指導・監督のもと株式会社シン技術コンサルが平成 20 年度に行った。
- 3 整理及び報告書作成に係る作業は、平成 20 年度に埋文事業団の指導のもと、株式会社シン技術コンサルがこれに当たった。本書は、本文、遺構・遺物観察表、遺構・遺物実測図版・写真図版からなる。図版の縮尺はそれぞれの図版に記した。また遺物写真については原則として実測図と縮尺を合わせた。
- 4 出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 5 平成 17 年度以前に刊行した報告書には、法定路線名の「日本海沿岸東北自動車道」と東日本高速道路株式会社の営業路線名である「日本海東北自動車道」が、事業者の意向により使用され、両路線名称が一冊の報告書に混在していた。しかし、平成 17 年度末に高速自動車国道法第 6 条により荒川駅内インター・チェンジの北側については、新直轄方式を導入し国土交通省の建設区画となったため、この区間の路線名称は日本海沿岸東北自動車道に統一することとした。
- 6 遺物の註記は、堂の前道路の省略記号「ドウノ」として、出土地点・遺構名・出土層位・遺物 No. を続けて記した。
- 7 本書で表記している国家座標は、測量法改正（平成 14 年）以前の日本測地系の数値を使用している。また標高については東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
- 8 発掘調査及び整理作業並びに報告書作成は、鈴木俊成（埋文事業団調査課長代理）と木村雄司（同主任調査員）の指導・監督のもとに行った。
- 9 本書で示す方位はすべて真北である。また本文で述べる軸方位は真北に対する東西方向の類きである。
- 10 本文中の註は脚注とし、引用・参考文献は筆者及び発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に一括掲載した。
- 11 航空写真撮影は、日本特殊撮影株式会社に委託した。
- 12 石器の実測・トレースは株式会社アルカに委託した。
- 13 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 14 遺構・遺物の各種図版作成・編集に関しては以下のとおりである。遺構写真はリバーサルフィルムで撮影したものをスキャニングし、遺物写真はデジタルカメラで撮影した。遺構図版は Adobe 社 Illustrator を用いて作成し、Adobe 社 InDesign を用いて編集した。
- 15 本書の執筆は鈴木俊成（埋文事業団）、石川博行・北村和徳・吉田好孝（株式会社シン技術コンサル）、高橋 敦・伊藤永良（パリノ・サーヴェイ株式会社）がこれに当たり、編集は鈴木の指導のもと石川が行った。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章 1 (鈴木)

第Ⅰ章 2・3、Ⅳ章 3D・F・G、第Ⅴ章 2A 1)、第Ⅷ章 1A (北村)

第Ⅱ章、第Ⅳ章 1・2・3A・C、第Ⅴ章 1・2A 2)・2B、第Ⅷ章 1B・2 (石川)

第Ⅲ章、第Ⅳ章 3B・E、第Ⅴ章 2A 3)・4)、第Ⅷ章 1C・D (吉田)

第Ⅵ章 (高橋・伊藤)

- 16 発掘調査から本書の作成に至るまで、以下の方々から多くのご教示とご協力をいただいた。ここに記し、厚く御礼を申し上げる。（敬称略、五十音順）

阿部 泰之　猪狩 忠雄　石川日出志　伊藤 雅文　岡村 道雄　押切 智紀　鬼塚 知典  
金子 拓男　坂井 秀弥　塩原 知人　渋谷 孝雄　間 雅之　田中 耕作　立木 宏明  
野田 豊文　林 大智　平田 貴正　増子 正三　水澤 幸一　水村 直人　守屋 豊人  
吉井 雅勇　渡邊 明和

## 目 次

第Ⅰ章 序 章	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	2
A 試掘調査	2
B 本発掘調査	3
3 調査・整理体制	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
1 地理的・歴史的環境	5
2 周辺の遺跡	5
第Ⅲ章 調査の概要	9
1 グリッドの設定	9
2 基本層序	9
第Ⅳ章 遺構	12
1 遺構の概要	12
2 記述の方法	12
3 遺構各説	13
A 堪穴住居	13
B 性格不明遺構	13
C 掘立柱建物	15
D 溝状遺構	15
E 溝	17
F 土坑	18
G 自然流路	21
第Ⅴ章 遺物	22
1 遺物の概要	22
2 遺物各説	22
A 弥生時代	22
B そのほかの時代	29
第VI章 自然科学分析	30
1 試料	30
2 分析方法	31
3 結果	32

4 考察	35
------	----

第VII章 まとめ	37
1 遺物	37
A 弥生土器	37
B 石器	39
C 金属製品	40
D ガラス小玉	41
2 遺構と遺跡	41
<要約>	43
<引用・参考文献>	44
<遺構観察表>	47
<遺物観察表>	49

### 挿図目次

第 1 図 試掘調査位置及び本発掘調査範囲図	2	第 7 図 基本層序	10
第 2 図 追加トレンチ位置及び 最終本発掘調査範囲図	3	第 8 図 主要珪藻化石群集の層位分布	34
第 3 図 地形概念図	5	第 9 図 硅藻化石	36
第 4 図 堂の前遺跡と周辺の弥生時代遺跡	7	第 10 図 炭化材	36
第 5 図 調査区位置図	8	第 11 図 石器出土分布	39
第 6 図 グリッド設定図	9	第 12 図 青谷上寺地遺跡の護岸遺構	42

### 表目次

第 1 表 放射性炭素年代測定結果	32	第 5 表 本遺跡の時期区分と併行関係	39
第 2 表 暗年校正結果	32	第 6 表 器種と石質の集計	40
第 3 表 珪藻分析結果	33	第 7 表 遺跡別主な石器出土数	40
第 4 表 樹種同定結果	34		

## 図版目次

### 【図版】

- 図版 1 遺構全体図  
図版 2 遺構分割図 (1)  
図版 3 遺構分割図 (2)  
図版 4 遺構分割図 (3)  
図版 5 遺構分割図 (4)  
図版 6 遺構分割図 (5)  
図版 7 遺構分割図 (6)  
図版 8 遺構分割図 (7)  
図版 9 遺構分割図 (8)  
図版 10 遺構分割図 (9)  
図版 11 遺構分割図 (10)  
図版 12 遺構分割図 (11)  
図版 13 遺構個別図 (1) SI318  
図版 14 遺構個別図 (2) SX51・52  
図版 15 遺構個別図 (3) SX53・254  
図版 16 遺構個別図 (4) SX277・314, SB1・2  
図版 17 遺構個別図 (5) SB3, SD, P  
図版 18 遺構個別図 (6) SK3・13・18・19・20・50・  
54・56・131・256  
図版 19 遺構個別図 (7) SK278・295・299・300・301・  
321・324  
図版 20 遺構個別図 (8) SK326・327・333・335・336・  
337  
図版 21 遺構個別図 (9) SK338・340・341・342・343・  
346・350・351  
図版 22 遺構個別図 (10) SR1  
図版 23 遺構個別図 (11) SR1・2  
図版 24 遺物実測図 (1) SI318, SX52・53, SD7, SK3・  
13・20・327・350, SR1  
図版 25 遺物実測図 (2) SR1, 包含層, 試掘トレンチ  
図版 26 遺物実測図 (3) 石器 1  
図版 27 遺物実測図 (4) 石器 2  
図版 28 遺物実測図 (5) 石器 3  
図版 29 遺物実測図 (6) 石器 4, 金属製品, ガラス小玉,  
そのほかの遺物

### 【写真】

- 図版 30 速景写真  
図版 31 全景・基本層序  
図版 32 遺構写真 (1) 北区遺構集中部・南区全景  
図版 33 遺構写真 (2) SI318  
図版 34 遺構写真 (3) SX51  
図版 35 遺構写真 (4) SX52  
図版 36 遺構写真 (5) SX53  
図版 37 遺構写真 (6) SX254  
図版 38 遺構写真 (7) SX277・314  
図版 39 遺構写真 (8) SB1  
図版 40 遺構写真 (9) SB2  
図版 41 遺構写真 (10) SB3  
図版 42 遺構写真 (11) SD316・317  
図版 43 遺構写真 (12) 05C 区遺構、3～7 区遺構、  
SD6・27  
図版 44 遺構写真 (13) SD6・27・16・149・252・320・  
334, SK340  
図版 45 遺構写真 (14) SK3・13・19・20・50・54・131  
図版 46 遺構写真 (15) SK131・256・278・295・299・  
300・301  
図版 47 遺構写真 (16) SK321・324・326・327・333・335  
図版 48 遺構写真 (17) SK336・337・338・340・341・  
342・343・346  
図版 49 遺構写真 (18) SK350・351, SR1・2  
図版 50 遺物写真 (1) 土器 1  
図版 51 遺物写真 (2) 土器 2, 石器 1  
図版 52 遺物写真 (3) 石器 2  
図版 53 遺物写真 (4) 石器 3  
図版 54 遺物写真 (5) 石器 4, 金属製品, ガラス小玉,  
そのほかの遺物

# 第Ⅰ章 序 章

## 1 調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車道（以下、「日沿道」とする）は、新潟市の新潟空港インターチェンジ（以下、「IC」とする）から、日本海に沿って北上し、山形県・秋田県を経て青森市に至る高規格幹線道路である。新潟県内では村上市の荒川胎内 IC までが平成 21 年に完成している。新潟－朝日 IC 間は、平成元年及び平成 3 年に基本計画が決定され、中条－朝日 IC 間の第 13 次区間は平成 10 年に施工命令が出された。これを受け、日本道路公团（以下、「道路公团」とする）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取扱いに関する協議が本格化した。

中条－朝日 IC 間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする）が平成 11 年度に実施した。その結果、旧神林村以北では道路法線上に 5 か所の遺跡（新発見も含む）と 15 か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘・確認調査が必要であることを県教委に報告した。

平成 15 年 10 月 1 日の道路公团・県教委及び埋文事業団の協議において、道路公团が示した平成 16 年度の調査要望は膨大なものであった。しかし、この要望も「民営化」や「事業の見直し」などの諸問題を抱える道路公团にあっては、確定的なものではなかった。同年 10 月 8 日、県教委と埋文事業団は平成 16 年度の受託事業について協議した。そして、日沿道建設が決定し、道路公团が 10 月 1 日に要望した調査量が提示された場合、それに対応できるだけの調査体制を持っていないことから、日沿道の調査に限り埋文事業団の直轄指導・監督のもと、民間調査組織に全部委託するという方針を決定した。その後、日沿道の事業は、道路公团の分割民営化に伴い東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」とする）に引き継がれ、荒川胎内 IC 以南は東日本高速道路が「有料道路方式」で、それより北は国土交通省（以下、「国交省」とする）が「新直轄方式」で整備することとなった。

堂の前遺跡が含まれる遺跡推定地 12 の試掘調査は、平成 19 年に 31,890m<sup>2</sup> を対象に実施した。試掘調査によって、3 か所で遺構・遺物を検出し、新発見の遺跡（下新保高田遺跡・堂の前遺跡・桂木田遺跡）として登録した。堂の前遺跡では弥生時代後期の土器と石器が出土し、堅穴住居状の落ち込み・ピットなどを検出し、4,600m<sup>2</sup> について本発掘調査が必要であると判断した。本発掘調査は、国交省・県教委・埋文事業団の協議で平成 20 年度に実施することになった。本発掘調査面積については高速自動車道早期供用のため、当面、調査範囲を暫定二車線部分に限定した平成 14 年の協議（以下、「限定期協議」とする）に準じ 2,570m<sup>2</sup> とし、調査体制は平成 16 年度から実施している埋文事業団職員の指導・監督のもと、民間調査機間に全部委託するという方式をとった。

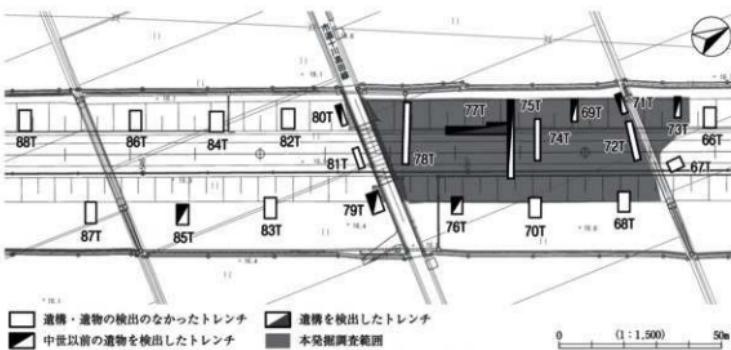
## 2 調査経過

### A 試掘調査

堂の前遺跡に関わる遺跡推定地 12 の試掘調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が平成 19 年 7 月 2 日から 7 月 26 日に実施した。調査対象面積 31,890m<sup>2</sup> のうち、1,370m<sup>2</sup> を調査した。遺跡推定地 12 は三面川左岸の谷底平野[新潟県 1987]、標高 15 ~ 18m に位置する。調査は遺跡推定地内に試掘トレンチ(以下、「T」とする)を任意に設定し、重機(バックホー)及び人力で掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。その後、土層の堆積状況、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。調査の結果、3か所で遺構・遺物のまとまりが認められ、38 ~ 59T 付近を「下新保高田遺跡」とし、69 ~ 78T 付近を「堂の前遺跡」、97・106・107T 付近を「桂木田遺跡」とした。以下、堂の前遺跡について記す。

基本土層は、I ~ V 層に大別し、更に各層を細分した。I 層は表土、I' 層は旧表土、II 層は中世の遺物包含層で灰色~灰白色砂質シルト、II b 層は弥生時代の遺物包含層で黄灰色シルト、III a 層は黄灰色砂質シルト~黄灰色シルト、III b 層は黄灰色~灰白色粘質シルト、III c 層は褐灰色シルト、III d 層は褐灰色砂質シルト~細砂、III e 層は灰色砂質シルト、IV 層は灰色~黄灰色細砂、V 層は黄灰色砂礫である。69 ~ 78T 付近では、西側で流路跡を検出した。流路内の土層は 7 層に分層した。流路の①層は灰白色砂質シルトで基本土層の II 層に対応する可能性があり、②層は灰色砂質シルトで弥生時代の遺物を多量に含む。③層は灰色シルトで弥生時代の遺物を含み、④層は黄灰色シルト、⑤層は暗褐色ガツボ混じりシルト、⑥層は黄灰色粘質シルトで弥生時代の遺物を多量に含む。⑦層は灰色砂質シルトである。

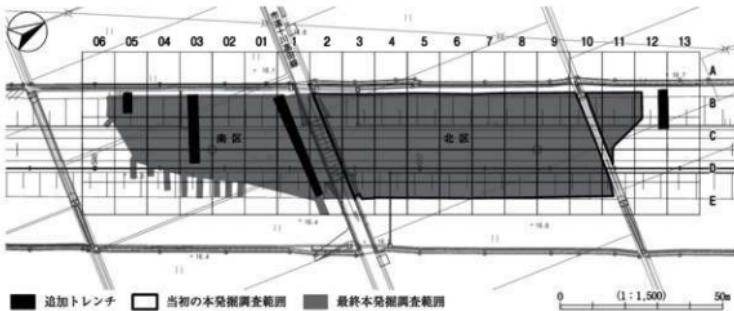
弥生土器は 69・71・75・80T から出土し、特に 69・75T から多量に出土した。遺構は、77Tにおいて竪穴住居状の落ち込みを検出し、その北東側では遺物が多量に出土した。出土した弥生土器は、その特徴から後期の東北系(天王山系)と推定した。このほか、中世の遺物が 73・75・77T に点在したが、その分布にまとまりは認められない。以上のことから、69 ~ 78T 付近(堂の前遺跡)の 4,600m<sup>2</sup> について本発掘調査が必要であると判断した。本発掘調査面積は限定協議から暫定二車線部分の 2,570m<sup>2</sup> となった(第1図)。



第1図 試掘調査位置及び本発掘調査範囲図

## B 本発掘調査

本発掘調査は平成20年4月15日から、2,570m<sup>2</sup>を対象に開始した。15日に調査区北側から表土掘削を開始し、5月9日に終了した。15日には調査区内にグリッドを設定した。調査は調査区北側から開始し、調査区壁際や調査ベルトでの土層観察の後、遺構検出面までの掘削を行った。6月18日に土層の確認及び流路(SRI)の範囲がほぼ確定し、遺構検出作業を開始した。SRIの発掘は19日から、検出遺構の発掘は7月10日から、それぞれ開始した。15日にはSRIの底面まで掘削が進んだ。また、SRIの東岸にはこれに沿うように溝状のプランが確認でき、覆土を除去したところ、底面から小ピットを検出した。そして、このSRI及びこれに沿う溝状遺構(溝・溝状遺構の分類基準については12頁参照)が調査区外に伸びていても判明した。調査区外に伸びる遺構の取り扱いについて7月25日に県教委と協議し、調査区隣接地をトレーニング調査し、遺構の伸びについて確認することとした。トレーニングは調査区外に4か所設定し(第2図)、30日に掘削を行った。その結果、市道十川高田線以南に自然流路とそれに沿う溝状遺構の存在を確認した。このトレーニング調査の結果を受け、県教委は国交省の了解を得て、埋文事業団に市道以南の調査も実施するよう指示した。市道十川高田線以南の調査面積は1,930m<sup>2</sup>である。調査区の呼称は、当初の調査区を北区、市道以南の調査区を南区とした。その間、8月27日に北区の空中写真撮影を行い、30日に現地説明会を実施した。北区の調査は9月4日に終了した。南区の調査は、9月9日から開始し、9月12日に市道を除く部分の表土掘削が終了し、遺構検出作業を開始した。10月2日には、遺構検出がほぼ終了し、順次遺構の発掘を開始した。また、北区同様に流路内の遺物の有無を確認するため、02・04ラインのベルト際にトレーニングを設定し、掘削を開始した。また、02D区で縦穴住居を検出し、東側の調査区外に遺跡の広がりが想定されたため、18日以降、02E～06C区にかけてトレーニング調査を実施した。その結果、調査区の東側は削平を受け、遺構が残っている可能性は低いと判断できたことから、県教委はこれ以上の調査拡張は必要ないとした。10月21日には、市道部分の表土掘削を開始した。23日には表土掘削が終了し、遺構の検出・発掘を開始した。11月9日、下新保高田遺跡の現地説明会に併せて、堂の前遺跡も現地公開した。10日には市道部分の調査が終了し、12日に南区の空中写真撮影を行った。その後、SRI内に2か所、SRI東岸に6か所のトレーニングを設け、重機で掘削し、下層に遺構・遺物がないことを確認した。14日に県教委による調査終了確認を得て、18日には現地調査の全工程を終了した。27日には国交省へ現地を引き渡した。調査面積は4,500m<sup>2</sup>になった。



第2図 追加トレーニング位置及び最終本発掘調査範囲図

### 3 調査・整理体制

堂の前遺跡の試掘調査と平成 20 年度の本発掘調査及び整理作業は、以下の期日と体制で行った。

#### 【試掘調査】

調査期間 平成 19 年 7 月 2 日～26 日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 木村 正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事・事務局長）

斎藤 栄（同 総務課課長）

藤巻 正信（同 調査課課長）

庶 務 長谷川 靖（同 総務課主任）

調査指導 田海 義正（同 調査課課長代理）

調査担当 加藤 学（同 調査課主任調査員）

調査員 齊藤 準（同 調査課嘱託員）

#### 【本発掘調査・整理作業】

本発掘調査 平成 20 年 4 月 15 日～11 月 18 日

整 理 作 業 平成 20 年 11 月 19 日～平成 21 年 3 月 31 日

調 査 主 体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 木村 正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 専務理事・事務局長）

斎藤 栄（同 総務課課長）

藤巻 正信（同 調査課課長）

監 督 鈴木 俊成（同 調査課課長代理）

木村 雄司（同 調査課主任調査員）

庶 務 長谷川 靖（同 総務課主任）

調査組織 株式会社シン技術コンサル

現場代理人 坂井 義章（株式会社シン技術コンサル 文化財調査部 主任技師）

調査担当 石川 博行（同 主任調査員）

調 査 員 北村 和穂（同 調査員）

吉田 好孝（同 調査員）

## 第 II 章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的・歴史的環境

堂の前遺跡は村上市下新保字高田 2351・2 に所在する（第5図）。現在の村上市は、平成 20 年 4 月 1 日に荒川町・神林村・村上市・朝日村・山北町の 5 市町村が合併したことによって新しく誕生した。合併後における村上市の面積は 1,174.24km<sup>2</sup>で、人口は約 7 万人である。

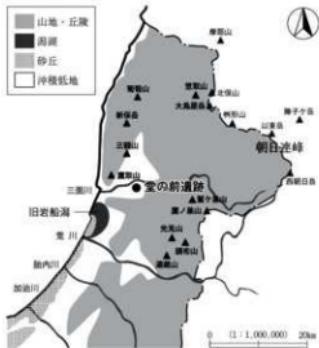
村上市の地形は大きく見て、北・東・西側の山間部と南側の平野部に大別できる。北側は山形県の摩耶山（1,019m）から連なる北俣山（979m）、梅形山（1,331m）、大鳥屋岳（989m）、笠取山（742m）、また朝日連峰を形成する西朝日岳（1,814m）、以東岳（1,771m）などの標高 1,000m を超える険しい山岳地帯である。東側も同様に山間部は山形県と接しており、鶴ヶ巣山（1,093m）、光鬼山（966m）、頭布山（1,017m）、湯藏山（726m）などの山々が連なる。西側は葡萄山地を形成する笠取山（419m）、三鶴山（587m）、新保岳（852m）、葡萄山（795m）など標高 400～800m の山々が連なる。葡萄山地は元々、朝日連峰と同列であったが、断層運動によって分断され地塊山地となった〔村上市 1999〕。平野部によって占められる南側は、大部分が荒川や三面川などの大河川によって形成された扇状地形を呈する。荒川の北側には、岩舟丘陵・浦田山丘陵や新潟砂丘などに囲まれた旧岩舟船場が広がる。

堂の前遺跡が所在する地域は旧朝日村の館腰地区にある。館腰地区は旧村内では平野部に位置し、古渡路・小川・下新保・十川などの集落で形成され、険しい朝日連峰を背景にのどかな水田風景が広がる。この地区は、古くから水害に遭遇している〔朝日村教育委員会 1980〕。また言い伝えでは、十川はその名が示すとおり、昔は三面川が幾つも川筋を変えてこの地区を流れていたと言われる。

### 2 周辺の遺跡

村上市内では、近年の開発に伴って多くの遺跡で発掘調査が行われてきた。ここでは弥生時代の遺跡について概観する。

三面川下流域には、滝ノ前遺跡（4）・桂木田遺跡（2）・大館跡（3）が所在する。滝ノ前遺跡は三面川右岸の河口付近の段丘上に立地する。堅穴住居 3 軒が検出され、そのうち 1 軒の床面から後期後半の東北系と北陸系土器が出土した。そのほか、アメリカ式石礫や環状石斧などの石器が出土した〔岡 1972〕。桂木田遺跡は三面川左岸の平野部に立地し、本遺跡から南へ約 300m の地点に位置する。中期の土器が 89 点と剥片石器 1 点が出土した〔平田ほか 2009〕。大館跡は三面川左岸に位置し、丘陵上から中～後期の東北系



第3図 地形概念図

と北陸系土器が出土した〔青木ほか2008〕。

村上市南部に広がる旧船周辺には六百地遺跡(7)・金曲遺跡(8)・高田遺跡(10)、潟北辺の丘陵上には山元遺跡(6)・八幡山遺跡(5)、潟の南側に伸びる砂丘上には長松遺跡(16)・砂山遺跡(12)・大野地遺跡(11)・ヶ付Ⅲ遺跡(13)が所在する。六百地遺跡・金曲遺跡・高田遺跡では中～後期の東北系土器が出土した〔鈴木ほか1990、田辺ほか2002・2003a・b〕。山元遺跡は後期後半の県内最北端に位置する高地性環濠集落である。試掘・確認調査によって、環濠のほか掘立柱建物1棟・土坑墓7基などが検出され、1基の土坑墓からはガラス小玉68点が出土した。そのほか、東北系に混ざって少量の北陸系土器や北海道の続縄文土器、石鎚や環状石斧をはじめとする石器・石製品が出土した〔滝沢ほか2009〕。八幡山遺跡は、山元遺跡から東へ約800mの地点に位置する〔田辺1994〕。長松遺跡では中～後期の東北系土器や注口土器、アメリカ式石鎚などが出土し〔田辺1991〕、砂山遺跡では中期末～後期の土器や石器などが出土した〔石丸ほか2003〕。

荒川流域には衣田遺跡(14)・中部北遺跡(15)・中曾根遺跡(17)・道端遺跡(18)・坂町宮ノ腰D遺跡(19)が所在する。衣田遺跡・中部北遺跡は荒川右岸の平野部に立地する。衣田遺跡では後期の高杯片や甕などが出土し〔田辺ほか2001〕、中部北遺跡では中期の土器1個体が出土した〔石川2003〕。中曾根遺跡は荒川左岸の平野部に立地する後期の集落で、住居2軒と土坑1基が検出され、東北系土器や磨製石斧などの石器が出土した〔青木ほか2006〕。道端遺跡は荒川左岸の平野部に立地する中期の集落で、平地式建物7棟、堅穴建物3軒などの遺構が検出された。また、北陸系・東北系などの土器、磨製石包丁など幅広に関係する遺物が出土した〔前川ほか2006〕。坂町宮ノ腰D遺跡は荒川左岸の平野部に立地し、後期の東北系土器や中期末のアメリカ式石鎚などが出土した〔吉井2006〕。

このほか、市内東部の山間部には二又遺跡〔大滝ほか1997〕、長者岩陰洞窟遺跡〔小野ほか1993〕、市内北部の海岸部には間ノ内遺跡〔山北町史編さん委員会1988〕などが所在する。

このように市内に分布する当該期の遺跡は、大多数が丘陵上や平野部に立地している。遺構は堅穴住居、堅穴建物、平地式建物などが確認されており、遺物は土器、石器、石製品、ガラス小玉などが出土している。土器は東北系と北陸系が出土しているが、東北系が優勢である。石器は、道端遺跡から出土した石包丁や掩ノ前遺跡・長松遺跡・宮ノ腰D遺跡のアメリカ式石鎚を除くと、おむね縄文時代的な様相が強い。



No.	遺跡名								
1	堂の前	4	浅ノ前	7	六百地	10	高田	13	在ヶ付Ⅱ
2	椎木田	5	八幡山	8	金曲	11	大野地	14	若田
3	大船跡	6	山元	9	大型寺	12	砂山	15	中部北
								16	真松
								17	中曾根
								18	造塙
								19	坂町宮ノ瀬D

第4図 堂の前遺跡と周辺の弥生時代遺跡（国土地理院1/50,000「村上」「中条」2002を縮小、加筆）



第5図 調査区位置図 (アジア航測株式会社「朝日村現況図」1984に加筆)

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1 グリッドの設定

グリッドの設定は、高速道路のセンター杭を基準に行った。センター杭STA285(X=249687.688,Y=89307.580)とSTA290(X=249775.406,Y=89355.597)を結んだラインを基準線とし、10m四方の方眼を設定して大グリッドとした。このため、グリッドの方位は真北から $28^{\circ} 41' 47''$  東偏している。また、大グリッドを更に2m四方に25分割し、これを小グリッドとした。

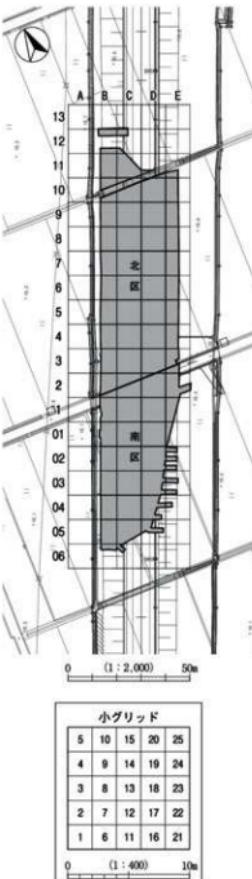
大グリッドは南北方向をアラビア数字の06～01・1～13で表し、東西方向はアルファベットA～Eを用い両者を組み合わせて「2D区」のように呼称した。また、小グリッドは1～25のアラビア数字で表し、大グリッドの南西隅を1、北東隅を25として「2D25区」のように大グリッド名の後ろに付して呼称した。座標値は、1AでX=249719.637、Y=89290.637である。また、調査区北側の12AはX=249816.127、Y=89343.687である。

### 2 基本層序

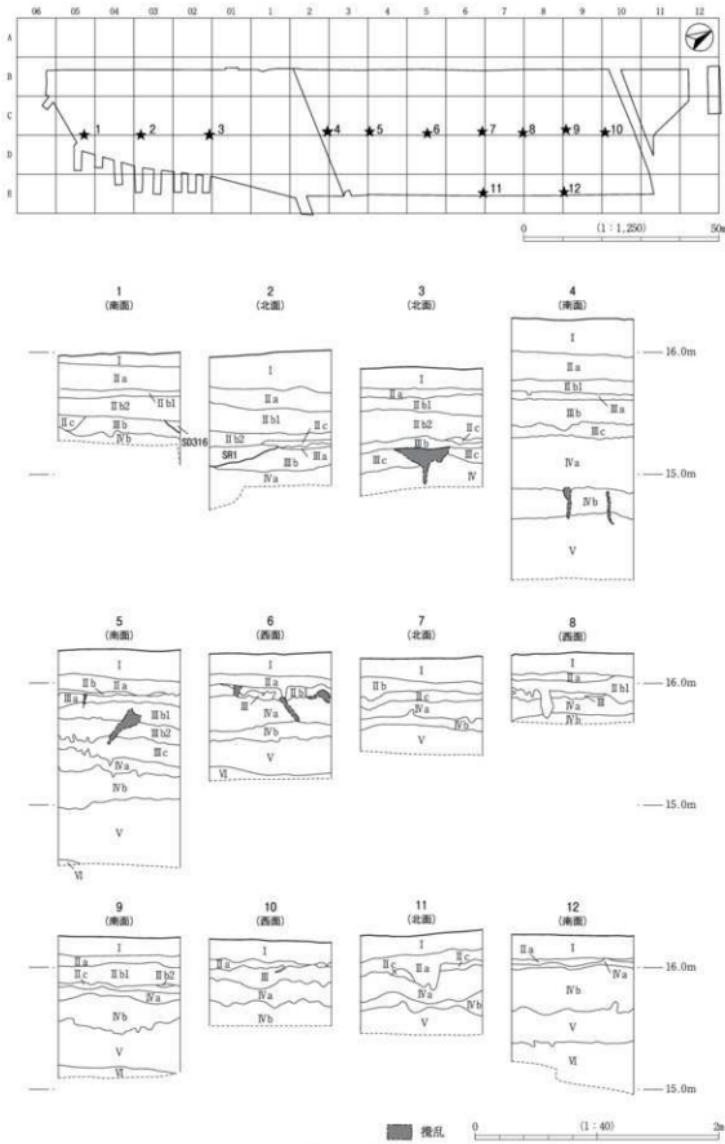
本遺跡の基本層序は、自然流路の影響により地点ごとに層厚が異なる。また、調査区は場整備などで削平を受けており、特に周囲よりも標高が高い7～10D・E区では削平が著しい。

I層は、現代の水田耕作土である。II層はシルト層であり、色調などから3層(a～c)に分けた。II a層は暗青灰色を呈し、近・現代の遺物が出土した。II b層は西側では層厚40～60cm、東側では5～20cmを測り、7～10D・E区では場整備による削平のためほとんど確認できなかった。II b層は更に2層(1・2)に分けた。II b1層は青みの強い青灰色を呈し、この層からは中・近世の陶磁器片などが出土した。II b2層は黄褐色土ブロックを少量含む。弥生時代～古代の遺物が出土しており、層厚20～40cmを測る。II c層は青灰色を呈し、明黄褐色土を多量に含む。弥生時代の遺物が出土した。

III層は、黄褐色を主体としたシルト・細砂層で、色調・土質から3層(a～c)に分けた。調査区全域に堆積していたが、6区ライン以北では細分できなかった。III a層は明黄褐色を呈するシルト層で、4C・D区では層厚約10cmを測る。III b層は灰白色を呈する細砂層で、



第6図 グリッド設定図



第7図 基本層序

層厚 10 ~ 30cm を測る。Ⅲ c 層は灰白色を呈するシルト層で、3・4B ~ D 区では層厚 5 ~ 20cm を測る。

IV 層は、土質から 2 層 (a・b) に分けた。IV a 層は粘質土で鉄分の酸化が著しい。層厚 10 ~ 40cm を測る。IV b 層は砂と粘質土の混合土である。層厚 15 ~ 30cm を測る。調査区北側の 7 ~ 10D・E 区は總じて厚く堆積する。V 層は砂層で、層厚 20 ~ 30cm を測る。VI 層は砂礫層で、全体に鉄分の酸化が進み、褐色を呈する。

以下、基本層序を記していく。

- I 層 暗褐色土 (10YR3/3)。しまりやや強く、粘性普通。表土、水田耕作土。試掘調査の I 層に相当する。
- II a 層 暗青灰色土 (5PB4/1)。しまりやや強く、粘性普通。旧水田耕作土。試掘調査の I' 層に相当する。
- II b1 層 青灰色シルト (5B5/1)。しまり強く、粘性普通。酸化鉄を少量、炭化物 (3mm 以下) を微量含む。中・近世の遺物包含層。試掘調査の流路堆積物①層に相当する。
- II b2 層 青灰色シルト (5B6/1)。しまり強く、粘性普通。酸化鉄を中量、炭化物 (3mm 以下) を微量含む。弥生時代～古代の遺物包含層。試掘調査の流路堆積物②層に相当する。
- II c 層 青灰色シルト (5B6/1)。しまり強く、粘性普通。明黄褐色土を多量、灰黄色砂・酸化鉄を中量含む。弥生時代の遺物包含層。
- III a 層 明黄褐色土 (10YR6/6)。しまりやや強く、粘性普通。暗青灰色・青灰色シルトを中量、酸化鉄を少量含む。弥生時代の遺物包含層。試掘調査の III a 層に相当する。
- III b 層 灰白色細砂 (10YR8/1)。しまり普通、粘性やや弱い。弥生時代の遺構検出面。
- III c 層 灰白色シルト (10YR8/2)。しまり普通、粘性やや弱い。灰白色砂を少量含む。
- IV a 層 青灰色粘質土 (5B5/1)。しまりやや強く、粘性弱い。酸化鉄を少量含む。試掘調査の III b 層に相当する。
- IV b 層 青灰色土 (5B5/1)。しまりやや強く、粘性弱い。砂と粘質土ブロックの混合土。酸化鉄を少量含む。
- V 層 青灰色砂 (5B6/1)。しまりやや強く、粘性弱い。試掘調査の V 層に相当する。
- VI 層 褐色砂礫 (7.5YR4/3)。鉄分の酸化が進行した硬い砂礫層。試掘調査の V 層に相当する。

# 第IV章 遺構

## 1 遺構の概要

本遺跡での遺構の種別及び認定要素を以下に示す。堅穴住居の認定要素は、①遺物が出土すること、②円形ないし隅丸方形に溝が巡ること、③溝の内側にビットが検出できること、④炉を有すること、である。性格不明遺構は、上記①～③の要素を複数備えているものとした。掘立柱建物は、柱穴が規則的に配置し、柱穴間の距離が一定していること、各柱穴の覆土に共通性があることを認定要素とした。溝状遺構・溝は、溝底面や周間に多数の小ビットを伴うものを溝状遺構、伴わないものを溝とした。土坑・ビットは、長径（軸）が0.60m以上（推定値含む）のものを土坑とし、それ以外はビットとした。ただし、長径（軸）0.60mに満たなくても覆土に共通性が認められるなどの状況によって土坑としたものがある。

検出した遺構は、堅穴住居1軒、性格不明遺構6基、掘立柱建物3棟、溝状遺構10条、溝11条、土坑31基、ビット435基、道路1条で、そのほかに自然流路2条がある。これらの遺構の大半は出土遺物から、弥生時代に帰属するが、道路については、覆土がII b1層のため中・近世以降と考えられる。

遺構の分布は、調査区の西側（B・C区ライン）に弥生時代の自然流路（SR1）、また東側（E区ライン）にも同様に自然流路（SR2）があり、それに沿うような形で溝状遺構が走り、2条の自然流路に挟まれた微高地帯に堅穴住居・掘立柱建物・性格不明遺構・土坑・ビットなどが位置する。遺構の検出面は、5区ライン以南についてはⅢ a層及びⅢ b層で、Ⅲ層が不明瞭となる6区ライン以北はⅣ層である。SR1付近の緩斜面地（2～11C、01～04・1D区）などは若干標高が低くなるため、水田耕作の影響が少なく、遺構の残存状況が良好であった。なお、遺構覆土と検出面の土壤の識別が難しいことから、遺構の検出手業では、平面観察のほか、トレーナーを多く設定し、断面観察にも重点をおいて慎重に調査を行った。また、遺構の判断は遺物が出土した遺構覆土の特徴と比較・検証することによって最終的な確認を行った。遺構の覆土は、青灰色シルトと明黄褐色を呈する粘質を帯びる砂に大別できる。前者は基本層序のII c層に由来し、主に小ビットを伴う溝状遺構の覆土になっている。また、後者は基本層序のⅢ a層に由来し、主に堅穴住居や性格不明遺構の覆土である。遺構の大半はⅢ b層上面で検出したが、一部の溝状遺構や溝などはⅢ a層上面で検出できた。

## 2 記述の方法

遺構種別の略号は、堅穴住居「SI」、炉「FP」、性格不明遺構「SX」、掘立柱建物「SB」、溝状遺構・溝「SD」、土坑「SK」、ビット「P」とし、自然流路は「SR」とした。遺構番号は種別に関係なくすべて通し番号とした。堅穴住居・性格不明遺構・掘立柱建物などに関係するビットはP1・P2のように遺構ごとに番号を付与した。ただし、SX277・314、SB1・2のように重複した遺構については、所属を明らかにするためSX277P1、SB1P2のようにした。調査の結果、遺構ではないと判断したものについては欠番とした。検出した遺構は極力個別図で報告することとしたが、単独のビットや道路については分割図段階での報告とした。またビットは、分割図に番号のあるものは単独のビット、ないものは溝状遺構に付属するものと

した。

性格不明遺構は、周溝外縁の形状を平面形として表記し、規模を計測した。溝状遺構・溝の規模（全長）は、復元値で示した。

### 3 遺構各説

#### A 壊穴住居

**SI318** (図版4・13・33) 02D区に位置する。遺構の検出はⅢa層上面で行った。SK326・327・350、P345・602と重複し、すべてに切られる。遺構の東側は壁が残っていたが、西側はSR1によって壊されており、周溝・ピットのみが残存していた。平面形は梢円形を呈する。規模は長径5.45m、短径4.53m、検出面からの深さは壁の立ち上がりが残る東側で0.10mを測る。床面積は17.64m<sup>2</sup>である。長軸方向はN22°Eを指す。覆土は4層に分けた。1層は明黄褐色細砂で炭化物を微量に含む。2層は浅黄色砂で粗砂を微量に含む。3・4層は周溝の覆土で、青灰色土がブロック状に混入する。床面は不明瞭であったが、覆土の断面観察から炉の掘り込み面を床面と想定した(Ⅲb層上面)。貼床や硬化面は確認できなかった。ピットは住居内から計8基検出した。柱痕は確認できず、深さ0.04～0.23mを測る。このうち主柱穴は配置などからP11・17・18を推定した。他遺跡の例から考えて4本を想定したが、残り1本はSK327によって壊された可能性が高い。炉は地床炉である。炉の掘形は断面形が皿状を呈し、底面に白色粘土が貼られ、その上を火床としている。規模は長径0.55m（残存値）、短径0.56mを測る。周溝は梢円形に巡る。北西隅は2条となり、東側の周溝は一部途切れる。周溝の規模は幅0.07～0.32m、深さ0.08～0.16mを測る。

出土した遺物は弥生土器片1点、ミニチュア土器1点(1)、砥石1点(169)、剝片1点、金属製品1点(195)である。土器・金属製品は炉周辺から、砥石・剝片は南東側から出土した。遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代後期と考えられる。

#### B 性格不明遺構

**SX51** (図版7・14・34) 3C区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。平面形は円形を呈し、北側に幅1.25m、長さ0.72mの隅丸台形状の張り出し部を持つ。規模は長径4.29m、短径3.96mを測る。床面積は10.45m<sup>2</sup>である。長軸方向はN9°Eを指す。ピットは計26基検出した。柱痕は確認できなかった。このうち主柱穴は、深さや配置などからP5・14・22・28の4本を推定した。覆土はいずれも灰黄色のやや粘性を帯びた砂質土である。なお張り出し部からピットは検出できなかった。周溝と考えられる溝は、張り出し部を含め全周し、幅0.08～0.15m、深さ0.10～0.12mを測る。断面形は半円形状で、部分的にV字状を呈する。底面には深さ0.05mほどの小ピットを多数検出した。覆土は2層に分け、灰黄色砂質シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SX52** (図版7・14・35) 4C区に位置する。遺構の検出はⅢa層上面で行った。SD7と重複し、SD7を切っている。遺構の覆土が地山と極めて類似しており、範囲や壁の立ち上がりなどを明確に確認できなかった。また、遺構の中央は試掘坑77Tにより壊されている。平面形は円形を呈し、規模は長径4.13m、短径3.95mを測る。床面積は11.20m<sup>2</sup>である。長軸方向はN27°Eを指す。覆土は5層に分けた。1層は明黄褐色土で、砂・炭化物を少量含む。2～5層は周溝と考えられる溝の覆土で、黄色のシルトを主体とする。ピットは計20基検出した。柱痕は確認できず、深さは0.07～0.35mを測る。このうち主柱穴は、配置な

どからP6・8・14・15を推定した。ピットの覆土は灰黄褐色シルトを主体とする。周溝と考えられる溝は、試掘坑77Tを除き検出できたため、本来は全周していたと考えたい。幅0.07～0.25m、深さ0.10～0.15mを測り、断面形はおおむね逆台形状で、部分的にV字状を呈する。

出土した遺物は、2を含む弥生土器片5点、石核1点(181)、剝片2点である。遺物は主に造構の南側から出土した。造構の時期は、出土した遺物から弥生時代後期と考えられる。

**SX53**(図版10・15・36) 5C区に位置する。造構の検出はⅢb層上面で行った。SD7と重複し、SD7を切っている。造構の中央は試掘坑77Tにより壊されている。平面形は隅丸方形を呈し、北側が狭くなる。規模は長径3.84m、短径3.72mを測る。床面積は11.87m<sup>2</sup>である。長軸方向はN28°Eを指す。覆土は2層に分けた。1層は黄灰色粘質シルト、2層は周溝の覆土で灰黄色砂質シルトを主体とする。ピットは計20基検出した。柱痕は確認できず、深さは一定しない。このうち主柱穴は、配置などからP1・2・9・15を推定した。これらの覆土は砂を含む灰黄色砂質シルトを主体とする。周溝と考えられる溝は、幅0.05～0.16m、深さ0.08～0.11mを測り、断面形はおおむねU字状を呈する。

出土した遺物は、3～5を含む弥生土器片8点、石鐵1点(121)である。遺物は主に造構の中央付近から出土した。造構の時期は、出土した遺物から弥生時代後期と考えられる。

**SX254**(図版8・9・15・37) 3D区に位置する。造構の検出はⅢb層上面で行った。SX314・SD252・SK299と重複し、SX314・SK299を切り、SD252に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、長径4.66m、短径3.50mを測る。床面積は11.88m<sup>2</sup>である。長軸方向はN17°Eを指す。ピットは計8基検出した。柱痕は確認できなかった。このうち主柱穴は、深さや配置などからP1～4を推定した。ピットの径は0.17～0.37mで、覆土は灰黄色シルト・砂を主体とする。周溝と考えられる溝は、南側で離れるがおおむね全周する。幅0.15m、深さ0.15～0.22mを測り、断面形はおおむねU字状で、部分的に逆台形状を呈する。覆土は4層に分けた。1・2層は白色シルト・砂、3・4層は黄灰色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SX277**(図版8・9・16・38) 3・4D・E区に位置する。造構の検出はⅢb層上面で行った。SX314、SD149・252、SK295と重複し、SX314を切り、SD149・252、SK295に切られる。平面形は楕円形と推定され、長径2.98m(残存値)、短径2.36mを測る。床面積は4.91m<sup>2</sup>(残存値)である。長軸方向はN21°Eを指す。ピットは計8基検出した。規模などに共通性がなく主柱穴は不明である。覆土は灰黄色シルトを主体とする。周溝と考えられる溝は、西側では2条検出できた。幅0.15m、深さ0.06～0.08mを測り、断面形は半円形状を呈する。覆土は、内側の溝が浅黄色砂、外側の溝が粘質を帯びる暗褐色土を主体とする。遺物は出土していない。

**SX314**(図版8・9・16・38) 3D・E区に位置する。造構の検出はⅢb層上面で行った。SX254・277、SD149、SR2と重複し、すべてに切られる。造構の南側はトレンチによって壊されている。平面形は隅丸長方形と推定され、長径2.88m(残存値)、短径4.65mを測る。床面積は10.06m<sup>2</sup>(残存値)である。長軸方向はN19°Eを指す。ピットは計11基検出した。このうち主柱穴は、配置などからP1・2を推定した。覆土は粘性を帯びる浅黄色・灰白色シルト・砂を主体とする。周溝と考えられる溝は、幅0.20～0.30m、深さ0.10mを測り、断面形は逆台形状を呈する。覆土は2層に分け、浅黄色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

### C 掘立柱建物

**SB1** (図版7・16・39) 3C区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。SB2、SD16・27と重複し、SD16・27を切り、SB2との新旧関係は不明である。桁行2間、梁間2間の倒柱建物で、東西棟である。床面積は6.76m<sup>2</sup>である。長軸方向はN73°Wを指す。柱穴は計7基検出した。規模は径0.17～0.34m、深さ0.15～0.22mを測り、断面形はおおむねU字状を呈する。各柱穴の覆土は黄灰色粘質土を主体とする。柱痕跡は確認できなかった。周辺及び柱穴内から遺物は出土していない。

**SB2** (図版7・16・40) 3B・C区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。SB1、SD16・27と重複し、SD16・27を切り、SB1との新旧関係は不明である。桁行2間、梁間2間の倒柱建物で、東西棟である。西側に棟持柱状の突出した柱(P2)がある。床面積は5.20m<sup>2</sup>である。長軸方向はN68°Wを指す。柱穴は計9基検出した。規模は径0.11～0.33m、深さ0.13～0.25mを測り、断面形はおおむねU字状を呈する。各柱穴の覆土は黄色のシルト～細砂を主体とする。柱痕跡は確認できなかった。周辺及び柱穴内から遺物は出土していない。

**SB3** (図版7・17・41) 4B区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。桁行1間、梁間1間の倒柱建物で、東西棟である。床面積は5.10m<sup>2</sup>である。長軸方向はN57°Wを指す。柱穴は計4基検出した。規模は径0.20～0.34m、深さ0.11～0.19mを測り、断面形はU字～弧状を呈する。各柱穴の覆土は灰黄色シルトと灰色粘質土を主体とする。柱痕跡は確認できなかった。周辺及び柱穴内から遺物は出土していない。

### D 溝状遺構

**SD6** (図版7・10～12・17・43・44) 4・5・10・11B、5～10C区に位置する。遺構の検出はⅢb～Ⅳa層中で行った。SD27と重複し、SD27を切っている。SRIに沿って南北方向に伸びる。検出できない部分もあったが、おおむね弧状に走る。断面形は弧状を呈する。調査区内での規模は全長67.0m、幅0.12～0.35m、深さ0.08mを測る。底面や周囲には小ビットが多数検出でき、覆土が類似することから付砂施設と考えられる。小ビットは径が0.05～0.15mのものが多数を占め、断面形はV字状を呈する。底面で検出した小ビットは、南側の溝では両端から、北側では中央付近から多く検出できた。周囲の小ビットの配置には規則性が確認できなかった。覆土は青灰色シルトを主体とし、小ビットは地山(Ⅲb層)の砂をやや多く含む。遺物は1層(7C10区)から弥生土器片1点が出土した。

**SD27** (図版5・7・10・11・17・43・44) 4～6B、1～4・6・8・9C区に位置する。遺構の検出はⅢb～Ⅳa層中で行った。SB1・2、SD6・7・16、SK50・54・56と重複し、SD7・16を切り、SB1・2、SD6、SK50・54・56に切られる。北側はSRIに沿って南北方向に伸び、南側はSRIから離れて直線的に伸びる。北側では検出できない部分もあったが、おおむね弧状に走る。断面形は弧状を呈する。規模は全長76.0m、幅0.15～0.56m、深さ0.13mを測る。SD6と同様に底面や周囲に小ビットが多数検出できた。小ビットは径が0.05～0.15mのものが多く、断面形がV字状を呈する。底面で検出した小ビットは、部分的に左右交互に配置した様子が看取できる。周囲の小ビットの配置には規則性が確認できなかった。覆土は青灰色シルトを主体とし、小ビットは地山(Ⅲb層)の砂をやや多く含む。遺物は刺片2点が小ビット内(5B23区)から出土した。

**SD126** (図版11・17) 8C区に位置する。遺構の検出はⅣa層上面で行った。SRIに沿って南北方向

に伸びる。断面形は弧状を呈する。規模は全長4.0m、幅0.11～0.35m、深さ0.07mを測る。周囲には小ピットが不規則に検出できた。小ピットは径が0.05～0.15mで、断面形がV字状を呈する。覆土が類似するため、小ピットがどの溝状遺構に属するか確認できなかった。溝の底面から小ピットは検出できなかった。覆土は青灰色シルトを主体とし、周囲の小ピットは地山(Ⅲb層)の砂をやや多く含む。連続する溝が周辺で検出できなかったことから、部分的に構築された可能性がある。遺物は出土していない。

**SD128** (図版11・17) 8C区に位置する。造構の検出はⅣa層上面で行った。SR1に沿って南北方向に伸びる。断面形は不整形を呈する。規模は全長1.0m、幅0.17～0.32m、深さ0.12mを測る。周囲には小ピットが不規則に検出できた。溝の底面には小ピットは存在しなかった。小ピットは径が0.05～0.15mで、断面形がV字状を呈する。覆土は青灰色シルトを主体とし、周囲の小ピットは地山(Ⅲb層)の砂をやや多く含む。SD126と同様に連続する溝が周辺で検出できないことから、部分的に構築された可能性がある。遺物は出土していない。

**SD149** (図版8・9・17・44) 2～5E区に位置する。造構の検出はⅢb層上面で行った。SX277・314、SD16・252・253・320、SR2と重複し、SX277・314を切り、SD16・252・253・320、SR2に切られる。SK340との新旧関係は不明である。SR2に沿って南北方向に伸びる。断面形は弧状を呈する。調査区内での規模は全長27.9m、幅0.12～0.25m、深さ0.20mを測る。溝の底面や周囲には小ピットが不規則に検出できた。小ピットの断面形はV字状を呈する。覆土はにぶい黄色シルトを主体とし、小ピットは地山(Ⅲb層)の砂をやや多く含む。遺物は出土していない。

**SD316** (図版2～4・6・8・17・42) 05B・C、05～03・1・2D、1・2E区に位置する。造構の検出はⅢb層上面で行った。SD320と重複し、SD320に切られる。SR1の東岸に沿って伸びる。造構の残存状況は、並走するSD317に比して不良である。断面形は弧状を呈する。規模は全長81.1m、幅0.22～0.50m、深さ0.30mを測る。溝の底面には小ピットが検出できた。小ピットの径は0.05～0.15mを測り、北区の溝状遺構の小ピットと同規模である。小ピットの配置に規則性は確認できなかった。覆土は青灰色シルトを主体とし、小ピットは地山(Ⅲb層)の砂をやや多く含む。遺物は弥生土器片が1点出土した(04D8区)。

**SD317** (図版2～4・6・8・17・42) 05B・C、05～02D区に位置する。造構の検出はⅢb層上面で行った。SD320、SK335～338・343と重複し、SK335～338・343を切り、SD320に切られる。SR1の東岸に沿って伸びる。04D区では、蛇行するSR1に沿って、ほぼ直角に屈曲する。断面形は弧状を呈する。調査区内での規模は全長82.2m、幅0.40～0.72m、深さ0.16mを測る。溝の底面に小ピットが検出でき、01・1D区では周囲からも検出した。小ピットは径0.05～0.15mを測り、北区の溝状遺構の小ピットと同規模である。小ピットの配置に規則性は確認できなかった。覆土はにぶい黄色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SD328** (図版2～4・6・17) 05B、05～03C、05～1D区に位置する。造構の検出はⅢb層上面で行った。SR1の東岸に沿って伸びる。SD317同様に、04D区ではほぼ直角に屈曲する。断面形は弧状を呈する。規模は全長58.2m、幅0.18～0.95m、深さ0.08mを測る。溝の底面及び周囲から小ピットが部分的に検出できた。小ピットは径0.05～0.15mで、配置に規則性は確認できなかった。覆土は灰白色シルトを主体とし、溝・小ピットともに粘性が強い。遺物は出土していない。

**SD347** (図版3・17) 04C区に位置する。造構の検出はⅢb層上面で行った。SR1の東岸に沿って伸びる。断面形は不整形を呈し、凸凹が著しい。規模は全長15.2m、幅0.13～0.54m、深さ0.12mを測る。溝の底面から数基の小ピットを検出した。覆土は青灰色シルトを主体とし、溝・小ピットともに粘性が強い。遺

物は出土していない。

**SD349** (図版 12・17) 11・12B 区に位置する。遺構の検出は IV a 層上面で行った。SR1 の東岸に沿って南北方向に伸びる。断面形は弧状を呈する。規模は全長 18.0m、幅 0.21 ~ 0.30m、深さ 0.05m を測る。当初 SD6 に続く溝状遺構と想定していたが、連続しないことから別遺構とした。溝の底面や周囲には小ビットが検出できた。小ビットは径 0.05 ~ 0.15m を測る。溝の底面の小ビットは中央に位置しており、これは SD6 の北側で確認した傾向と一致する。周囲の小ビットの配置には規則性は確認できなかった。小ビットは断面形が V 字状を呈する。覆土は青灰色シルトを主体とし、小ビットは地山 (III b 層) の砂をやや多く含む。遺物は出土していない。

## E 溝

**SD7** (図版 7・10・17) 3・4B、4 ~ 7C、6・7D 区に位置する。遺構の検出は III b ~ IV a 層中で行った。SX52・53、SD27、SK56 と重複し、SK56 を切り、SX52・53、SD27 に切られる。北側は 7C 区で途切れている。南側は擾乱によって壊されていた。南側では SR1 から離れる。断面形は逆台形状を呈する。規模は全長 36.7m、幅 0.60 ~ 1.10m、深さ 0.30m を測る。覆土は 5 層に分けた。灰黄褐色シルトを主体とする。遺物は南側 (4B18 区) の覆土 1 層から弥生土器片 1 点 (6) が出土した。

**SD16** (図版 7 ~ 9・17・44) 2B、2・3C、3・4D、4E 区に位置する。遺構の検出は III b 層上面で行った。SB1・2、SD27・149・253、SR2 と重複し、SD149 を切り、SB1・2、SD27・253、SR2 に切られる。北東から南西方向に伸びる溝で、SR1 と SR2 の間を直行するが、東側では南に、西側では北に若干振れている。西側では SR1 方向に伸び、徐々に浅くなり途切れている。断面形はおおむね半円形を呈する。規模は全長 30.5m、幅 0.52 ~ 0.97m、深さ 0.30 ~ 0.38m を測る。覆土は 6 層に分けた。灰黄褐色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SD17** (図版 8・9・17) 4・5D 区に位置する。遺構の検出は III b 層上面で行った。北東から南西方向の溝である。断面形は逆台形状を呈する。規模は全長 16m、幅 0.36m、深さ 0.10m を測る。覆土は単層で、浅黄色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SD252** (図版 8・9・17・44) 3・4D、2 ~ 4E 区に位置する。遺構の検出は III b 層上面で行った。SX254・277、SD149・253・320、SK295・299・340 と重複し、SX254・277、SD149、SK295・299 を切り、SD253・320、SK340 に切られる。南東側は調査区外へ伸びる。「コ」の字状に走る溝で、SR2 との新旧関係は明瞭ではない。断面形はおおむね逆台形状で、南側では部分的に弧状を呈する。調査区内での規模は全長 23.1m、幅 0.56 ~ 1.60m、深さ 0.25 ~ 0.34m を測る。覆土は 3 層に分けた。上層は浅黄褐色シルト、下層は黄灰色シルトで、北側では中位に白色砂を含む。遺物は出土していない。

**SD253** (図版 8・9・17) 4D・E 区に位置する。遺構の検出は III b 層上面である。SD16・149・252、SR2 と重複し、SD16・149・252 を切り、SR2 に切られる。北東から南西方向に伸びる。SD16 との新旧関係は 4D 区の土層断面で確認できたが、これ以上の伸びは検出できないことから、SD16 との接点付近で終息するものと考えられる。断面形は半円形を呈する。規模は全長 8.5m、幅 0.80 ~ 1.45m、深さ 0.37m を測る。覆土は 3 層に分けた。上部は灰白色土を主体とし、部分的に白色細砂を含む。下部は灰黄色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SD320** (図版 4・6・8・9・17・44) 03 ~ 01C、01 ~ 2D、2・3E 区に位置する。遺構の検出は III b 層上面で行った。SD316・317・252、SK340、SRI・2 と重複し、すべてを切っている。北東から南西方向

に伸びる。断面形は南側では逆台形状、北側では半円形状を呈する。底面はおおむね平坦であるが2E3区で0.10mほどの段があり、南側が低くなっている。調査区内での規模は全長53.1m、幅0.40～0.57m、深さ0.20～0.45mを測る。覆土は単層で、北側では明黄褐色シルト、南側では青灰色シルトを主体とする。遺物は北側(1D18区)の覆土1層から弥生土器片1点、須恵器片2点(198)が出土した。

**SD329** (図版2・17) 05B・C区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。東西方向の溝で端部は徐々に浅くなる。断面形は弧状を呈し、底面は平坦である。規模は全長7.4m、幅0.20～0.40m、深さ0.05～0.10mを測る。覆土は2層に分けた。灰黄色シルトを主体とし、部分的に粗砂を含む。遺物は出土していない。

**SD330** (図版2・3・17) 04・05D区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。南北方向に伸びる溝で北側は徐々に浅くなり、南側は調査区外へと続く。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。調査区内での規模は全長10m、幅0.10～0.40m、深さ0.20mを測る。覆土は3層に分けた。灰黄色シルト主体で、部分的に上層に粗砂、下層に灰色砂を微量含む。遺物は出土していない。

**SD334** (図版3・17・44) 03・04D区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。東西方向に伸びる。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。規模は全長3.6m、幅0.30～0.40m、深さ0.25mを測る。覆土は3層に分けた。黄灰色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SD339** (図版2・17) 05C・D区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。SK324と重複し、SK324を切っている。東西方向の溝で両端部は徐々に浅くなる。断面形は弧状を呈し、底面は平坦である。規模は全長7.3m、幅0.14～0.40m、深さ0.05～0.10mを測る。覆土は単層で灰黄色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SD348** (図版3・17) 04C区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。南北方向の溝で両端部はSR1と重複し、新旧関係は不明である。断面形は半円形状である。規模は全長3.3m、幅0.25～0.40m、深さ0.32mを測る。覆土は2層に分けた。灰黄色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

## F 土 坑

**SK3** (図版18・45) 6D区に位置する。遺構の検出はIVa層上面で行った。平面形は橢円形、断面形は弧状を呈する。覆土は単層で、青灰色シルトを主体とする。遺物は覆土から弥生土器片26点(7)が出土した。

**SK13** (図版7・18・45) 4B区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。平面形は円形、断面形は逆台形状を呈する。覆土は2層に分けた。黄灰色粘質シルトを主体とする。遺物は1層から弥生土器片6点(8)が出土した。

**SK18** (図版10・18) 6C区に位置する。遺構の検出はIVa層上面で行った。遺構の大部分は試掘坑75・77Tに壊されており、平・断面形は不明である。覆土は単層で、灰黄色シルトを主体とし、SK19・20の覆土と類似する。遺物は1層から不定形石器1点(168)が出土した。

**SK19** (図版10・18・45) 6C区に位置する。遺構の検出はIVa層上面で行った。SK20と重複し、SK20を切っている。平面形は橢円形、断面形は逆台形状を呈する。覆土は単層で、灰黄色シルトを主体とする。遺物は覆土から弥生土器片1点、不定形石器1点、剝片1点が出土した。

**SK20** (図版10・18・45) 6C区に位置する。遺構の検出はIVa層上面で行った。SK19と重複し、SK19に切られる。平面形は長橢円形、断面形は逆台形状を呈する。覆土は単層で、灰黄色シルトを主体

とする。遺物は覆土から弥生土器片1点(9)、剝片1点が出土した。

**SK50** (国版10・18・45) 5B区に位置する。遺構の検出はⅣa層上面で行った。SD27、SR1と重複し、SD27を切り、SR1に切られる。残存部の形状から、平面形は円形と推定される。断面形は逆台形状を呈する。覆土は4層に分けた。灰色シルト～砂を主体とする。遺物は1層から弥生土器片3点が出土した。

**SK54** (国版10・18・45) 5B区に位置する。遺構の検出はⅣa層上面で行った。SD27と重複し、SD27を切っている。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。覆土は単層で、灰色砂を主体とする。遺物は覆土から弥生土器片1点、剝片1点が出土した。

**SK56** (国版7・18) 4B区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。SD7・27と重複し、SD27を切り、SD7に切られる。残存部の形状から、平面形は梢円形と推定される。断面形は不明である。覆土は4層に分けた。1層は青灰色シルト、2～4層は灰黄褐色の粘質土や砂質土を主体とする。遺物は出土していない。

**SK131** (国版9・18・45・46) 5D区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。平面形は梢円形、断面形は逆台形状を呈する。覆土は2層に分けた。1層は青灰色シルト、2層は青灰色粘質土を主体とし、炭化物がブロック状に混入する。遺物は出土していない。

**SK256** (国版18・46) 7E区に位置する。遺構の検出はⅣb層上面で行った。遺構の北側は試掘坑70Tに、東側は調査区際排水溝に墳されており、平面形は不明である。残存部の形状から、断面形は半円形と推定される。SK256と同様に上部は削平されている。覆土は2層に分けた。1層は明青灰色シルト、2層は灰オリーブ色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SK278** (国版19・46) 7E区に位置する。遺構の検出はⅣb層上面で行った。遺構の南側は試掘坑70Tに、東側は調査区際排水溝に墳されており、平面形は不明である。残存部の形状から、断面形は半円形と推定される。SK256と同様に上部は削平されている。覆土は2層に分けた。1層は明青灰色シルト、2層は灰オリーブ色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SK295** (国版8・9・19・46) 3D区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。SX277、SD252と重複し、SX277を切り、SD252に切られる。残存部の形状から、平面形は梢円形と推定される。断面形は弧状を呈する。覆土は4層に分けた。灰黄色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SK299** (国版8・9・19・46) 3D区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。SX254P3、SD252と重複し、SX254P3、SD252に切られる。残存部の形状から、平面形は梢円形、断面形は弧状と推定される。覆土は4層に分けた。灰黄色砂を主体とする。遺物は出土していない。

**SK300** (国版7・19・46) 3B区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。平面形は梢円形、断面形は弧状を呈する。覆土は単層で、灰黄色シルトを主体とする。遺物は覆土から剝片1点が出土した。

**SK301** (国版7・19・46) 4-C5-D区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。トレンチにより、中央を墳されている。平面形は長梢円形、断面形は箱状を呈する。覆土は6層に分けた。それぞれ灰黄色のシルトや砂質土を主体とする。遺物は4層から石錐1点(125)が出土した。

**SK321** (国版5・19・47) 01B区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。残存部の形状から、平面形は不整梢円形と推定される。断面形は段階状を呈する。覆土は4層に分けた。1層は青灰色シルト、2～4層は粘質土を主体とする。遺物は出土していない。

**SK324** (国版2・19・47) 05C区に位置する。遺構の検出はⅢb層上面で行った。SD339と重複し、SD339に切られる。残存部の形状から、平面形は不整梢円形と推定される。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦である。覆土は6層に分けた。灰黄色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SK326** (図版 4・20・47) 02D 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。SI318P18 と重複し、SI318P18 を切っている。平面形は不整形、断面形は弧状を呈する。覆土は単層で、青灰色粘質土を主体とする。遺物は出土していない。

**SK327** (図版 4・20・47) 02D 区に位置する。造構の検出は SI318 の床面で行った。SI318 と重複し、SI318 を切っている。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。覆土は 7 層に分けた。1・2 層は暗灰黄色シルトを主体とし、3～7 層には SI318 の炉の覆土の 1 部が流れ込んでいた。遺物は 1～4 層から 10～13 層を含む弥生土器片 203 点が出土した。

**SK333** (図版 3・20・47) 04D 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。平面形は長楕円形、断面形は弧状を呈する。覆土は 2 層に分けた。灰黄色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SK335** (図版 6・20・47) 1D・E 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。SD317 と重複し、SD317 に切られる。残存部の形状から、平面形は楕円形、断面形は弧状と推定される。覆土は 2 層に分けた。青灰色粘質土を主体とし、SK336・351 の覆土と類似する。遺物は出土していない。

**SK336** (図版 6・20・48) 01D 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。SD317 と重複し、SD317 に切られる。残存部の形状から、平面形は楕円形、断面形は弧状と推定される。断面形は弧状を呈する。覆土は 2 層に分けた。青灰色粘質土を主体とし、SK335・351 の覆土と類似する。遺物は出土していない。

**SK337** (図版 3・20・48) 04D 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。SD317 と重複し、SD317 に切られる。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。覆土は 4 層に分けた。灰青色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SK338** (図版 3・21・48) 04D 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。SD317 と重複し、SD317 に切られる。平面形は長楕円形を呈する。残存部の形状から、断面形は逆台形状と推定される。覆土は 2 層に分けた。黄灰色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SK340** (図版 8・21・48) 2・3E 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。SD149・252・320 と重複し、SD252 を切り、SD320 に切られ、SD149 との新旧関係は不明である。平面形は長楕円形、断面形は逆台形状を呈する。覆土は 3 層に分けた。黄色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SK341** (図版 8・21・48) 2C・D 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。平・断面形は不整形を呈する。覆土は単層で、青灰色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

**SK342** (図版 4・21・48) 03D 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。平面形は長楕円形、断面形は弧状を呈する。覆土は単層で、青灰色粘質土を主体とする。遺物は出土していない。

**SK343** (図版 8・21・48) 2D 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。SD317 と重複し、SD317 に切られる。残存部の形状から、平面形は楕円形と推定される。断面形は半円形状を呈する。覆土は 2 層に分けた。青灰色の粘質土や砂質土を主体とする。遺物は出土していない。

**SK346** (図版 4・7・21・48) 01-02D 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。トレンチにより、南側を壊されている。残存部の形状から、平面形は長楕円形と推定される。断面は弧状を呈する。覆土は 2 層に分けた。1 層は青灰色粘質土と砂の互層で、2 層は砂を主体とする。遺物は出土していない。

**SK350** (図版 4・21・49) 02D 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。トレンチによって北側を壊されている。SI318 と重複し、SI318 を切っている。平面形は不整形である。断面は弧状を呈する。覆土は単層で、明黄褐色粘質土を主体とする。遺物は覆土から 14～16 を含む弥生土器片 16 点が出土した。

**SK351** (図版 6・21・49) 1E 区に位置する。造構の検出はⅢ b 層上面で行った。平面形は楕円形、断

面形は半円形状を呈する。覆土は2層に分けた。青灰色粘質土を主体とし、SK335・336の覆土と類似する。遺物は出土していない。

## G 自然流路

**SR1** (図版49) 北区では西側を、南区では中央を南北方向に継続している。蛇行しているため、3・4B区で一旦調査区外へと逸れるが、2B区から再び現れる。断面形は全体をとおしてほぼ逆台形状を呈する。調査区内での全長は約127mを測る。幅は、北区では西岸が調査区外であるため確認できないが現況で約10mを測り、南区では約22mである。遺物の出土は土層断面B(6B・C区)付近が最も多く、それ以外では希薄である。層位別では8・9層から最も多く出土した。遺物のほとんどは弥生土器片である。SR1は3か所の土層断面で堆積状況を確認した。

**土層断面A** (図版22-49) 9B・C区南側の土層断面である。幅6.7m、深さ1.2m、底面標高14.4mを測る。上部はII b2層がおおむね水平に堆積しており、平面プランの検出はIV a層上面で行った。覆土は8層に分けた。1・2・4～6・8層はレンズ状に堆積している。1～6層間に混入する灰黄色シルトブロックはII c層に由来すると推測される。5層は暗紫灰色粘質土で炭化物を多く含み、SR1のすべての土層断面で比較的明瞭に確認できたため、流路内堆積土の健層とした。8層は東岸からの流れ込みである。遺物は剝片や、摩耗・風化が著しい弥生土器片が各層から少量出土した。

**土層断面B** (図版22-49) 6B・C区北側の土層断面である。幅7m、深さ1.4m、底面標高14.6mを測る。上部はII b2層がおおむね水平に堆積しており、平面プランの検出はIV層上面で行った。覆土は9層に分けた。2・5・6層はレンズ状に堆積している。4・6・8層は東岸からの流れ込みである。3・7・9・10層は西岸からの流れ込みである。覆土中に混入する灰黄色シルトブロックはII c層に由来すると推測される。II c層は8層の上部に流れ込むことを確認した。5層に含まれる炭化物は土層断面Aほど顕著ではないが、ほかの層と比べるとやや多い。遺物は弥生土器片が各層から出土し、特に8・9層から多量に出土した。9・10層は宇津ノ台式土器が多い傾向になり、そのほかは天王山式土器を主体とする。6B17区では9層から、1個体分の土器片がまとまって出土した(24)。

**土層断面C** (図版23-49) 02B～E区北側の土層断面である。幅9.7m、深さ0.6m、底面標高14.6mを測る。南区では西岸が確認でき、SR1が平均して10m前後の幅を持つことが判明した。北区に比べ浅い。上部はII b2層がおおむね水平に堆積し、平面プランの検出はII b層上面で行った。覆土は7層に分けた。1・2・5・6層はレンズ状に堆積している。8層は東岸からの流れ込みである。7・9層は西岸からの流れ込みである。5層は、暗紫灰色土を中量含むが主体は青灰色シルトで、炭化物は土層断面Bより少ない。遺物は弥生土器片と剝片が9層からやや多く出土した。出土土器は天王山式土器を主体とする。

**SR2** (図版23-49) 3～5E区において、SR2の西岸を検出した。調査区内での全長は27m、幅3m、深さ0.5m、底面標高15.3mを測る。上部はII b2'層がおおむね水平に堆積し、平面プランの検出はIII b層上面で行った。覆土は9層に分けた。1・4・5層は西岸からの流れ込みである。SR1の覆土との対応は不明であるが、2層は炭化物を多量含むことから、SR1の5層に相当する可能性がある。全体的に粘質土を主体とし、底面も粘質土である。遺物は7・9層から摩耗・風化が著しい弥生土器片が数点出土したのみである。

# 第V章 遺物

## 1 遺物の概要

遺物は収納箱（59 × 38.5 × 15cm）7箱分が出土した。遺物のほとんどが弥生時代中期後半～後期前半に帰属するものである。種別は土器約2,000点、石器211点、金属製品1点、ガラス小玉1点である。そのほか、縄文土器、須恵器、鉄滓、中・近世陶磁器などが出土した。

弥生土器は大半が小破片で、器形や文様を把握できるものは少ない。時期は後期の天王山式が多く、中期の宇津ノ台式がそれに続く。また東北系の土器を主体とする。器種は壺・壺・ミニチュア土器があり、壺が多数を占める。石器は剥片・石器が多数を占め、石鍬5点、石鎌未成品2点、石錐1点、石匙3点、範状石器3点、範状石器未成品4点、両極石器5点、不定形石器46点、石核7点、砥石3点、凹石1点、敲石1点、器種不明（破損品）2点、剥片・碎片128点が出土した。石質は頁岩を主体とする。頁岩については【秦2001】に従い、頁岩1〔いわゆる「半透明の頁岩」〕と頁岩2〔そのほかの頁岩〕に分類した。

遺物はグリッド別には北区の4～7B～D区、南区の03D・04B・06C区、層位的にはII b2層から多く出土した。自然流路内は05・02・2・6・7B、05・04C区付近の6・8層からまとまって出土した。また、6・7B区の流路9・10層から多くの弥生土器片が出土した。なお、遺構内から出土した遺物は少量であった。

## 2 遺物各説

### A 弥生時代

#### 1) 弥生土器

本遺跡出土土器の器種は壺が圧倒的に多く、壺・ミニチュア土器が少量混ざる。分類は器種に問わらず一括して行う。型式・文様ごとに分類し、両者の組み合わせによりその傾向を分析したい。型式の分類に関しては、砂山遺跡【野田2003】を参考に行った。破片資料が多いため、器形分類は行わない。

#### 分類

##### (型式)

I群 砂山1・2群【野田前掲】に相当する土器群

II群 砂山3・4群【野田前掲】に相当する土器群

III群 型式不明の土器群

##### (文様)

1類 重菱形文を持つもの。

2類 平行沈線文と鋸歯状文を組み合わせた文様を持つもの。

3類 平行沈線文と連弧文を組み合わせた文様を持つもの。

4類 区画文としての交互刺突文を持つもの。

5類 縄文と弧線文を組み合わせた文様、あるいはそれに横線が加わるもの。

6類 沈線のみ、あるいはそれに刺突<sup>1)</sup>・縄文が加わるもの。

7類 縄文のみ施されるもの。

8類 ナデやハケ調整のみで無文のもの。

## 各 説

**SI318FP1** (図版24・50-1) ミニチュア土器の胴～底部である。1層から出土した。胎土が粗く、焼成が不良であり、状態は良くない。ナデにより調整される。断面に輪積が見られないことから、手づくねによって製作されたと推測される。Ⅲ群8類に属する。

**SX52・P201** (図版24・50-2) 壺の口縁部である。SX52の1層とP201(4B19区)の1層から出土した破片が接合した。口縁部は頭部から外反する。内・外面はハケにより調整され、外面には範描き沈線による文様が描かれる。また、竜状工具によると推測される横長の刺突が横位に巡っている。I群6類に属する。

**SX53** (図版24・50-3～5) 3は壺の口縁部、4・5は壺の胴部である。1層から出土した。3の口唇部はハケ調整により面取りされる。外面には斜位の刺みと交互刺突が施される。II群4類に属する。4は内・外面がハケにより調整される。5は外面に縄文RLが横位に施される。内面は摩滅し、土器の中に埋没した植物質のものが炭化し、それが圧痕となって確認できる。4はⅢ群8類、5はⅢ群7類に属する。

**SD7** (図版24・50-6) 壺の胴部である。1層から出土した。外面には縄文Sが横位に施され、内面はハケにより調整される。Ⅲ群7類に属する。

**SK3** (図版24・50-7) 壺の胴～底部である。1層から出土した。外面は縄文LRが横位に施され、底部はハケにより調整される。Ⅲ群7類に属する。

**SK13** (図版24・50-8) 壺の底部である。2層から出土した。外面はハケにより調整される。Ⅲ群7類に属する。

**SK20** (図版24・50-9) 壺の胴部である。1層から出土した。内・外面はハケにより調整される。外面には沈線が見られる。Ⅲ群8類に属する。

**SK327** (図版24・50-10～13) 10-11は壺の口縁部、12は壺の胴部、13は胴～底部である。10は1・2層、11は2層、12はIIc層と1・2層、13は1～4層から出土した。4点は胎土などから同一個体と考えられる。胴部が張り出し頭部ではなく口縁部が外反する器形である。口唇部には縄文LRが横位に施される。外面は頭部が無文帯になるほか、口縁部付近は縄文LRが縦位、胴～底部は横位に施される。内面はハケにより調整される。また、胴部には補修孔が穿たれている。II群7類に属する。

**SK350** (図版24・50-14～16) 14は壺の頭部、15・16は壺の胴部である。1層から出土した。3点は胎土などから同一個体と考えられる。14は断面が緩やかに屈曲しており、口縁部が外反する器形である。15・16は外面に縄文RLが斜位に施される。14～16はⅢ群7類に属する。

**SR12層** (図版24・50-17～22) 17は壺の口縁部、18～20は壺の胴部、21は壺の肩部、22は壺の底部である。17は口唇部に縄文RLが施される。内・外面はハケにより調整され、内面のハケメの方が深い。Ⅲ群8類に属する。18は外面に3条同時施文の沈線が横位に2列描かれ、その間を3条同時施文の沈線が鋸歯状に描かれる。I群2類に属する。19は外面に1条の沈線が横位に描かれる。Ⅲ群6類に属する。

1)「刺突」は断面形がU字形でやや深く、「押圧」は断面形が皿状で滑らかに施されたものとした。現時点ではそれが型式学的な差なのを解明されていないが、本報告では两者を使い分けている。

20は外面に縄文RLが横位に施され、また外面に初痕が確認できる（図版50）。Ⅲ群7類に属する。21は外面に地文として縄文LRが横位に施され、横位の沈線と弧状の沈線が巡り、その下に上開きの連弧文が描かれる。Ⅱ群3類に属する。22は立ち上がりが緩やかであることから、胴部の張る壺と推定される。外面は底面付近まで縄文RLが横位に施される。Ⅱ群7類に属する。

**SR1 4層**（図版24・50～23） 壺の口縁部である。口縁部に隆筋を貼り付け、頂部に刻みが施される。平行する2条の沈線が描かれる。内・外面はハケにより調整され、内面のハケメの方が深い。I群6類に属する。

**SR1 7層**（図版24・50～24～26） 24は口縁～底部、25・26は壺の口縁～胴部である。24は底部から胴部が大きく張り出し、頭部でやすほまり、口縁部が外反する。口唇部は縄文LRが横位に施される。外面は頭部が無文帯となるほか、縄文LRが横位に施され、内面は口縁部に縄文LRの圧痕が帯状に施される。Ⅱ群7類に属する。25は頭部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が外反する。内・外面はハケにより調整される。26は頭部が緩やかに屈曲し、口縁部が外反する。口唇部はハケ調整により面取りされる。内・外面はハケにより調整される。25・26はⅢ群8類に属する。

**SR1 8層**（図版24・50～27～45） 27～31・41は壺の口縁部、32～40・42・43は壺の胴部、44・45は壺の底部である。

27・28・32～34は胎土などから同一個体と考えられる。頭部はやすほまり、口縁部は外反する。内・外面には深いハケメが見られる。ハケ調整の後、2条同時施文の沈線が描かれる。口唇部には、縄文Lの圧痕が蛇行状に施される。34では下位に沈線で区画された無文帯が見られる。35は外面上位に深いハケメが見られ、2条同時施文の沈線が鋸歯状に描かれ、沈線の下位は無文帯となる。36・37は胎土などから同一個体と考えられる。内・外面はハケにより調整され、2条同時施文の沈線が横位に描かれる。38は外面に深いハケメが見られ、2条同時施文の沈線が斜位に描かれる。27・28・32～38はI群2類に属する。29・30・39は胎土などから同一個体と考えられる。口縁部は外反する。内・外面には深いハケメが見られる。ハケ調整の後、2条同時施文の沈線が描かれる。口唇部には、縄文Lの圧痕が蛇行状に施される。31は口縁部が緩やかに外反する。口唇部には斜位の刻みが施される。内・外面はハケにより調整され、外面に横位の沈線が描かれる。40は内・外面にハケ調整が見られ、外面に2条同時施文の沈線が横位に描かれる。29～31・39・40はI群6類に属する。

41は外面下部にわずかに沈線が確認できる。Ⅲ群8類に属する。42は地文に縄文RLを斜位に施しており、上開きの弧線文が描かれる。Ⅱ群5類に属する。43は縄文RLが斜位に施される。Ⅲ群7類に属する。44は断面にスカが付着していることから、破損した後に被熱している。45は44の底面が平らであるのに対し、やや丸みを持つ。44・45はⅢ群8類に属する。

**SR1 9層**（図版24・25・50・51～46～71） 46は小型土器の胴～底部、47～50・57～62は壺の口縁部、51～56・63～69は壺の胴部、70・71は壺の底部である。

46は立ち上がりが急であることから、筒形になる可能性がある。内・外面はハケにより調整され、3条の平行する沈線が巡り、上開きの弧線文が描かれる。Ⅲ群6類に属する。

47は口縁部が短く外反し、口唇部には斜位の刻みが施される。内・外面はハケ調整され、内面に深いハケメが見られる。48は口唇部に連続した押圧が施され、外面は2条同時施文の沈線によって区画し、口縁部を無文帯としている。内面は口縁部に横位の沈線が1条巡る。54は外面に密に沈線が描かれる。一部沈線間に縄文が確認できるが、捺りは不明である。47・48・54はI群6類に属する。50～52は胎土

などから同一個体と考えられる。52は4層から出土した破片と接合した。器形は胴部がやや張り、頭部で緩やかにすぼまり、口縁部は「く」の字状に外反する。外面は口縁部に刻みが施され、横位の沈線によって文様帯が区画される。文様は沈線による重菱形文が描かれ、菱形の鋭角の頂点には継長の刺突が施される。胴部下位には連続する継長の刺突が横位に巡る。50～52はI群1類に属する。49は口縁部が短く外反し、端部は折り返し気味に反っている。3条同時施文の沈線が横位・鋸歯状に描かれる。53には2条同時施文の沈線が横位・鋸歯状に描かれる。49・53はI群2類に属する。55・56は胎土などから同一個体と考えられる。外面は深いハケメにより調整され、その後、繩文LRが横位に施され、平行する沈線が4条描かれる。I群7類に属する。

57は口縁部に連続した継長の刺突が施され、2条同時施文の沈線により区画される。沈線の下位には繩文LRが横位に施され、下開きの連弧文が描かれる。内面は外面の刺突から半単位ずらした位置に継長の押圧が連続して施される。58は口縁部が外反し、端部がやや内湾気味になる。口唇部には継位の刻みがわずかに確認できる。外面には指頭圧痕のような押圧が連続し、押圧と押圧の間が瘤状の突起となっている。突起の中央には継に刻みが施される。その下位には繩文RLが横位に施され、2条同時施文の沈線と下開きの連弧文が描かれる。67は外面に平行する3条の沈線と弧線が描かれる。57・58・67はII群3類に属する。59は外面の口縁部に連続した継長の刺突が施され、2条同時施文の沈線により区画される。内面の口縁部は外面の刺突から半単位ずらした位置に継長の押圧が連続して施される。63・64は胎土などから同一個体と考えられる。外面は繩文LRが横位に施され、沈線が横・斜位に描かれる。65・66は胎土などから同一個体と考えられる。胴部には繩文LRが横位に施され、沈線が2条平行し、その下位に上開きの弧線文が描かれる。68は外面に横位・弧状の沈線によって半円形状の区画が作られ、区画内には繩文LRが横位に充填されている。69は外面に弧状の沈線が描かれ、撫糸文が施される。59・63～66・68・69はII群5類に属する。60はやや外反する口縁部で、端部が肥厚している。口唇部には沈線が横位に巡る。外面は肥厚した部位に連続する斜位の押圧が施され、その下に横位の沈線が描かれる。地文は繩文LRが横位に施され、上開きの弧線文が描かれる。内面の肥厚した部位には繩文LRの圧痕が継位に施される。61は口縁部が受け皿状に聞く器形である。外面には繩文RLが横位に施され、内面には深いハケメが見られる。60・61はII群7類に属する。62は口縁部が外反する。内・外面はハケにより調整される。II群8類に属する。70は反り返るように立ち上がるるので、底面と胴部の境界が明瞭である。内・外面はハケにより調整される。71は緩やかに立ち上がる器形で、内面中央が盛り上がる。内・外面はハケにより調整される。70・71はIII群8類に属する。

SR1 10層(国版25・51・72～88) 72・73・78・79は壺の口縁部、74～77・80～84は壺の胴部、85～88は壺の底部である。

72は9層から出土した破片と接合した。口縁部は外反し、口唇部には繩文RLが横位に施される。外面は口縁部が無文帶となり、頭部以下に4条同時施文の沈線が横位・鋸歯状に描かれる。73～77は胎土などから同一個体と考えられる。胴部が張り、頭部がややすぼまり、口縁部が外反する器形である。口唇部には継位の押圧が連続して施される。外面の口縁部は無文帶となり、胴部は2条または3条同時施文の沈線が、横位・鋸歯状に描かれる。胴部下位にはやや深いハケメが見られる(77)。72～77はI群2類に属する。

78は内・外面の口縁部に内面と外面で半単位ずらして継位の押圧が連続して施される。外面は押圧の下位に交差刺突文が描かれ、頭部が無文帶となる。80は外面に交差刺突文が描かれ、その下位に3条同

時施文の沈線が斜位に描かれる。78・80はⅡ群4類に属する。79は口縁部が外反する。外面は無文帯となり、頭部に横位の沈線が1条見られる。Ⅲ群6類に属する。81は縄文RLが横位に施され、横位の沈線と下開きの連弧文が描かれる。Ⅱ群3類に属する。82には縄文RLが斜位に施され、2条の平行沈線が描かれる。Ⅱ群6類に属する。83にはやや深いハケメが横・縦位に見られ、沈線が横位・弧状に描かれる。Ⅱ群5類に属する。84は脣部が張り出し、頭部ですぼまる器形である。内・外面はハケにより調整される。86は9層から出土した破片と接合した。内・外面はハケにより調整される。87は立ち上がりの角度が緩やかである。大きく脣部の張る器形となるため、壺の可能性もある。また、断面にススが付着していることから、破損後に被熱している。88は内・外面にやや深いハケメが見られる。底面の一部が窪んでいる。84・86～88はⅢ群8類に属する。85は外面に縄文RLが横位に施される。Ⅲ群7類に属する。

包含層 Ⅱ b2 層（図版25・51～89～104） 93～96は壺の口縁部、89～92・97～103は壺の脣部、100は壺の脣部、104は壺の底部である。

89は外面に2条同時施文の沈線が横位に、沈線1条が斜位に描かれる。90は外面に横位と鋸歯状の沈線が描かれる。89・90はⅠ群2類に属する。91は外面に平行する横位の沈線が2条描かれる。92は外面に2条同時施文の沈線が横位に描かれる。91・92はⅠ群6類に属する。93は内湾する波状口縁となり、口縁部内・外面に縦位の連続する押圧が施される。外面には、横位の沈線の直下に波状の沈線が描かれる。95は口縁部に隆帯が貼り付けられる。隆帯の中央部には弧状の沈線が描かれる。96は95と同様に口縁部に隆帯が貼り付けられる。97には斜位の強めのハケメが確認でき、横位の沈線が描かれる。98には横・斜位の沈線が描かれる。93・95～98はⅡ群6類に属する。94は口脣部に縄文LRが横位に施される。口縁部には、指頭圧痕のような皿状の押圧が連続して施される。Ⅱ群8類に属する。99は波状の隆帯間に刺突が施され、交互刺突文となっている。Ⅱ群4類に属する。100には縄文RLが横位に施され、横位と弧状の沈線が描かれる。101には2重の沈線によって縦長の不整橢円形が描かれ、その中は縄文RLが横位に充填される。100・101はⅡ群5類に属する。102は横位と弧状の沈線が描かれる。Ⅲ群6類に属する。103は内・外面がハケにより調整され、内面に強めのハケメが確認できる。104は内・外面がハケにより調整される。103・104はⅢ群8類に属する。

包含層 Ⅲ a 層（図版25・51～105～114） 105～113は壺の脣部、114は壺の底部である。105・106には縄文RLが横位に施され、2条の沈線が描かれる。107には縄文RLが横位に施され、弧状の沈線が描かれる。108には縄文RLが斜位に施され、横位の沈線が描かれる。105～108はⅡ群5類に属する。109の外面は横位の沈線によって区画され、上位に弧線、下位に斜位の沈線が施される。Ⅱ群6類に属する。110は外面に横位の沈線が描かれる。Ⅲ群6類に属する。111は外面に縄文LRが縦位に、112は縄文RLが斜位に、113は縄文RLが横位に施される。111～113はⅢ群7類に属する。114の外面上位は斜位のハケ、下位は横位のハケで調整される。Ⅲ群8類に属する。

試掘トレンチ（図版25・51～115～120） 115～118は壺の口縁部、119は壺の脣部、120は壺の底部である。115は口縁部が短く外反する。口脣部には縄文RLが横位に施され、外面には横位の沈線が複数条描かれる。内面の口縁部には2条同時施文の沈線が巡る。Ⅰ群6類に属する。116は口脣部に縄文RLが横位に施される。外面には平行する沈線が3条描かれ、内面は口縁部に沈線が1条巡る。Ⅱ群6類に属する。117は口縁部が外反する。口脣部には縄文RLが横位に施され、頭部付近は無文帯となる。Ⅱ群7類に属する。118はやや厚みを持つ口縁部で、無文である。120は胎土などから118と同一個体の可能性がある。内・外面はハケにより調整される。118・120はⅢ群8類に属する。119には縄文LRが横位に施され、弧状・

横位の沈線が描かれる。II群5類に属する。

## 2) 石 器

**石 鑿** (図版 26・51 - 121 - 127) すべて有茎鑿で、尖頭部が三角形のもの (121 - 124) と、菱形のもの (125・126) がある。

121 (SX53、1層) の尖頭部は短く、側縁は左右非対称である。123 (6B17区、II b2層) の尖頭部は膨らみを持ち、左側縁は鋸歯状に加工している。121・122・124 の正・裏面には素材の剥離面が残り、122 (7B18区、II b2層) の素材打点は基部側に、124 (5B17区、II b2層) は側縁側に位置する。125 (SK301、4層) は基部が長く、短い尖頭部を持つタイプである。基部には黒色の付着物が見られる。126 (5C1区、III a層)・127 (7B11区、II b2層) は未完成としたもので、側縁のみに二次加工が見られる。石質はすべて頁岩で、121・123・125・127 は頁岩 1 である。

**石 錐** (図版 26・51 - 128) 128 (75T、②層) は棒状の石錐で先端部を欠損している。断面形はおおむね菱形で、基部の一部に自然面が残っている。石質は流紋岩である。

**石 匙** (図版 26・51 - 129 - 131) 129 (6D区、II b1層) の左側縁は両面から二次加工が施され、側縁中央が屈曲する。右側縁はほぼ直線で、片面からの二次加工である。130 (SR1、1層) の刃部は尖頭状で、両面からの二次加工によって側縁に刃部を作り出している。尖頭器の可能性もあるが、二次加工が側縁のみであることと、尖頭器とした場合の基部への加工が粗く不十分であることから、ここでは石匙とした。131 (4D区、II a層) は刃部・つまみ部とも最小限の二次加工が施されている。石質はすべて頁岩 2 である。

**範状石器** (図版 26・51 - 132 - 137) 132 (77T、②層)・134 (5B25区、II b2層) は基部が細身となる撥形で、裏面には大きく素材の剥離面が残る。素材の打点は基部側に位置する。正面側の剥離は急角度であるに対し裏面側は平坦で、刃部は片刃・円刃である。133 (2B25区、II b2層) は側縁中央に若干膨らみを持つ短冊形である。正・裏面に大きく素材の剥離面を残す周縁加工で、素材バルブの高まりを入念に除去している。刃部は片刃で緩い円刃である。135 (77T、①層)・136 (7B22区、II b2層)・137 (5B15区、II b2層) は範状石器の未完成と考えたものである。厚手の剥片の裏面側に大まかな平坦剥離が施されている。特に素材のバルブ位置は入念に剥離されている。石質はすべて頁岩 2 である。

**両極石器** (図版 26・52 - 138 - 142) 139 (8B22区、II b2層)・140 (6C4区、II b2層) は上下一对、138 (8C4区、II b2層) は上下・左右二対の剥離痕が残り、141 (5B19区、II b2層)・142 (SR1、10層) は三辺に両極による平坦剥離が付く。140 - 142 は自然面や風化部分を残すことから小型鏨を素材としていることが分かる。石質はすべて頁岩で、139・140・142 は頁岩 1 である。

**不定形石器** (図版 26・27・52 - 143 - 168) 出土した不定形石器は、抉入状の刃部を有するいわゆる「抉入石器」(143 - 146)、素材の周縁に二次加工により弧状・直線状の刃部を作り出すいわゆる「スクレイバー」(147 - 157)、使用の結果と考えられる微細剥離が見られるもの (163 - 168) がある。全 46 点の不定形石器のうち抉入石器が 4 点と目立つ。

143 (5C9区、II b2層)・144 (77T、②層)・146 (77T、②層) は素材の形状を活かし抉入部を作り出す。145 (4C23区、II b2層) の両側縁には小型の剥離が連続し、右側縁には大まかな剥離により抉入部を作り出される。また左側縁の一部は鋸歯状となる。石質はすべて頁岩 2 である。

147 - 152 は素材の周縁に二次加工が施される。147 (7D区、II b2層)・148 (77T、I' 層) は不連続な中型の急角度剥離が石器周縁の多くに施される。149 (6C21区、II b2層)・150 (5B25区、II b2層)・151 (6E区、

II b2層)・152 (5B14区、II b2層)・160 (SR1、6層)・162 (5C3区、II b2層)は小～中型の急角度剥離が縁辺や下端の一部に比較的連続して付く。153 (4C5区、II b2層)・155 (7B区、II b1層)・157 (2B14区、II b2層)は側縁の一部に小型の急角度剥離が連続する。また、157の下端には抉入部がある。154 (5B18区、II b2層)は側縁に中型の剥離が浅く施される。156 (6B21区、II b2層)は小縫から剥片を作り出し、鋭利な縁辺に小型で浅い剥離を施している。158 (5B13区、II b2層)・161 (8B11区、II b2層)は縁辺の一部に二次加工が付く。159 (5B25区、II b2層)は厚手の剥片を利用し、下辺に剥離を施し、右側縁の急角度剥離面の接点を先鋒にしている。誰の可能性がある。石質は152が流紋岩、156が頁岩1、161が凝灰岩で、ほかは頁岩2である。

163～168は側縁部や下辺部に微細剥離が見られる。163 (4B24区、II b2層)は右側縁と左側縁の上半に、164 (4C5区、II b2層)・165 (75T、②層)・166 (6B22区、II b2層)は右側縁に、167 (4C14区、III a層)・168 (SK18、1層)は左側縁にそれぞれ微細剥離が見られる。石質は166が頁岩1、ほかは頁岩2である。

**砥 石** (図版 27・52・169～171) 正・裏・側面などに砥面や擦痕が見られるものを砥石とした (169～171)。169 (SI318、1層) の右側縁部には、溝状の磨痕が4条見られる。170 (04D8区、II c層) は正面の砥面に細かい多数の擦痕が見られる。また裏面の中央部に溝状の磨痕が1条見られる。171 (2E区、搅乱) は正面の中央部に数条の擦痕が見られる。石質は169が凝灰岩、170が安山岩、171は砂岩である。

**凹 石** (図版 27・52・172) 172 (75T、①層) は正・裏面の中央に横長の窪みが見られる。上部は欠損している。石質は安山岩である。

**敲 石** (図版 27・52・173) 173 (5C19区、II b2層) は正面に磨痕、上・下端部と右側面に敲打痕が見られる。石質は砂岩である。

**石 核** (図版 27・28・53・174～178) 剥片剥離作業中の核、または剥片剥離後の残核などを石核とした。出土した石核は板状のものが目立つ。

174 (2E区、搅乱) は上・下端部が衝撃により潰れていることから、両極打法により剥離作業が行われている。175 (5C12区、III a層) は自然面側の周縁を剥離し、これを打面として正面側を剥離したもので、亀甲状を呈する。176 (5B25区、II b2層)・177 (6C17区、II b2層) は大型の剥離痕が全面を覆うが、前者は左側面の剥離痕が、後者は裏面下辺からの剥離痕が最終段階の作業痕跡と考えられる。178 (7B24区、II b2層) は厚手の剥片を素材とし、正面の上・下辺から剥離作業が行われている。石質は174が石英で、ほかはすべて頁岩2である。

**接合資料** (図版 28・29・53・54・179～194) 接合関係は5点の資料で確認できた。179は方形に荒削りした後、上面を打面として剥離作業が行われた資料で、接合した剥片 (180) はこの作業に伴って剥離された剥片である。180 (77T、②層) の下辺部や側縁部に微細剥離が観察できることから、石核から剥離された後、利器として使用されたと考えられる。181 (SX52、1層) は180が剥離された後も、上面を打面として剥離作業が行われている。182は石核と剥片2点が接合し、185 (5B25区、II b2層) から183 (77T、②層)、184 (5B17区、II b2層) の順に剥離された資料である。185はその後も打面転位を繰り返しながら剥離作業が行われている。186は剥片同士が接合し、石核から187 (77T、②層)、188 (5B14区、II b2層) の順に剥離された資料である。その後、188は右側縁に二次加工が施される。鎧状石器の未成品の可能性がある。189は剥片同士が接合し、石核から190 (4B14区、II b1層)、191 (77T、①層) の順に剥離された資料である。190を剥離した後、180°打面転位し、191を剥離している。191は上辺部や側縁部に二次加工が施されることから、利器として使用されたものと考えられる。192は剥片同士が接合し、上辺を打面

とし連続した剥離作業で得られた資料である。石質はすべて頁岩2である。

### 3) 金属製品 (図版 29・54 - 195)

195はSI318の1層から出土した。長さ13.5cm、基部の幅1.8cm、厚さ0.9cm、先端部の幅0.9cm、厚さ0.4cmを測り、先端部に向かい徐々に細くなっている。腐食が進んでおり、本来は全体に数mmほど大きかったと考えられる。断面は長方形を呈する。基部の上面は平坦になっている。X線写真(図版54)を見ると、基部の断面は2回ほど折り返しているようであるが、断定はできなかった。形状から鑄ないし<sup>なまこ</sup>鑄と推定される。

### 4) ガラス小玉 (図版 29・54 - 196)

196は9B11区のII b1層から出土した。径4.35~4.55mm、厚さ2.50~2.70mm、孔径は2.0~2.1mmを測る。透明感のある紺色を呈する。孔の周囲に平坦面があり、正面はこの面がわずかに窪んでいる。平面はわずかに歪んだ円形、断面は歪んだ梢円形を呈する。内部の気泡は孔と平行に列状に確認できる。

### B そのほかの時代 (図版 29・54 - 197 ~ 201)

197はSRIの8層から出土した。縄文晩期の深鉢胴部片で、工字文が描かれる。198はSD320の1層から出土した。須恵器の壺胴部片である。外面は斜位に平行タタキが、内面は同心円あて具痕が見られる。199は9C区のII b1層から出土した。珠洲焼の壺肩部片である。外面には斜位から横位の平行タタキが施される。200・201は唐津焼の碗で、口縁部を欠く。200は3B21区のII a層から出土した。内・外面に灰釉がかけられ、見込みには砂目痕が残る。201は調査区内のI層から出土した。外面の体部下位は削られ、器面には灰釉がかけられる。

## 第VI章 自然科学分析

新潟県村上市下新保字高田2351-2に所在する堂の前遺跡は、三面川左岸の沖積地に立地している。発掘調査によって、調査区の東西から自然流路を検出し、これらの流路に挟まれた区域、及び自然流路から弥生時代中期後半～後期前半の遺構・遺物が見つかっている。

本章では、弥生時代中期後半～後期前半とされる土器の年代や本遺跡内を流れる流路の堆積(水域)環境、弥生時代の燃料材の検討を目的として実施した自然科学分析調査の結果を記す。

### 1 試 料

試料は、弥生土器の器面に付着した炭化物、自然流路(SR1)覆土から採取された土壤、堅穴住居(SI318)の炉(FP1)内埋積物の水洗選別によって抽出された炭化物である。以下に、各試料の概要を記す。

#### A 弥生土器付着炭化物

試料は、SR1覆土中から出土した弥生土器2点(土器No.24・49)であり、これらは弥生時代中期後半及び弥生時代後期前半の土器とされている。土器No.24から採取した試料は、変形土器内面の胴部下半～底部付近にスス状に付着した炭化物である。炭化物は、部分的に塊状に付着する状況が観察されたが、全体的に遺存状況は不良であった。一方、土器No.49は、土器口縁部外面の沈線などの窪みに炭化物が多く確認され、土器No.24に比べ遺存状況は良好であった。

#### B 土 壤 試 料

試料は、SR1を埋積する堆積物から採取された土壤である。土壤試料は、SR1の4～7層に相当する堆積物から柱状に採取した塊状試料であり、プラスチック容器に保管された状態にあった。弥生時代ころの堆積環境の検討が目的とされたことから、本試料の観察及び調査担当者からの提供資料を参考とし、SR1の6層とその上・下位の5・7層からの土壤を分析対象とした。

SR1は、発掘調査所見によれば、砂礫を基底とし、その上位の覆土は1～10層に区分されている。このうち、SR1の5～7層は、SR1覆土中～下部に相当し、5層は暗紫灰色粘質土、6層は青灰色粘質土、7層は青灰色砂とされている。

#### C 炭化物試料

試料は、SI318 FP1の床面に相当する粘土層(図版13、東側;試料No.5、西側;試料No.4)、粘土上位に堆積した焼土(図版13、東側;試料No.3、西側;試料No.2)、焼土上位の覆土(図版13、試料No.1)の水洗選別によって抽出された炭化物である。各試料から抽出された炭化物の観察では、炭化種実などは確認されず、細～微細片の炭化材が多数確認されたのみである。分析対象とした試料は、大きさなどを考慮し抽出した炭化材6点(試料No.1:2点、試料No.2～5:各1点)である。

上記した試料のうち、土器No.24・49の付着炭化物を対象に放射性炭素年代測定、SR1の5～7層を対

象に珪藻分析、SI318 FP1 の炭化材を対象に樹種同定を行う。

## 2 分析方法

### A 放射性炭素年代測定

炭化物などに目的物と異なる年代を持つものが付着・混入している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後、HCl による炭酸塩など酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅 (II) と銀浴（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じ切り、500°C (30 分)、850°C (2 時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素 + エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて CO<sub>2</sub> を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO<sub>2</sub> と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に <sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C の測定も行うため、この値を用いて  $\delta^{13}\text{C}$  を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma : 68%) に相当する年代である。放射性炭素年代は、 $\delta^{13}\text{C}$  の値を用いて同位体効果の補正を行った値 (補正值) と、補正前の値を併記する。

補正年代を用いて、暦年較正を行う。暦年較正とは、大気中の <sup>14</sup>C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の <sup>14</sup>C 濃度の変動、及び半減期の違い (<sup>14</sup>C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用いる。その際、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表す。暦年較正結果は、測定誤差  $\sigma$ 、 $2\sigma$  ( $\sigma$  は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95% の確率で存在する範囲) の値を示す。表中の相対比 (確率分布) は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$  の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

### B 硅藻分析

試料を湿重で 7g 前後秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、自然沈降法 (4 時間放置) の順に物理・化学処理を施して、硅藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍でを行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、硅藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する (化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、[原口ほか 1998, Krammer 1992, Krammer & Lange-Bertalot 1986・1988・1991a・1991b, 渡辺ほか

2005、小林ほか2006】などを参照し、分類基準は、[Roundほか1990]に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、[柳沢2000]に従う。

同定結果は、中心類 (Centric diatoms; 广義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae) と羽状類 (Pennate diatoms) に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類 (Araphid pennate diatoms; 广義のオビケイソウ綱 Fragilariphycaceae) と有縦溝羽状珪藻類 (Raphid pennate diatoms; 广義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae) に分ける。また、有縦溝類は、單縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各分類群の生態性については、[Vos & de Wolf 1993]を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は [Lowe 1974] に従い、真塩性種 (海水生種)、中塩性種 (汽水生種)、貧塩性種 (淡水生種) に類別する。また、貧塩性種については更に細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0% 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、淡水生種 (貧塩性種) については [安藤1990]、陸生珪藻については [伊藤・堀内1991]、汚濁耐性については [渡辺ほか2005] の環境指標種を参考とする。なお、珪藻化石の生態性区分や環境指標種群については、[Hustedt 1937-1939] や [小杉1988] も参考にする。

### C 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・粋目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の削断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称は特徴については、[島地・伊東1982] や [Wheelerほか1998] を、日本産木材の組織配列については、[林1991] や [伊東1995・1996・1997・1998・1999] を参考にする。

## 3 結 果

### A 放射性炭素年代測定

土器付着炭化物の同位体効果の補正を行った測定結果（補正年代）は、土器 No.24 付着炭化物は 2,290 ± 30yrBP、土器 No.49 付着炭化物は 2,200 ± 30yrBP を示す（第1表）。暦年較正結果（ $\sigma$ ）は、土器 No.24

試料名	位置	性状	補正年代 (yrBP)	$\pm$ 1SE (yr)	測定年代 (yrBP)	測定機関 code
土器 No.24 内部側下部-底部付近	炭化物		2,290 ± 30	- 22.88 ± 0.59	2,250 ± 30	IAAA-82443
土器 No.49 口縫合外側 炭化物			2,200 ± 30	- 24.38 ± 0.75	2,190 ± 30	IAAA-82444

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,566 年を使用。 2) BP 年代値は、1900 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

第1表 放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代 (yrBP)	暦年較正年代 (cal)										相対比	測定機関 Code		
		#	cal	BC	399	-	cal	BC	360	cal	BP	2,309	-	2,310	0.640
土器 No.24 内部側下部-底部 炭化物	2,287 ± 31		cal	BC	274	-	cal	BC	260	cal	BP	2,224	-	2,220	0.160
		2 #	cal	BC	403	-	cal	BC	352	cal	BP	2,256	-	2,202	0.644
			cal	BC	294	-	cal	BC	226	cal	BP	2,244	-	2,179	0.341
土器 No.49 口縫合外側 炭化物	2,195 ± 33		cal	BC	230	-	cal	BC	211	cal	BP	2,179	-	2,161	0.015
		#	cal	BC	307	-	cal	BC	284	cal	BP	2,307	-	2,224	0.648
			cal	BC	255	-	cal	BC	248	cal	BP	2,295	-	2,196	0.049
		2 #	cal	BC	294	-	cal	BC	203	cal	BP	2,184	-	2,151	0.303

1) 測定には、RADLOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB-BEV5.02 (Copyright 1986-2005 M. Shaver and P.J. Lerner) を採用。

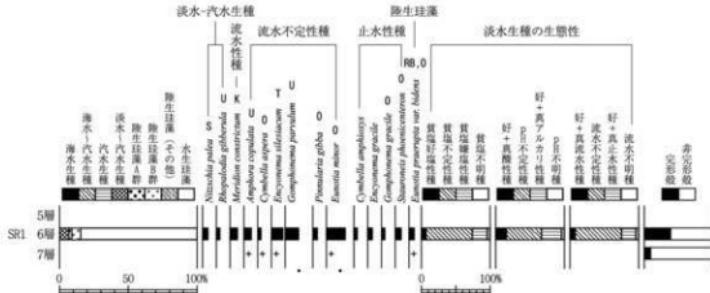
2) 測定には表に示した丸める前の値を採用している。3) 暦年較正曲線や曆年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いたいように、1 術目を丸めていい。

4) 相対比は、# と 2 # のそれぞれを 1 とした場合、確率的に両の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第2表 暦年較正結果

分類群	生物性			確確 指標	SRI		
	H.R.	pH	C.R.		5層	6層	7層
<b>Bacillariophyta (原藻植物門)</b>							
<i>Arapidaceae Diatoms (無屈溝羽狀鏈藻類)</i>							
<i>Arapidinae (無屈溝類)</i>							
<i>Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hustedt</i>	Ogh-ind	al-d	lgb	T	-	3	-
<i>Fragilaria vanvouveriae (Kortz.) Petersen</i>	Ogh-ind	al-d	r-gb	K.T	-	1	-
<i>Meridion circularis (Griseb.) Agardh</i>	Ogh-ind	al-d	r-bi	K.T	-	3	-
<i>Meridion contrarium Ralfs</i>	Ogh-ind	al-d	r-bi	K.T	-	II	-
<i>Uloria alba (Nitzsch.) Compere</i>	Ogh-ind	al-d	ind	U	-	2	1
<b>Raphid Pennate Diatoms (有屈溝羽狀鏈藻類)</b>							
<i>Anomphora cephalis (Kortz.) Scherffel et R.E.M. Archibald</i>	Ogh-ind	al-d	ind	U	-	II	I
<i>Cyathella amphioxys (Kortz.) Grunow</i>	Ogh-ind	ac-d	lgb	O	-	5	-
<i>Cyclotella aerea (Ehr.) Cleve</i>	Ogh-ind	al-d	ind	O	-	5	1
<i>Eucyclotella gracilis Ehrenberg</i>	Ogh-ind	al-d	lgb	T	-	7	-
<i>Eucyclotella stellata (Kloosky) D.G.Mann</i>	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1	-
<i>Eucyclotella stellata (Kloosky) D.G.Mann</i>	Ogh-ind	ind	ind	T	-	17	I
<i>Gomphonema thomasi (Fricke) Mertes et al.</i>	Ogh-ind	ind	ind	J	-	-	1
<i>Gomphonema acuminatum Ehrenberg</i>	Ogh-ind	al-d	lgb	OU	-	2	-
<i>Gomphonema angustatum (Kortz.) Rahnenhorst</i>	Ogh-ind	ind	ind	U	-	3	-
<i>Gomphonema gracile Ehrenberg</i>	Ogh-ind	al-d	lgb	OU	-	5	-
<i>Gomphonema olivaceum var. microstomum Hustedt</i>	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	-
<i>Gomphonema parvulum (Kortz.) Kuetzing</i>	Ogh-ind	ind	ind	U	-	20	-
<i>Gomphonema punctum var. rigidum (Erichsen) et Lange-B.</i>	Ogh-ind	al-d	ind	U	-	4	-
<i>Gomphonema spp.</i>	Ogh-ind	unk	unk	-	-	2	-
<i>Navicula viridis (Kortz.) Ehrenberg</i>	Ogh-ind	al-d	r-gb	K.U	-	1	-
<i>Navicula spp.</i>	Ogh-ind	unk	unk	-	-	1	-
<i>Craticula ambiguus (Ehr.) D.G.Mann</i>	Ogh-ind	unk	ind	S	-	1	-
<i>Craticula spp.</i>	Ogh-ind	unk	unk	-	-	1	-
<i>Stauroneis acuta W.Smith</i>	Ogh-ind	al-d	lgb	-	-	-	2
<i>Stauroneis pectinifera (Nitzs.) Ehrenberg</i>	Ogh-ind	ind	lgb	OU	-	9	-
<i>Stauroneis spp.</i>	Ogh-ind	unk	unk	-	-	1	-
<i>Frontella rhomboidalis var. saxonica (Roth.) De Toni</i>	Ogh-ind	ac-d	lgb	P.O	-	1	-
<i>Frontella spp.</i>	Ogh-ind	unk	unk	-	-	1	-
<i>Leruella matua (Kortz.) D.G.Mann</i>	Ogh-ind	al-d	ind	RAS	-	3	-
<i>Nodularia aplomat (Ehr.) Krammer</i>	Ogh-ind	ac-d	lgb	-	-	1	-
<i>Nodularia rufa (Ehr.) Cleve</i>	Ogh-ind	al-d	ind	OU	-	1	-
<i>Nodularia spp.</i>	Ogh-ind	unk	unk	-	-	1	-
<i>Colonella crassa (Grunow)</i>	Ogh-ind	al-d	lgb	-	-	-	1
<i>Pinularia breviseta Ehrenberg</i>	Ogh-ind	ind	ind	RAU	-	1	-
<i>Pinularia breviseta var. linearis M.P.</i>	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-
<i>Pinularia gibba Ehrenberg</i>	Ogh-ind	ac-d	ind	OU	-	7	-
<i>Pinularia gibba var. linearis Hustedt</i>	Ogh-ind	ac-d	ind	-	-	2	-
<i>Pinularia megalopta (Ehr.) W.Smith</i>	Ogh-ind	ac-d	ind	S	-	1	-
<i>Pinularia schoenfeldiana Krammer</i>	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1	1
<i>Pinularia velutina Gregory</i>	Ogh-ind	ac-d	ind	RBS	-	2	-
<i>Pinularia viridis (Nitzs.) Ehrenberg</i>	Ogh-ind	ind	ind	OU	-	4	-
<i>Pinularia spp.</i>	Ogh-ind	unk	unk	-	1	3	5
<b>浮游植物群</b>							
<i>Heterococcus amphioxys (Ehr.) Grunow</i>	Ogh-ind	ind	ind	RAU	-	1	-
<i>Nitzschia breviseta Grunow</i>	Ogh-Meh	al-d	ind	RB.U	-	1	-
<i>Nitzschia pulicaria (Kortz.) W.Smith</i>	Ogh-Meh	ind	ind	S	-	8	-
<i>Nitzschia pseudodelta Chodatky</i>	Ogh-ind	ind	ind	U	-	4	-
<i>Nitzschia spinosa (Ehr.) W.Smith</i>	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	1	-
<i>Zygnedodella libera (Ehr.) O.Muller</i>	Ogh-Meh	al-d	ind	U	-	5	-
<b>浮游植物群</b>							
<i>Eunotia bilobata (Ehr.) Mills</i>	Ogh-hab	ac-bi	ind	U	-	2	-
<i>Eunotia bilobata</i> H.Kobayashi, Ando & T.Nagumo	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	1
<i>Eunotia minor (Kortz.) Grunow</i>	Ogh-hab	ind	ind	O.T	-	28	2
<i>Eunotia pentirena (Kortz.) Rahnenhorst</i>	Ogh-hab	ac-d	ind	O.T	-	1	-
<i>Eunotia praeputialis Ehrenberg</i>	Ogh-hab	ac-d	lgb	RB.O.T	1	1	3
<i>Eunotia praeputialis var. biloba (Ehrenb.) Grunow</i>	Ogh-hab	sc-d	lgb	RB.O.T	-	8	2
<b>海水生種</b>							
海水生種					0	0	0
海水-汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水-汽水生種					0	14	0
淡水水生種					6	190	22
陸海化石類					6	294	22
<b>理化指標群</b>							
A:好浮游植物 B:內湧流植物 C:海水沉質子母指標群 (小林 1988), K:中-下流性河川指標群 M:湖沼浮游植物群 O:潟湖泥地附生種 (安藤 1990), S:好河流性種 T:広流域適應種 R:汽生性藻類 (Asai & Watanabe 1995), R.B:汽生性藻類 R.B.B:汽生性藻類 R.L:未区分 (伊藤・廣内 1991)							

第 3 表 珪藻分析結果



海水～汽水～淡水生種産出率、各種産出率、完形殻産出率は全体基数。淡水生種の生態性的比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。  
いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は2%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

（環境指標種） K: 中～下流性河川指標種 O: 沼澤地付着生種 S: 好汚泥性種 U: 広域適応性種 T: 好清水性種 D: 陸生珪藻B群

第8図 主要珪藻化石群集の層位分布

は calBC399-calBC260、土器 No.49 は calBC357-calBC201 である（第2表）。

## B 珪藻分析

結果を第3表、第8図に示す。SR1の6層では珪藻化石が204個体と産出数は比較的多かったが、5層は6個体、7層は22個体と少ない。6層は、完形殻の出現率は約40%、産出分類群数は合計で20属47分類群である。以下に、珪藻化石群集の特徴を記す。

6層は、淡水域に生育する珪藻類が全体の約80%を占める。これに付随して、淡水～汽水生種が約10%、陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約10%産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不適性種、pH不適性種と真+好アルカリ性種、流水不適性種と真+好止水性種が優占あるいは多産する。特に多い分類群は認められず、流水不適性で沼澤湿地付着性種の *Eunotia minor*（約15%）、流水不適性で付着性の *Gomphonema parvulum*（約10%）、*Eucyonema silesiacum*（約10%）が比較的目立つ。また、流水で中～下流性河川指標種の *Meridion constrictum*、流水不適性で付着性の *Amphora copulata*、沼澤湿地付着生種の *Cymbella aspera*、*Pinnularia gibba*、*Gomphonema gracile*、*Stauroneis phoenicenteron*、陸生珪藻B群で沼澤湿地付着生種の *Eunotia praerupta var. bidens*なども産出する。

化石の産出が少なかった5層は、*Caloneis truncatula*などの流水不適性種や *Pinnularia borealis*などの陸生珪藻、7層は好止水性の *Stauroneis acuta*、沼澤湿地付着性種の *Eunotia minor*、陸生珪藻B群で沼澤湿地付着生種の *Eunotia praerupta* やその変種の *Eunotia praerupta var. bidens* が産出する。

## C 樹種同定

結果を第4表に示す。SI318 FP1の炭化材のうち、4点は広葉樹のクスノキ科に同定された。なお、SI318 FP1 粘土の炭化材2点は、道管が認められたことから広葉樹と判断されたが、保存状態が悪く道管配列が観察できず、種類は不明としている。

以下に、クスノキ科の解剖学的特徴などを記す。

遺物名	層位	地点	試料No.	樹種
SI318 FP1	覆土		1	クスノキ科
	地土	西側	2	クスノキ科
	地土	東側	3	クスノキ科
	粘土層	西側	4	広葉樹
		東側	5	広葉樹

第4表 樹種同定結果

クスノキ科 *Lauraceae*

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った梢円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周間状及び散在状。

## 4 考 察

## A 弥生土器の年代観

SRI から出土した弥生土器2点の放射性炭素年代測定結果に基づく暦年較正結果では、土器No.24は紀元前4世紀末～紀元前3世紀中ころ、土器No.49は紀元前4世紀中ころ～紀元前3世紀前半を示した。また、土器No.24・49の暦年較正結果のうち、確率分布が高い割合を示す年代においても、土器No.24は紀元前4世紀末～紀元前4世紀中ころ、土器No.49は紀元前4世紀中ころ～紀元前3世紀後半と、土器No.24が古い値を示す傾向にある。

なお、今回の分析対象とした土器は、考古学的な所見から弥生時代中期後半～後期前半とされている。近年行われている弥生時代の実年代の研究成果を参考とすると、北陸（石川）～東北（福島）における弥生時代中期前半は紀元前4～2世紀ころと考えられている〔小林2007〕ことから、今回得られた暦年代はやや古い値を示している可能性がある。そのため、今回の分析結果については、各土器型式や出土状況に基づく層位的な新旧関係による検討とともに、同時期の分析事例を蓄積し、改めて評価することが望まれる。

## B 堆積環境

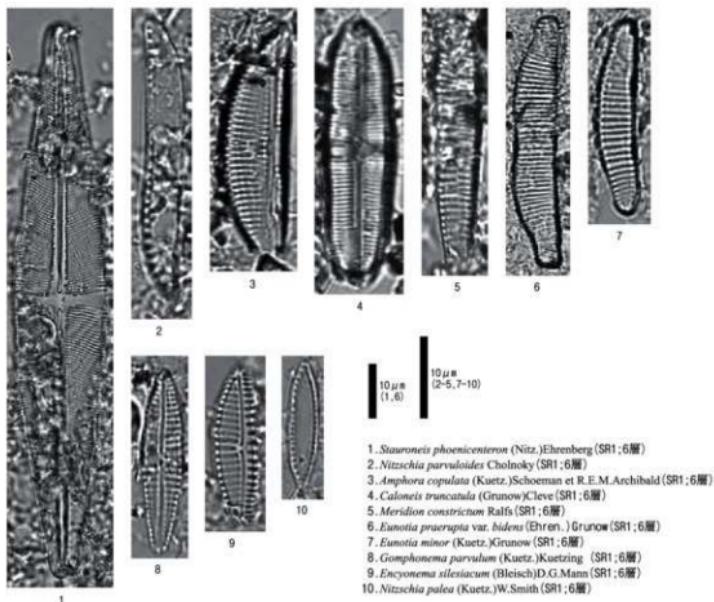
SRI 覆土下～中部の5～7層の珪藻分析の結果、5・7層は珪藻化石の産出が少なく、珪藻群集による堆積環境の推定は困難であった。一方、珪藻化石が多く産出した6層は、淡水域に生育する珪藻類が約8割を占め、生態性に着目すると、沼澤湿地付着種群を含む流水不定生種を中心に、止水性種、流水性種、陸生珪藻B群、淡水～汽水性種が混在するが、際立って多く検出される分類群は認められないという特徴を示した。このような様々な生態性を示す分類群が混在する群集は、混合群集とされており、低地の堆積物のほとんどの堆積物に認められることや、河川の氾濫堆積物あるいはその影響を受けて形成されたことが指摘されている〔堀内ほか1996〕。

以上の珪藻群集の特徴や堆積物の観察所見から、SRIの6層は河川等の氾濫などに伴う増水やあふれる流水によって形成された堆積物と推定され、確認された珪藻群集は集水域の様々な環境に生育していた珪藻類を反映していると考えられる。

## C 木材利用

SI318 FP1の炭化材からは、広葉樹のクスノキ科（4点）と種類不明の広葉樹（2点）が確認された。クスノキ科には、暖温帯常緑広葉樹林を構成するタブノキ属やニッケイ属、落葉広葉樹林中にも生育するシロダモ属やクロモジ属など、7属24種がある。本地域でも常緑のタブノキ属（タブノキ属）、落葉のアブラチャン（クロモジ属）、シロダモ（シロダモ属）などが沿海地を中心に分布することから、こうした種類を燃料材などに利用した可能性がある。

本遺跡が立地する三面川流域では、現段階では弥生時代ころの古植生や木材利用に関する資料が少なく、詳細な検討は困難であるが、同じ沖積地に立地する谷地遺跡の縄文時代前期の川跡からクスノキ科の種実が検出されている（未公表資料）ほか、高柳 A 遺跡（旧荒川町）の縄文時代の自然木（タブノキ属）や道端遺跡（旧荒川町）の縄文時代の自然木などにクスノキ科が確認されている〔株式会社古環境研究所 1996、三村 2003、植田 2005〕。これらの結果から、弥生時代ころにもタブノキ属を含むクスノキ科の生育が推定されるが、生育状況や木材利用状況については、今後の課題である。



第9図 珪藻化石



第10図 炭化材

## 第VII章 まとめ

### 1 遺物

#### A 弥生土器

本遺跡から出土した土器は約2,000点を数え、収納箱(59×38.5×15cm)にして5箱分に相当する。東北地方の影響を強く受けた土器が主体となり、時期は弥生時代中期後半から後期前半である。土器の残存率は悪く、遺構からの一括性も見られない。この時期の土器は総じて残存率が悪く、遺構からの一括性が見られない傾向があり、本遺跡の主体となる天王山式が「中期説」・「後期説」に意見が分かれる所以である。「後期説」は石川氏ら〔中村1976、石川2004〕により天王山式の型式学的整理がなされ、積極的に支持する意見が出されている。本書はこれらの意見に立脚して報告するものである。

天王山式は、北は北海道から南は石川県南部まで広範囲に分布する土器であるが、近年の発掘調査により、その地方色が見いだされている。新潟県下越地方では村上市砂山遺跡で当該期の土器がまとまって出土した。石川氏はこれを砂山式とし、秋田県大曲市宇津ノ台遺跡を標識とする宇津ノ台式の系統を強く引くとする〔石川2004〕。本遺跡でも天王山式に次いで宇津ノ台式が多く出土している。まずは宇津ノ台式の特徴を確認したい。県内では、新発田市山草荷遺跡で天王山式を伴わずに宇津ノ台式が出土している。滝沢・野田両氏のまとめによると、器形は口縁部が外反し、口頸部界から「く」の字に折れ、頸胴部界が不明瞭であり、胴部中央に最大径を持つ。文様帶は頭部と頸部直下に認められ、頭部には重菱形文・連続山形文、頸部直下には連続山形文のみが用いられる。また、口縁部を文様帶として、平行沈線・連続山形文を施すものもある。文様施文は比較的細いが、深く線が引かれる。内面施文が顕著であり、北陸系の小松式と折衷現象を起こすものがあるという〔滝沢・野田2002〕。次に天王山式の一地方型式である砂山式の特徴を確認したい。石川氏によると、a. 頭部文様帶が発達し、そこに重菱形文を盛用する。b. 口縁部の内湾と伸びが明瞭である。c. 口縁部内面に幅狭い文様帶を設ける。d. 口縁部上端の幅狭な帯に短斜線を充たし、等間隔に斜線の向きを変える。e. 繩文RL原体を条が縱走するよう斜め回転施文する、という点を挙げ、砂山式1期は台形刺突列<sup>1)</sup>を持つものとしている〔石川前掲〕。このほかにも砂山遺跡から出土した天王山式の特徴として、斜めに突き刺す交互刺突文や一般的な交互刺突文が最も残りやすい口頸部界に用いられず、頭胴部界・胴部を区画するのに用いられることなどが挙げられる〔滝沢・野田2002〕。

天王山式に後続する土器群として、石川氏は福島県会津若松市屋敷遺跡の屋敷段階・福島県白河市明戸遺跡の明戸段階を挙げている。天王山式との相違点として、器形は口縁部の内湾や肥厚が目立ち、口頸部間の段や屈曲が弱くなり、口縁部の幅が広くなる。文様は口縁部の幅が広くなるのに連動して、弧線が横方向に開延びする点と、交互刺突文の退化が看取できる点が指摘される。交互刺突文の退化とは、1条の刺突列・押圧列・繩文側面压痕が明瞭になることや、断面円形の施文具を斜めに突き刺してD字形の刺突文を連ねること、磨消繩文内に小刻みにジグザグ線を引くことなどが挙げられる。また、繩文のみの比

1) 2溝間に棒状工具を斜めに刺突し、刺突したまま横に移動させると、三角または台形の刺突列となり〔滝沢・野田2002〕、これを台形刺突列としている。

率が高くなるのも天王山式との相違点である〔石川2000〕。下越地方では、砂山5群土器や村上市淹ノ前遺跡の淹ノ前2・3群土器が屋敷・明戸段階とそれより新しい段階を含む一群である。これらを屋敷・明戸段階と比較すると、福島県いわき市周辺で確認される八幡台式の特徴である四点文〔鈴木2002〕は確認できないが、そのほかの特徴とはほぼ合致するという〔淹沢・野田2002〕。

次に編年についても確認しておきたい。石川氏は天王山式の系譜について、3～4つの系譜の中で形成過程がうかがえるしながら、その骨格を岩手県域に分布する仮称和井内式土器に据え、日本海側に関しては宇津ノ台式の影響が強いとする。また、日本海側に顕著な一定間隔で走行を変える口唇部の刻線は、北海道函館市恵山遺跡の恵山C式と共通する手法であるとする。下越地方の宇津ノ台式に関しては、秋田県域の基準資料と差異を認めながら、宇津ノ台式の地方型式とし、これを山草荷式として砂山式との峻別を図っている。天王山式については和泉段階を天王山1a期、能登段階を天王山1b期、天王山段階を天王山2期とし、その前半を砂山式1期、後半を砂山式2期として日本海側と対応させている。天王山式に屋敷・明戸段階が後続することは既述のとおりである〔石川2000〕。砂山遺跡の遺物を整理した野田氏は、砂山1群を宇津ノ台式、砂山2群を山草荷式に相当させている。砂山3群土器は口縁部が肥厚しない器形で、区画文としての交互刺突文を持たない一群であり、岩手県新里村和井内東遺跡出土土器段階と能登段階を含む一群としている。砂山4群・淹ノ前1群は天王山段階である。砂山5群・淹ノ前2・3群が屋敷・明戸段階に相当することは既述のとおりである〔淹沢・野田2002〕。

以上の特徴・編年を踏まえて、本遺跡出土土器を見てみたい。I群としたものは、砂山1・2群に相当する土器群である。口縁部は外反し、口頸部が「く」の字状に屈曲するもの（32・50）が確認できる。頸胸部界が不明瞭となるもの（32・50）は確認できるが、頸部中央が最大径となるかは不明である。文様は1類とした重菱形文を描くもの（50など）と、2類とした平行沈線と鋸歯文（連續山形文）を組み合わせたもの（18・33・49・72・73など）が多くを占める。2類は沈線が2～4条同時に施される。また、深いハケメが付き（27～30など）、文様として意識しているかのようであった。I群の中には3・4類が確認できなかった。文様施は比較的深めの沈線による。内面に沈線が横位に巡るもの（48）もある。口縁部が微波状を呈するもの（115）は、小松式との折衷と考えられる。本遺跡のI群土器は山草荷遺跡の宇津ノ台式と同様の傾向がうかがえる。II群としたものは、砂山3・4群に相当する一群である。本遺跡では台形刺突列を持つものが1例も確認できなかったため、石川氏の砂山式1期と2期を包括している。II群の中で古い様相を呈するものは、口縁部が短く外反し、頸部が筒状となるもの（61）だけである。そのほかは新しい様相を示す。口縁部の肥厚（60・95・96）や、内溝するもの（24・78・117など）があり、口径が最大径となる（10・24）。文様は3類とした下開きの連弧文が目立ち（57・58・81・95）、4類とした交互刺突文はほとんどが水平に刺突されるもので、区画文として口縁端部直下に位置する（3・78・80）。口唇部には繩文の圧痕・回転施文などが施される（10・24・60・117）。また、口縁部上端に内・外側から交互に刻みや刺突を施す手法が見られた（57・59・60・78）。これは交互刺突文の手法を別の部位で表現しているとも受け取れ、交互刺突文と併用するもの（78）もある。地文は繩文RLによる条を縱走させるもの（133・135・92・15など）が多い。II群の中で、より新しい様相を示すものには、口縁部の幅が広くなるのに連動して、弧線が間延びしているもの（69）があり、繩文RL原体の回転施文から脱却し、撚糸文になっている。II群に関しては3・4類を主体とするが、中には1類の要素を含むもの（80）なども存在する。また、砂山式の特徴を見いだせるが、北陸地方との繋がりは薄く、東北地方の狹義の天王山式に近い様相が看取できた。III群としたものは、型式不明の土器の一群である。型式不明の土器の中には、ミニチュア土器や

小型土器（1・46）が含まれる。東北では天王山式と共伴する例があり、能登遺跡からは注口土器・高杯・蓋・筒形土器の小型のものが出土している。

[大越ほか1990]。県内での類例は、山元遺跡から筒形土器の小型のものが出土している〔滝沢ほか2009〕。

本遺跡出土土器の編年に関しては、石川氏の編年〔石川2004〕に対比すると、堂の前I群が山草荷式に、堂の前II群の古い様相のものが砂山式1期に、新しい様相のものが砂山式2期に相当すると考えられる。野田氏の編年〔野田2003〕を含めて、三者の対比を第5表に示した。時期区分はI群が中期後半、II群が後期前半と考えられる。しかし問題点として、堂の前II群は天王山段階を主体とするが、日本海側でその前段階の分類要素が抽出しきれていないことが挙げられる。堂の前II群土器の細分に関しては今後の課題とし、日本海側の類例の増加を待ちたい。

## B 石 器

石器の時期は、出土した土器などから弥生時代中期後半～後期前半の所産と考えられる。ここでは遺構内やSRIの6～10層、またIIc層・IIIa層から出土した石器の分布状況、石質の選択性や石器組成について整理する。

石器の分布を第11図に示した。遺構内からは、SI318で砥石（169）、剝片、SX52で石核（181）、剝片、SX53・SK301で石核（121・125）、SK18で不定形石器（168）、図化はできなかったがSD27やSK19・20・300で不定形石器・剝片が出土している。自然流路や包含層からは、SRI(03C20区)の6層で不定形石器（160）、SRI(7B13区)の10層で両極石器（142）、04D8区IIc層で砥石（170）、5C1・4C14・5C12区IIIa層で石核（126）、不定形石器（167）、石核（175）、図化はできなかったがSRI(6B17・24、8B24区)の8層で剝片・碎片、4C8・10C17区IIIa（III）層で不定形石器、4C13・14、5B24、5C1・2・14区IIIa層で剝片が出土

時期区分	宝の森遺跡 分類	野田（2003）	石川（2004）
中期後半	I群	砂山・瀬ノ瀬遺跡 砂山1・2層	宇津ノ台式・山草荷式 山草荷式
後期前半	II群（古）	砂山3層	相井内軒道跡出土土器群 鹿豆段階
	II群（新）	砂山4層・瀬ノ瀬1層	天王山1期（相井段階） 天王山1b期（鹿豆段階）
後期後半		砂山5層・瀬ノ瀬2・3層	砂山式2期（天王山2期） 鬼敷・明山段階

第5表 本遺跡の時期区分と併行関係

第11図 石器出土分布

している。以上のように、石器の分布は遺構が集中する地区におむね収まることが分かる。

石質は頁岩が主体を占め、そのほかは砂岩・安山岩・鉄石英・石英・凝灰岩・流紋岩・泥岩・玉髓が確認できる（第6表）。頁岩では、いわゆる頁岩1「半透明の頁岩」〔秦2001〕が石鏃や両極石器など小型の石器に使用されている。これは頁岩1の母岩の大きさに起因し、周辺の当該期遺跡〔石丸ほか2003、前川ほか2006、青木ほか2006、滝沢ほか2009〕においても同様な傾向である。また加工具（石錐・石匙・範状石器・両極石器・不定形石器）に採用される石材には、様々な石質が認められながらも頁岩2が卓越する。

本遺跡で出土した石器の総数は83点（剝片・碎片を除く）である（第7表）。機能別〔石川1997、柳宜田2002〕に見ると、石鏃などの狩猟具7%、石匙や不定形石器などの加工具74%、磨石類などの調理具5%（未成品・器種不明を除く）で、加工具が卓越し、範状石器（132～137・188）や、石匙（129～131）の出土率が高い。同じ沖積地に立地する道端遺跡（中期）〔前川ほか2006〕や中曾根遺跡（中～後期）〔青木ほか2006〕と比べると磨石類などが少ない点で共通する。加工具の出土量は、上記の道跡よりも多く、これは高地性環境集落である新潟市古津八幡山遺跡や村上市山元遺跡と共通する。また、本遺跡では、頁岩1・2の剝片・碎片のほか石核（残核）が出土し一部接合することから、小規模ながら石器製作を行っていたことが分かる。

	頁岩1	頁岩2	砂岩	安山岩	鉄石英	石英	凝灰岩	流紋岩	泥岩	玉髓	合計
石 鏃	4	3							2		7
石 細			3								3
石 匙				7							7
範状石器	3	2									5
両極石器	2	41						1	2		46
不規形石器			6				1				7
石 核					1	1			1		3
砾 石					1						1
鐵 石						1					1
器種不明									2		2
剝片・碎片	5	100			2	4	4	10	2	1	128
合 計	14	162	2	4	4	5	2	15	2	1	211

(単位)未成品を含む

第6表 器種と石質の集計

実測番号	石 鏃		石 細	石 匙	範状石器		両極石器		不規形石器		石核	磨製石斧	磨石	石鍬	鍬形	小型特殊	石錐	石削
	成品	未成品			成品	未成品	成品	未成品	成品	未成品								
堂の前	5	2	1	3	3	4	5	46	7		2	3						
篠ノ前	10	4	1	1			8	30	1									
砂 山	42	19	10	1			62	26	4		2	1	1					2
山 尾	29		5				3	172	1		15	5	1		5		3	
長 松	29	4	2				1	24	5		3							3
中曾根	5		2				2	1										
道 端	30		3	1			2	3	2	1	9	7				2	2	
古津八幡山	1	64	13	7			22	180	25	4	70	34	1	6		1	14	

第7表 濟跡別主な石器出土数

## C 金 属 製 品

弥生時代後期前半の堅穴住居SI318の1層から、ほぼ完形の金属製品1点（195）が出土した。X線写真では鑄造（空洞）が確認できることから、鍛造品と考えられる。基部の上面がやや平坦になることや、先端に向かって刃部に相当する部位の幅が細くなること、また側面が若干反り返るなどの特徴があり、鑿、または鑿など間接的な打撃によって機能するような工具が想定される。弥生時代の鉄器をまとめた川越哲志氏〔川越1993〕の分類によると、こうした形状を呈する器種は、鉄鑿B（袋部のないもの）、あるいは鑿B（刃部幅が身部幅より小さいもの）に類似する。新潟県内では現時点において類似品は見いだせない。しかし、近県の石川県白山市中奥町長竹遺跡で出土した金属製品に似ているものがある〔松任市教育委員会2000〕。金属製品は、基部と刃部を欠くが整と推定されており〔林2001〕、基部から刃部にかけて細くなる形状は、195と類似する。

## D ガラス小玉

9B11 区の II b1 層からガラス小玉 1 点 (196) が出土した。色調は透明感のある緑色を呈し、内部には気泡が多数確認できる。気泡は、孔と平行に列状を呈して分布するほか、やや大粒なものが孔の周辺に比較的多く、周縁部に至るほど散漫に分布する。詳細な整形技法は判然としないが、小口面は孔付近に平坦面を有するものの、明確な擦痕などは認められず、研磨整形は施されていない。こうしたガラス小玉の製作技術については、小口面の整形方法による形態分類 [富樫・徳澤 1995] や、気泡の観察による素材管からの截断後の処理方法に関する分析が試みられている [富樫・徳澤 1993]。これらの研究を参考にすると、196 は管切法により製作され、加熱による小口の表面張力整形、または押圧整形が想定される。本遺跡から出土した土器などの時期幅を考慮すると、弥生時代に帰属する遺物と考えられる。

## 2 遺構と遺跡

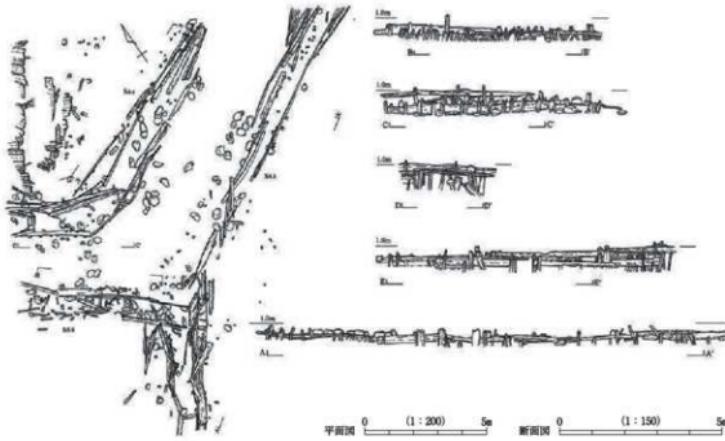
本遺跡は検出遺構や出土遺物から弥生時代中期後半～後期前半の集落と考えられるが、その規模等は不明である。本節では検出遺構のうち特徴的なものについて整理し、遺跡の性格について考えてみたい。

性格不明遺構 (SX51～53・254・277・314) としたものは、現地調査初期段階で、覆土と検出面上の土壤の差が明瞭でなく、人為的な遺構であるか否か判断できなかった。その後、炉を持つ SI318 が検出されるに至り、これら性格不明遺構についても住居の可能性を検討する必要が生じた。性格不明遺構は堅穴住居 (SI318) の周溝（堀溝）と同様の規模を呈する溝が巡る。また、その範囲内にピットを検出したほか、遺物が出土したことなどから、炉が検出できなかったものの堅穴住居との共通点が確認できる。

本遺跡の堅穴住居・性格不明遺構の平面形は、SX53 の隅丸方形・SX51・52 の円形 (SX51 は方形の張り出しを持つ)、そして SI318、SX254・277・314 の楕円形ないし隅丸長方形と複数の形状が存在する。東北地方の天王山式期の住居は円形の堅穴が一般的で [青木ほか 2006]、遺跡に近い村上市滝ノ前遺跡 [関 1972] でも径 5m 強の円形の堅穴住居が複数検出されている。しかし、類例は少ないが、山形県庚塙遺跡 [押切ほか 2007] や福島県館の内遺跡 [東日本理文化財研究会福島実行委員会 2000] では隅丸方形の平面形を持つ天王山式期の住居が、村上市中曾根遺跡 [青木ほか 2006] では掘り込みは確認できなかったが炉を持ち平面形が隅丸長方形と推測される炭化物の分布が確認されている。これらは円形以外の平面形を持つ住居の存在を示すものである。本遺跡における性格不明遺構についても楕円や隅丸方形とするものが多く、炉が検出できず掘り込みを確認できなかったものが多いが、周溝・ピットの存在や遺物も絡むことから、住居の可能性も考慮しなければならないであろう。

溝状遺構が構築された時期は、溝状遺構を覆う堆積土 (II c 層) が自然流路 SR1 の 6・7 層間、または 7・8 層間に位置すると想定されることから (図版 22)、SR1 の 7 層以前の遺構で、SR1 の出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる。溝状遺構の小ピットは、径が小さく柱痕が確認できないことに加えピット先端が尖るものがあることから、打ち込み式の杭と推定される。深さは 20cm 以下と浅く、傾くものも少なくなく、分布に粗密があり、浅いものは検出しきれていない可能性もある。

溝状遺構の配置は、南区の SR1 東岸で 3 ないし 4 列、北区では SR2 西岸が 1 列、SR1 東岸は 1 ないし 2 列確認できるが、7・8C 区の小ピット群などは部分的に複数列の存在を考えさせる列状の分布である。また、SD27 のように途中、流路から離れ SD6 と新旧関係にあることから、すべてが同時に存在したとす



第12図 青谷上寺地遺跡の護岸遺跡 (出展: [湯村ほか, 2000]一部加筆・修正)

る想定に考慮の余地を残すが、仮に同時存在したとした場合、流路が深く急峻な岸を持った北区と浅く緩い岸を持った南区とでは状況が異なっている。北区の溝状道構は幅が狭く1ないし2列であるのに対し、南区のそれは幅が広く3ないし4列と多い。また、道構検出面の標高も北区15.5～15.7m、南区15.2～15.4mと南区に向かい低くなり、弥生時代の流路の底は北・南区とも14.4m前後とほぼ一定であることから、標高が高く流路底との比高差が大きい所ほど簡易的で、逆に標高が低く流路底との比高差が小さい地区を入念に施工していると言える。珪藻分析において、SRIの6層前後は、河川の氾濫などに伴う増水時に周辺の土壤を引き込んで堆積した可能性が示されており、河川増水の影響を受けやすい環境下であったことが推測されている。溝状道構もこのような環境下で護岸としての役割を果たした施設と考えられないだろうか。鳥取県の沖積地に立地する青谷上寺地遺跡(弥生時代中期～古墳時代前期)〔湯村ほか2000〕では、多量の杭状の部材が出土している。杭を打ち込み、そこに横板を這わせて礎などで補強するもの(第12図)、杭が密集するか所などは護岸の強度に関係するようである。本遺跡では盛土や補強材の痕跡は検出できなかつたが、杭を打ち込むことや杭跡が密集する地点が認められる点など共通する。なお、護岸施設以外には土地の境界・区画の設定や防衛のための柵などが考えられるが、対岸(調査区外西側)を含め遺跡の全体像が把握できていないことからこれ以上の言及は避けたい。いずれにしても、溝状道構の性格解明には、他遺跡での類例の増加や、調査区周辺の調査が必要となろう。

県北に位置する村上市域では、中曾根遺跡などの発掘調査によって当該期の平野部での生活ぶりの一端が明らかになってきた〔青木ほか2006〕。平野部の遺跡は、住居などの道構群が川辺に点在して小規模な集落を形成する傾向がある〔前川ほか2006、青木ほか前掲〕。本遺跡でも堅穴住居をはじめ溝状道構など多くの道構を確認し、それら道構群が川辺に分布して集落が営まれる様子がうかがえる。特に溝状道構は流路との関わりが強く、当時の人たちが流路に対し積極的に働きかけた施設とすることができるよう。

## 要 約

- 1 堂の前遺跡は村上市下新保字高田 2351-2 に所在する。
- 2 遺跡は三面川左岸に広がる沖積微高地に立地し、標高は 15.4 ~ 16.0m である。
- 3 発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成 20 年度に実施した。発掘調査面積は 4,500m<sup>2</sup> である。
- 4 調査によって弥生時代の堅穴住居 1 軒、性格不明遺構 6 基、掘立柱建物 3 棟、溝状遺構 10 条、溝 11 条、土坑 31 基、ビット 435 基と当時存在した自然流路 2 条を検出した。
- 5 遺物は弥生土器、石器、金属製品、ガラス小玉が出土した。弥生土器は後期前半の東北系が主体を占める。そのほか、縄文時代晩期の土器、古代の須恵器、中・近世の陶磁器、鉄滓などが少數出土した。
- 6 金属製品は、出土状況から弥生時代後期前半のものと考えられる。器種は不明だが、形態的な特徴から鑿や鑿などの工具類である可能性が高い。
- 7 本遺跡は川辺に営まれた弥生時代中期後半~後期前半の集落であるが、集落の性格や規模は不明である。自然流路に沿った小ビットを伴う溝状遺構は、その構築位置や小ビットの配置状況などから護岸施設や簡易的な橋と考えておきたい。

## 引用・参考文献

- 青木 学<sup>はが</sup> 2006 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第168集 中曾根遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青木 学<sup>はが</sup> 2008 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第180集 松藤東遺跡・中曾根遺跡Ⅱ・大船跡Ⅰ」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 朝日村教育委員会 1980 「朝日村史」新潟県朝日村教育委員会
- アジア航測株式会社 1984 「朝日村現況図」
- 石川智紀 2003 「周知1(西部遺跡・中部北遺跡)確認調査」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成14年度(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の問題点」「北越考古学」第3号 北越考古学研究会
- 石川日出志 1997 「新潟県の石器組成の変遷」「国立歴史民俗博物館資料調査報告書7 農耕開始期の石器組成4」国立歴史民俗博物館
- 石川日出志 2000 「天王山式土器弥生中期説への反論」「新潟考古」第11号 新潟県考古学会
- 石川日出志 2003 「関東・東北地方の土器」「考古資料大観」第1巻第5章 小学館
- 石川日出志 2004 「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」「駿台史学」第120号 駿台史学会
- 石田守之<sup>はか</sup> 2006 「村上市滝ノ前遺跡出土の石器と土製品について」「三面川流域の考古学」第5号 奥三面を考える会
- 石丸和正<sup>はか</sup> 2003 「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相—村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心にして」「三面川流域の考古学」第2号 奥三面を考える会
- 大越道正<sup>はか</sup> 1990 「福島県文化財調査報告書第242号 東北横断自動車道追跡調査報告10 能登遺跡・南原B遺跡・村西遺跡・大村古墳群」福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター・日本道路公团
- 大瀧良夫<sup>はか</sup> 1997 「二又遺跡」「朝日村文化財報告書第12集 二又遺跡・堅岩遺跡・ガラハギ遺跡」新潟県朝日村教育委員会
- 押切智紀<sup>はか</sup> 2007 「山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集 庚塙遺跡発掘調査報告書」(財)山形県埋蔵文化財センター
- 小野 昭<sup>はか</sup> 1993 「朝日村文化財報告書第9集 長者岩屋岩陰(第1次・第2次調査報告)」新潟県朝日村教育委員会
- 加藤 学 2008 「村上L.C.～朝日L.C.間 遺跡推定地12 試掘調査」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成19年度(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川越哲志 1993 「弥生時代の鉄器文化」雄山閣
- 山北町史編さん委員会 1988 「山北町史 通史編」
- 鈴木俊成<sup>はか</sup> 1990 「神林村埋蔵文化財調査報告第2 高田遺跡 発掘調査概報」新潟県神林村教育委員会
- 鈴木正博 2002 「「十王台式」と「明戸式」—茨城県遺跡から見た「十王台式」に並行する所謂「天王山式系」土器型式の実態—」「婆良岐考古」24 婆良岐考古同人会
- 間 雅之 1972 「滝ノ前遺跡 新潟県村上市滝ノ前遺跡緊急調査概報」新潟県村上市教育委員会
- 浅沢規朗<sup>はか</sup> 2009 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 山元遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 浅沢規朗・野田豊文 2002 「新潟県北部地域の弥生時代中期後半から後期の土器について」「新潟考古学談話会会報」第26号 新潟考古学談話会
- 浅沢規朗・野田豊文<sup>はか</sup> 2003 「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相—村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に～」「三面川流域の考古学」第2号 奥三面を考える会
- 田辺早苗 1991 「神林村埋蔵文化財報告第3 長松遺跡発掘調査報告書」新潟県神林村教育委員会
- 田辺早苗 1994 「神林村埋蔵文化財報告第5 八幡山遺跡発掘調査報告書」新潟県神林村教育委員会

- 田辺早苗<sup>著</sup> 2001 「神林村埋蔵文化財調査報告書第9 衣田遺跡・道上遺跡」新潟県神林村教育委員会
- 田辺早苗<sup>著</sup> 2002 「神林村埋蔵文化財調査報告書第14 金曲遺跡」新潟県神林村教育委員会
- 田辺早苗<sup>著</sup> 2003a 「神林村埋蔵文化財調査報告書第13 六百地遺跡」新潟県神林村教育委員会
- 田辺早苗<sup>著</sup> 2003b 「神林村埋蔵文化財調査報告書第17 高田遺跡」新潟県神林村教育委員会
- 富樫雅彦・徳澤啓一 1993 「第4節 北新宿三丁目遺跡出土のガラス小玉の観察」「東京都新宿区北新宿三丁目遺跡－（仮称）新宿区立北新宿特別養護老人ホーム建設事業に伴う緊急発掘調査報告書－」新宿区福祉部遺跡調査会
- 富樫雅彦・徳澤啓一 1995 「Ⅱ. ガラス小玉の分析」「東京都新宿区上落合二丁目遺跡－スープニアコーポ落合－Ⅱ建設事業に伴う緊急発掘調査報告書－」青木電器工業株式会社・新宿区上落合二丁目遺跡調査会
- 中村五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」「東北考古学の諸問題」東出版家社
- 新潟県 1987 「土地分類基本調査 村上 5万分の1 国土調査」新潟県農地部農村総合整備課
- 福宜田佳男 2002 「遺物組成からみた高地性集落の諸類型」「古代文化」第54巻第4号（財）古代学協会
- 野田豊文 2005 「三面川流域における弥生時代の終わり－天王山式土器から見た新潟県内弥生後期の様相－」「三面川流域の考古学」第4号 奥三面を考える会
- 野田豊文 2006 「新潟県における「天王山式土器」について」「新潟考古学談話会会報」第31号 新潟考古学談話会
- 秦 昭繁 2001 「新潟県新潟県北部地域の石器石材環境（2）一関川村獅子舞岩の珪質頁岩分析と石材流通構造－」「北越考古学」第12号 北越考古学研究会
- 林 大智 2001 「第5章 農耕具 第4節 工具 2 鉄製工具」「石川県考古資料調査・集成事業報告 補遺編」石川県考古学研究会
- 東日本埋蔵文化財研究会福島実行委員会 2000 「東日本弥生時代後期の土器編年」
- 平田貴正<sup>著</sup> 2009 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第195集 桂木田遺跡」新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 前川雅夫<sup>著</sup> 2006 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第162集 道端遺跡V」新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 松任市教育委員会 2000 「松任市中奥・長竹遺跡」石川県松任市教育委員会・松任市
- 村上市 1999 「村上市史」通史編1 原始・古代・中世
- 湯村 功<sup>著</sup> 2000 「鳥取県教育文化財団調査報告書 67 青谷上寺地遺跡1」（財）鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター
- 吉井雅勇 2006 「荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第13集 坂町宮ノ腰D遺跡II」新潟県荒川町教育委員会

## 自然科学分析引用文献

- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom* 10 35-47.
- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」「東北地理」42 東北地理学会 73-88.
- 原口和夫・三友清史・小林 弘、1998 「埼玉の藻類 硅藻類」「埼玉県植物誌」埼玉県教育委員会 527-600.
- 林 昭三 1991 「日本産木材」「顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫 1996 「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－」「日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集」日本文化財科学会 62-63.
- Hustedt, F. 1937-1939 Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java., Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie. Supplement.15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790,16:1-155,16:274-394.

- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究 資料』31 京都大学木質科学研究所 81-181.
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究 資料』32 京都大学木質科学研究所 66-176.
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究 資料』33 京都大学木質科学研究所 83-201.
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究 資料』34 京都大学木質科学研究所 30-166.
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究 資料』35 京都大学木質科学研究所 47-216.
- 伊藤良永・堀内誠司 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 珪藻学会 23-45.
- 株式会社古環境研究所 1996 「高柳 A・B 遺跡出土木材の樹種同定」「高柳 A 遺跡・高柳 B 遺跡・名割遺跡県営圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」新潟県荒川町教育委員会 83-85.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五 2006 「小林 弘珪藻図鑑」第1巻 (株) 内田老舗図 531p.
- 小林謙一 2007 「関東における弥生時代の開始年代-绳文時代から弥生時代へ-」「新弥生時代のはじまり」第2巻 雄山閣 5245.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」「第四紀研究」27 1-20.
- Krammer, K. 1992 *PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.J.CRAMER* 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986 *Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1.* Gustav Fischer Verlag 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988 *Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,Suriellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.* Gustav Fischer Verlag 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a *Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaeae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.* Gustav Fischer Verlag 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b *Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritische Ergänzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4.* Gustav Fischer Verlag 248p.
- 三村昌史 2003 「樹種同定」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第127集 道端遺跡Ⅱ」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 36-40.
- Lowe, R. L. 1974 *Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms* 334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Enviro. Protect. Agency, Cincinnati.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990 *The diatoms. Biology & morphology of the genera*. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」地球社 176p.
- 植田弥生 2005 「SK001出土炭化材の樹種同定」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第145集 道端遺跡Ⅳ」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 24-25.
- Vos, P.C. & H. de Wolf 1993 Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands: methodological aspects.*Hydrobiologia* 269/270:285-296.
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆 晶子 2005 「淡水珪藻生態図鑑」内田老舗図 666p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修)」海青社 122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].
- 柳沢幸夫 2000 「計数・同定」「化石の研究法 -採集から最新の解析法まで-」化石研究会(編)・共立出版株式会社 49-50.



造構観察表

掘立柱建物ピット

遺構名	ピット No.	平面形状	断面形状	施 稿 (m)	底 面	壁 高	覆 土
S81	P1	円形	V字状	0.22	0.22	0.15	2
	P2	円形	U字状	0.17	0.17	0.22	15.42
	P3	円形	U字状	0.22	0.20	0.19	15.43
	P4	楕円形	U字状	0.32	0.29	0.21	15.36
	P5	楕円形	U字状	0.29	0.22	0.20	15.48
	P6	楕円形	V字状	0.24	0.19	0.18	15.43
	P7	楕円形	U字状	0.34	0.27	0.26	15.44
	P8	楕円形	U字状	0.27	0.19	0.17	15.41
	P9	楕円形	U字状	0.21	0.20	0.19	15.44
	P10	楕円形	U字状	0.19	0.11	0.19	15.46

遺構名	ピット No.	平面形状	断面形状	施 稿 (m)	底 面	壁 高	覆 土
S82	P4	椭円形	U字状	0.33	0.25	0.18	15.42
	P6	椭円形	テラス状	0.22	0.19	0.25	15.47
	P7	椭円形	弧状	0.20	0.17	0.13	15.40
	P8	円形	U字状	0.20	0.18	0.16	15.45
	P9	円形	弧状	0.17	0.16	0.13	15.50
S83	P1	円形	U字状	0.25	0.24	0.13	15.51
	P2	円形	U字状	0.23	0.20	0.19	15.58
	P3	円形	弧状	0.26	0.26	0.11	15.52
	P4	不規則形	弧状	0.34	0.33	0.11	15.36

溝状遺構

遺構名	發 著	横断面	時期	断面形状	施 稿 (m)	底 面	傾斜方向 (高→低)	長軸方向	覆 土	遺 物
S106	北	4・5・10・11B、5・10C	II b-N/a	弧状	0.70	0.12 - 0.35	0.08	北→南	北 N8° E	1 陶生土器
S107	北・東	4・6B、1・4・6・8・9C	II b-N/a	弧状	0.70	0.15 - 0.56	0.13	東→北	南 N30° E	1 鋼筋
S126	北	8C	N/a	弧状	0.4	0.11 - 0.35	0.07	平傾	北 N21° E	1
SD128	北	8C	N/a	不整形	1.0	0.17 - 0.32	0.12	平傾	北 N44° E	1
SD149	北・東	2 - 3E	III b	弧状	0.79	0.12 - 0.25	0.20	平傾	北 N15° E	1
SD316	南	05B-C、05 - 03-1-2D、1-2E	III b	弧状	8.11	0.22 - 0.50	0.30	北→南	北 N10° W	2 陶生土器
SD317	南	05B-C、05 - 2D	III b	弧状	9.22	0.40 - 0.72	0.16	平傾	北 N10° W	1
SD328	南	05B、05 - 03C、05 - 1D	III b	弧状	5.82	0.18 - 0.95	0.08	北→南	北 N30° E	1
SD347	南	04C	III b	不整形	15.2	0.13 - 0.54	0.12	平傾	北 N22° E	1
SD349	北	11 - 12D	III a	弧状	18.0	0.23 - 0.30	0.05	北→南	南 N5° E	1

溝

遺構名	發 著	横断面	時期	断面形状	施 稿 (m)	底 面	傾斜方向 (高→低)	長軸方向	覆 土	遺 物
SD7	北	3・4B、4 - 7C、6 - 7D	II b-N/a	抛物	0.67	0.10 - 1.13	0.30	北→南	南 N4° E	5 陶生土器
SD106	北	2R、2 - 3C、3 - 4D、4E	III b	半円形	30.5	0.02 - 0.97	0.30	西→東	南 N46° E	6
SD127	北	4 - 5D	III b	半円形	1.6	0.36	0.10	南→北	北 N70° E	1
SD252	北・東	3 - 4D、2 - 4E	III b	半円形	4.2	1.60	0.34	北→南	北 N43° E	3
SD253	北	4D - E	III b	半円形	0.85	0.18 - 1.45	0.37	西→東	北 N6° E	3
SD250	南	03 - 01C、01 - 2D、2 - 3E	II b、SH1-2	半円形	0.53	0.08 - 0.57	0.20 - 0.45	北→南	北 N2° E	1 陶生土器 鉛錠
SD259	南	05B - C	III b	弧状	7.4	0.20 - 0.40	0.05 - 0.30	南→北	北 N103° E	2
SD330	南	04 - 08D	III b	半円形	10.0	0.10 - 0.40	0.20	北→南	南 N30° E	3
SD334	南	03 - 04D	III b	半円形	3.6	0.10 - 0.40	0.25	南→北	北 N90° E	3
SD339	南	05C - D	III b	弧状	7.3	0.14 - 0.40	0.05 - 0.10	南→北	北 N94° E	1
SD348	南	04C	III b	半円形	3.33	0.25 - 0.40	0.02	北→南	北 N44° E	2

土 壇

遺 構	發 著	横断面	時期	形 状	施 稿 (m)	底 面	近底面高 (m)	長軸方向	覆 土	遺 物
SK3	北	6D	II a	弧状	1.30	0.06	0.07	北 N9° E	1 陶生土器	
SK13	北	4D	II b	半円形	1.20	0.14	0.13	北 N65° E	2 陶生土器	
SK16	北	6C	II b	半円形	0.32	0.09	0.09	北 N174° E	1 石器	
SK20	北	6C	II b	半円形	0.74	0.12	0.06	北 N30° E	1 石器	
SK29	北	6C	II b	半円形	0.64	0.09	0.07	北 N66° E	1 石器	
SK50	北	5B	II a	半円形	1.71	1.38	0.31	北 N152° E	4 陶生土器	
SK54	北	5D	II a	半円形	0.77	0.20	0.10	北 N37° E	1 陶生土器	
SK56	北	4D	III b	半円形	0.57	0.07	0.31	北 N48° E	1 陶生土器・石器	
SK131	北	5D	III b	半円形	1.20	0.96	0.38	北 N22° E	2	
SK256	北	2E	III b	< 半円形 >	0.62	0.05	0.10	北 N80° E	-	
SK278	北	2E	III b	小明	0.98	0.41	0.30	北 N62° E	- 2	
SK295	北	3D	III b	< 半円形 >	0.64	0.18	0.15	北 N90° E	- 4	
SK300	北	3D	III b	弧状	0.66	0.2	-	北 N30° E	- 1 石器	
SK301	北	4 - 5C - D	III b	半円形	2.30	1.00	0.56	北 N29° W	6 有形	
SK321	南	01B	III b	半円形	2.12	1.50	0.63	北 N16° E	4	
SK341	南	02D	III b	半円形	2.00	1.25	0.59	南 N7° E	6 有形	
SK356	南	02D	III b	小半形	0.69	0.41	0.11	北 N59° E	1	
SK327	南	02D	SH3B 未発	半円形	2.09	1.79	0.51	14.84	- 2 陶生土器	
SK333	南	04D	半円形	弧状	0.77	0.60	0.16	北 N28° E	-	
SK335	南	1D - E	III b	< 半円形 >	1.44	1.26	0.21	15.38	- 2	
SK336	南	01D	III b	< 半円形 >	1.39	1.31	0.27	15.17	- 3	
SK337	南	04D	III b	半円形	2.18	1.48	0.57	北 N04° E	4	
SK338	南	04D	III b	< 半円形 >	0.90	0.41	0.10	北 N21° W	2	
SK340	北	2 - 3E	III b	良美半円形	2.94	0.45	0.40	北 N30° E	3	
SK341	南	2C - D	III b	不整形	1.54	0.57	0.08	北 N15° E	- 1	
SK342	南	03D	半円形	半円形	1.27	0.79	0.21	15.19	南 N7° W	3
SK343	南	2D	半円形	半円形	0.92	0.60	0.32	北 N28° E	- 2	
SK344	南	01 - 02D	III b	< 半円形 >	1.24	1.14	0.06	北 N16° E	- 2	
SK346	南	02D	III b	弧状	1.82	1.02	0.08	15.44	南 N4° E	2 陶生土器
SK351	南	1E	III b	半円形	0.72	0.54	0.24	北 N50° W	2	

No.	地點名	形態	地質	分類	測定部位	口徑	厚度	法蘭半径	高さ	地質	外観		内観		文部省報告書上		測定	備考
											直	斜	直	斜	直	斜		
1	日本原村 1.3.4.1 丁子路	圓柱	直	砂質土質	直筋8根 鋼板	-	24	(23)	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
2	SNSZ-1 1号	圓	中筋8根 鋼板	口捲螺	-	-	(44)	直筋合計6根 鋼板	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	SNSZと門司原生土質が 連絡し、2号も同上。
3	SNSZ 1号	圓	直筋8根 鋼板	口捲螺	-	-	(11)	砂質土質を多く含む G.	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
4	SNSZ 1号	圓	直筋8根 鋼板	制螺	-	-	(27)	砂質土質を少し。 直筋を少く。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
5	SNSZ 1号	圓	直筋8根 鋼板	制螺	-	-	(15)	砂質土質を少し。 直筋を少く。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	炭化した木の埋込み。
6	SOT 1号	圓	直筋7根 鋼板	制螺	-	-	(43)	砂質土質。 石英。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
7	SCE 1号	圓	直筋7根 鋼板	制螺	-	11.1	(58)	砂質土質。 白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
8	SCLD 2号	圓	直筋7根 鋼板	制螺	-	5.3	(32)	砂質土質。 砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
9	SCLD 1号	圓	直筋8根 G.	制螺	-	-	(27)	砂質土質。 黄白い砂質土質を多く 含む。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
10	SCLD 1.2.2.4 1号	圓	直筋8根 G.	制螺	-	-	(36)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	Nal1～3号と似る。
11	SCLD 2号	圓	直筋8根 G.	制螺	-	-	(45)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	Nal2～13号と似る。
12	SCLD 1.2.2.4 2号	圓	直筋8根 G.	制螺	-	-	(225)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	細粒度0.5。Nal2～11 13号と似る。
13	SCLD 1.2.2.4 3号	圓	直筋8根 G.	制螺	-	6.5	(79)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	Nal2～14号と似る。
14	SCLD 1.9 1号	圓	直筋7根 G.	制螺	-	-	(26)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
15	SCLD 1.9 2号	圓	直筋7根 G.	制螺	-	-	(44)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	Nal3～14号と似る。
16	SCLD 1.9 3号	圓	直筋7根 G.	制螺	-	-	(42)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	Nal3～14号と似る。
17	SCLD 2号	圓	直筋8根 G.	制螺	-	-	(22)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
18	SCLD 2号	圓	直筋8根 G.	制螺	-	-	(40)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
19	SCLD 2号	圓	直筋6根 G.	制螺	-	-	(16)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
20	SCLD 2号	圓	直筋7根 G.	制螺	-	-	(32)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
21	SCLD 2号	圓	直筋3根 G.	制螺	-	-	(42)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
22	SCLD 2号	圓	直筋7根 G.	制螺	-	-	(134)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
23	SCLD 4号	圓	中筋8根 G.	口捲螺	-	-	(28)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	
24	SCLD 4号	圓	直筋8根 G.	口捲螺	-	20.0	36.5	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	底物は土木工事用。 保水性。
25	SCLD 4号	圓	直筋8根 G.	口捲螺	-	-	(60)	砂質土質。 黄白い砂質土質。	直	砂質土質	直	無	直	無	直	無	○	保水性。



## 秀生土器(3)

No.	地名	山種	高さ	分類	泥質部	法量(m <sup>3</sup> )	土	外・面	内・面	地質	測定者	備考	
51	山1号墳	山種	9m	少頭合	1面1側	原底面	-	-	良白色	「ナ」(頭位)、浅褐色、底面に褐鐵鉄分、少頭・石英、 灰白色、砂鉄分少、白灰、 底面に全頭合有。	原底色	「ナ」(頭位)、浅褐色、 底面に「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	Nishio・近1号同一層。
52	S817015 4-9号	山	少頭合	1面1側	原底	-	-	(75)	上・小頭	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	Nishio・近1号同一層。
53	S817015 9号	山	少頭合	1面2側	原底	-	-	(36)	上・小頭・石英・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
54	S817013 9号	山	少頭合	1面6側	原底	-	-	(25)	上・小頭・石英・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
55	S817014 9号	山	少頭合	1面7側	原底	-	-	(35)	上・小頭・石英・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
56	S817015 9号	山	少頭合	1面7側	原底	-	-	(36)	上・小頭・石英・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
57	S817012 9号	山	少頭合	1面3側	口横部	-	-	(40)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
58	S817012 9号	山	少頭合	1面3側	口横部	-	-	(31)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
59	S817011 9号	山	少頭合	1面5側	口横部	-	-	(26)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
60	S817016 9号	山	少頭合	1面7側	口横部	-	-	(46)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
61	S817015 9号	山	少頭合	1面7側	口横・一部頭	-	-	(82)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
62	S817015 9号	山	少頭合	1面8側	口横部	-	-	(25)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
63	S817011 9号	山	少頭合	1面5側	脚部	-	-	(42)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
64	S817011 9号	山	少頭合	1面5側	脚部	-	-	(41)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
65	S817011 9号	山	少頭合	1面5側	脚部	-	-	(26)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
66	S817011 9号	山	少頭合	1面5側	脚部	-	-	(26)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
67	S817011 9号	山	少頭合	1面3側	脚部	-	-	(47)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
68	S817012 9号	山	少頭合	1面5側	脚部	-	-	(41)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
69	S817012 9号	山	少頭合	1面5側	脚部	-	-	(38)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
70	S817023 9号	山	少頭合	1面5側	脚部	-	-	(68)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
71	S817014 9号	山	少頭合	1面8側	脚部	-	-	(72)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
72	S817012 9号	山	少頭合	1面2側	口横部	-	-	(34)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
73	S817014 10号	山	少頭合	1面2側	口横部	-	-	(37)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
74	S817014 10号	山	少頭合	1面2側	脚部	-	-	(42)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	
75	S817014 10号	山	少頭合	1面2側	脚部	-	-	(36)	上・小頭・ 灰白色、 底面に「ナ」(頭位)。	灰白色	「ナ」(頭位)、 底面に「ナ」(頭位)。	○	

測定番号	測定方法	特徴	分類	測定部位	法量(mg)	外観	文様・痕跡など		内面	内面 表面	地質	備考
							外観	内面				
581-713	直火炉	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(31) 今面帯。石英・黄玉・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
76	581-713	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(31) 今面帯。石英・黄玉・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
77	581-714	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(31) 今面帯。石英・黄玉・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
78	581-714	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(32) 石英・長石・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
79	581-714	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(32) 石英・蛋白石を少々。石英・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
80	581-713	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(30) 硅酸岩。蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
81	581-711	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(43) 硅酸岩。蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
82	581-713	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(79) 石英・蛋白石・透閃石を少々。蛋白石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
83	581-713	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(36) 石英・蛋白石・透閃石を少々。蛋白石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
84	581-718	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(34) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
85	581-719	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(77) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
86	581-712	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(31) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
86	581-712	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(97) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
87	581-713	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(80) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
88	581-713	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(41) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
89	581-717	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(21) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
90	582-1	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(21) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
91	582-1	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(17) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
92	582-2	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(17) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
93	582-17	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(23) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
94	582-1	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(26) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
95	582-2	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(39) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
96	582-2	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(30) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
97	582-11	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(18) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
98	582-12	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(15) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
99	582-12	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(22) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。
100	582-18	直火炉	直火炉	直火炉	-	-	(26) 石英・蛋白石・透閃石。	内面は黒褐色。	内面	内面	内面	( ) は内面。( ) は内面。

試験番号	試験名	試験地	分類	泥炭率(%)	土質(成層)	外観	文書・測量記入		測定	測定日
							内面	側面		
101 6.9	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(26) 砂・粘土・砂利を少含む、石英・灰岩。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路。	ナメ (横切), ナメ	○
102 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路。	ナメ (横切), ナメ	○
103 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路。	ナメ (横切), ナメ	○
104 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路。	ナメ (横切), ナメ	○
105 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路。	ナメ (横切), ナメ	○
106 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路 (斜), 水路 (斜), ナメ。	ナメ (斜), ナメ	○
107 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路 (斜), ナメ。	ナメ (斜), ナメ	○
108 4.17	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路 (斜), 水路 (斜), ナメ (横切), ナメ	ナメ (横切), ナメ	○
109 4.17	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路 (斜), ナメ (斜), ナメ	ナメ (斜), ナメ	○
110 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路 (斜), ナメ	ナメ (斜), ナメ	○ ○
111 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), ナメ	ナメ (横切), ナメ	○ ○
112 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), ナメ	ナメ (横切), ナメ	○ ○
113 6.2	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(28) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), ナメ	ナメ (横切), ナメ	○ ○
114 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(24) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), ナメ	ナメ (横切), ナメ	○ ○
115 7.37	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(26) 砂・粘土・砂利を含む。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路 (斜), 水路 (斜), ハナツ (横切), ナメ	○	○
116 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(31) 小槽を認めない。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 平行溝 H12 (横切), ハナツ (横切), ナメ	ナメ (横切), ナメ	○
117 7.37	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(35) 小槽を認めない。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路 (斜), ハナツ (横切), ナメ	ナメ (横切), ナメ	○
118 6.97	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(36) 小槽。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), ハナツ (横切), ハナツ (斜), ナメ	ナメ (横切), ナメ	○ ○
119 3.82	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(38) 小槽を認めない。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), 水路 (斜), ハナツ (斜), ナメ	ナメ (斜), ナメ	○ ○
120 2.97	美	泥炭地帯	1.5% 砂	-	(36) 小槽を認めない。	灰岩	にぶい・黄褐色	真 丸柱 H12 (横切), ナメ	ナメ (横切), ナメ	○ ○

計上記のTは横幅、Oは試験地帯の名前

## 遺物觀察表

## 石 器(1)

報告 No.	器種	石質	出土位置			寸法 (mm : s)			複合関係	備考
			グリッド・下	通 横	層 序	長さ	幅	厚さ		
121	石核	頁岩 1	5C9	SX53	I	17.8	14.0	4.3	0.7	
122	石核	頁岩 2	7B18		II b2	33.7	14.7	3.6	1.1	
123	石核	頁岩 2	6B17		II b2	36.3	13.9	3.5	1.0	
124	石核	頁岩 2	5B17		II b2	(24.7)	16.0	4.3	1.2	
125	石核	頁岩 1	4C25	SX30	4	34.0	15.7	6.2	1.8	
126	石核	頁岩 2	5C1		II a	(19.0)	16.8	3.3	1.0	未成品
127	石核	頁岩 1	7B11		II b2	29.5	22.4	7.0	3.2	未成品
128	石核	泥灰岩	7S7		②	(21.1)	6.2	5.4	0.7	
129	石核	頁岩 2	6D		II b1	72.1	31.2	14.3	23.9	
130	石核	頁岩 2	2B24	SB1	I	77.5	40.5	19.3	21.9	
131	石核	頁岩 2	4D		II a	41.9	64.5	8.6	15.1	
132	圓形石器	頁岩 2	7T7		②	45.3	21.0	7.7	6.1	
133	圓形石器	頁岩 2	2B25		II b2	32.1	21.1	7.8	4.9	
134	圓形石器	頁岩 2	5B25		II b2	(22.6)	17.0	5.2	1.9	
135	圓形石器	頁岩 2	7T7		①	54.1	36.3	20.6	34.8	未成品
136	圓形石器	頁岩 2	7B22		II b2	46.8	35.4	12.6	13.2	未成品
137	圓形石器	頁岩 2	5B15		II b2	25.8	57.5	15.7	19.5	未成品
138	圓形石器	頁岩 2	8C4		II b2	29.5	28.1	8.1	6.0	
139	圓形石器	頁岩 1	8E22		II b2	28.5	17.8	9.8	3.7	
140	圓形石器	頁岩 1	6C4		II b2	31.1	31.4	11.6	11.5	
141	圓形石器	頁岩 2	5B19		II b2	14.7	19.2	7.2	1.9	
142	圓形石器	頁岩 1	7B13	SB1	10	36.7	26.6	9.2	6.7	
143	不定形石器	頁岩 2	5C9		II b2	52.9	43.4	18.1	35.7	抉入部あり
144	不定形石器	頁岩 2	7T7		②	55.1	27.3	16.4	7.4	抉入部あり
145	不定形石器	頁岩 2	4C23		II b2	63.4	23.5	8.1	9.9	抉入部あり
146	不定形石器	頁岩 2	7T7		②	33.2	16.0	4.0	1.6	抉入部あり
147	不定形石器	頁岩 2	7D		II b2	49.1	34.0	11.5	11.0	
148	不定形石器	頁岩 2	7T7		1'	49.2	40.1	12.1	39.5	
149	不定形石器	頁岩 2	6C21		II b2	36.5	39.0	11.2	11.6	
150	不定形石器	頁岩 2	5B25		II b2	49.7	48.5	17.1	32.8	
151	不定形石器	頁岩 2	6E		II b2	30.1	40.4	11.3	11.2	
152	不定形石器	泥灰岩	5B14		II b2	54.0	39.6	13.6	16.5	
153	不定形石器	頁岩 2	4C5		II b2	50.6	27.0	11.9	11.6	
154	不定形石器	頁岩 2	5B18		II b2	(36.4)	19.7	9.6	8.2	
155	不定形石器	頁岩 2	7B		II b2	54.5	29.8	11.8	14.9	
156	不定形石器	頁岩 1	6B21		II b2	25.0	21.3	7.2	3.3	
157	不定形石器	頁岩 2	2B14		II b2	32.7	14.0	5.2	2.2	
158	不定形石器	頁岩 2	5B13		II b2	18.4	31.6	7.5	2.6	
159	不定形石器	頁岩 2	5B25		II b2	37.2	30.4	17.7	30.0	
160	不定形石器	頁岩 2	6B20	SB1	6	(25.9)	39.8	8.2	6.7	
161	不定形石器	泥灰岩	8B11		II b2	48.8	34.9	11.5	14.9	
162	不定形石器	頁岩 2	5C3		II b2	53.6	34.8	10.6	15.8	
163	不定形石器	頁岩 2	4G24		II b2	(42.4)	34.3	8.3	10.6	
164	不定形石器	頁岩 2	4C5		II b2	41.0	27.2	9.7	7.8	
165	不定形石器	頁岩 2	7S7		②	47.7	29.5	8.5	11.5	
166	不定形石器	頁岩 1	6B22		II b2	19.9	19.2	4.2	1.5	
167	不定形石器	頁岩 2	4C14		II a	63.5	39.8	13.4	22.6	
168	不定形石器	頁岩 2	6C12	SX18	I	74.4	36.9	15.7	35.5	
169	砾石	泥灰岩	02B17	SX38	I	37.0	55.4	20.9	33.5	
170	砾石	安山岩	04B8		II c	125.0	73.2	21.9	452.9	
171	砾石	砂質	2E		複数	(47.1)	54.5	10.5	41.0	
172	砾石	安山岩	7S7		①	(57.5)	52.2	27.3	109.0	
173	砾石	砂質	5C19		II b2	131.7	70.8	56.2	842.7	
174	石核	石英	2E		複数	70.0	52.2	35.4	136.9	
175	石核	頁岩 2	5C12		II a	58.6	67.3	29.8	144.8	
176	石核	頁岩 2	5B25		II b2	61.5	35.7	20.8	43.6	
177	石核	頁岩 2	6C17		II b2	40.9	49.1	29.0	56.2	
178	石核	頁岩 2	7S24		II b2	36.7	51.5	20.0	36.8	
179	複合資料	頁岩 2	-	-	-	46.4	47.5	56.2	119.3	189 - 181
180	不定形石器	頁岩 2	7T7		②	24.2	29.7	6.0	3.6	181
181	石核	頁岩 2	4C4	SX32	I	66.3	47.4	46.2	115.7	180
182	複合資料	頁岩 2	-	-	-	61.5	52.1	46.8	99.3	183 - 185
183	刮片	頁岩 2	7T7		②	27.7	35.1	7.6	4.6	184 - 185
184	刮片	頁岩 2	5B17		II b2	48.9	23.8	13.1	7.8	183 - 185
185	石核	頁岩 2	5B25		II b2	50.9	43.5	38.0	86.9	183 - 184

出土位置の下は試面番、◎場は試掘番

## 石 器(2)

報告 No.	器 別	石 質	出土位置			法 量 (mm · g)				種合関係	備 考
			グリッド - T	通 構	層 底	長さ	幅	厚さ	重さ		
186	接着資料	頁岩 2	-	-	-	79.4	34.0	18.9	306	187 - 188	
187	剝片	頁岩 2	77T	-	②	35.5	29.6	7.3	6.0	188	
188	磨光石器	頁岩 2	50B14	-	II b2	61.7	33.8	18.8	24.6	187	未成品
189	接着資料	頁岩 2	-	-	-	50.6	49.5	19.2	28.6	190 - 191	
190	剝片	頁岩 2	40B14	-	II b1	30.0	19.7	9.9	3.7	191	
191	不定形石器	頁岩 2	77T	-	①	49.2	41.4	13.0	24.9	190	
192	接着資料	頁岩 2	-	-	-	51.9	63.0	17.8	60.6	193 - 194	
193	剝片	頁岩 2	50B16	-	II b2	50.3	54.5	17.8	27.2	194	
194	剝片	頁岩 2	60H13	-	II b2	49.4	48.5	17.6	33.4	193	

出土位置の下は試掘場、○印は試掘調査の履名

## 金属製品観察表

報告 No.	種 別	材 質	出土位置			法 量 (mm · g)				備 考
			グリッド	通 構	層 底	長さ	最 大 幅	最 大 厚	重 量	
195	平頭 鉗	SD3D14	SU338	1	-	135.5	1.8	0.9	19.4	定形、基部は平頭

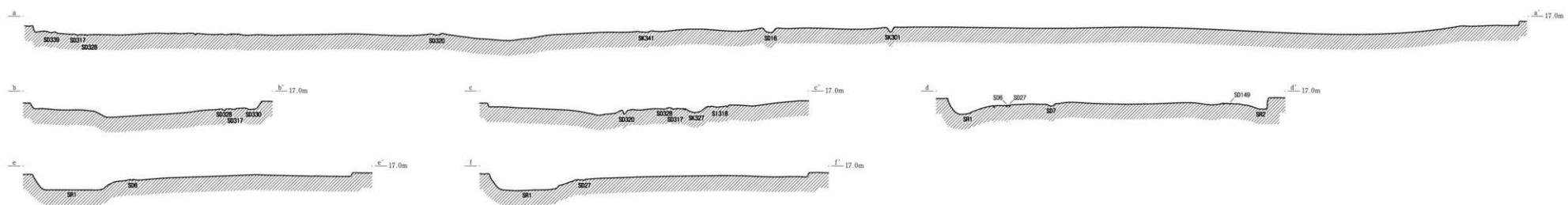
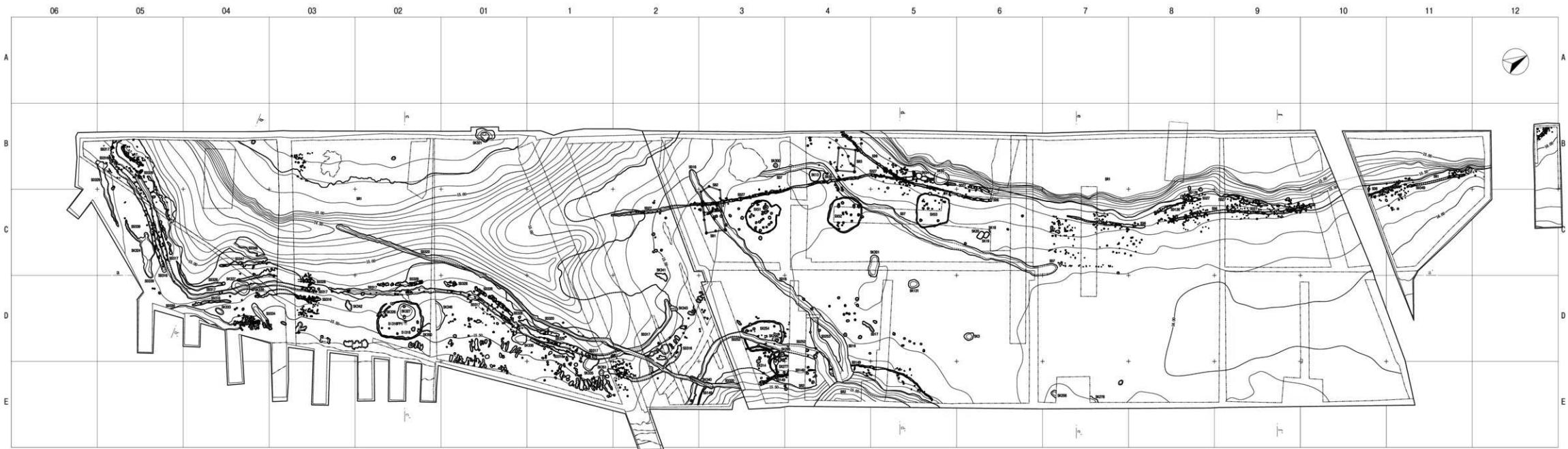
## ガラス小玉観察表

報告 No.	種 別	出土位置			法 量 (mm · g)				色 調	備 考
		グリッド	層 底	外 径	上 面 径	孔 径	厚 さ	重 さ		
196	ガラス小玉	90B11	-	II b1	4.35 - 4.55	3.30	2.00 - 2.10	2.50 - 2.70	0.07	褐色

## そのほかの遺物観察表

報告 No.	出土位置	層 構	種 別	器種	既存記述	法 量 (cm)		胎 土	表面色調	施文・色調	軸調	既成	時 期	備 考
						13壁	瓶伴							
197	7B12 SR1	8	碑文 土器	深縁	胸部	-	-	-	砂少量、石 英、漂母微量	灰色	T字文	-	良文化時代 中期後半	大圓 A 式
198	1D18 SD329	I	研磨器	蓋	胸部	-	-	-	石系・砂 微量	灰白色	外側：灰色 内側：灰白色	-	良	古代
199	9C	II b2	珠團鏡	蓋	胸部	-	-	-	紺少量	-	外側：灰黃 色	-	良	中世
200	3H21	II a	陶器	瓶	底部～底部	-	4.6	(2.9)	-	灰白色	外側：灰 色	良	14C 約半 唐津燒	
201	測量区	I	陶器	瓶	底部～底部	-	4.4	(3.3)	-	灰白色	外側：灰 色	良	14C 約半 唐津燒	

# 図 版



0 (1 : 300) 15m



06

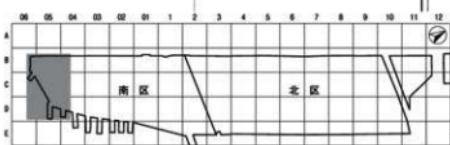
05

04

B

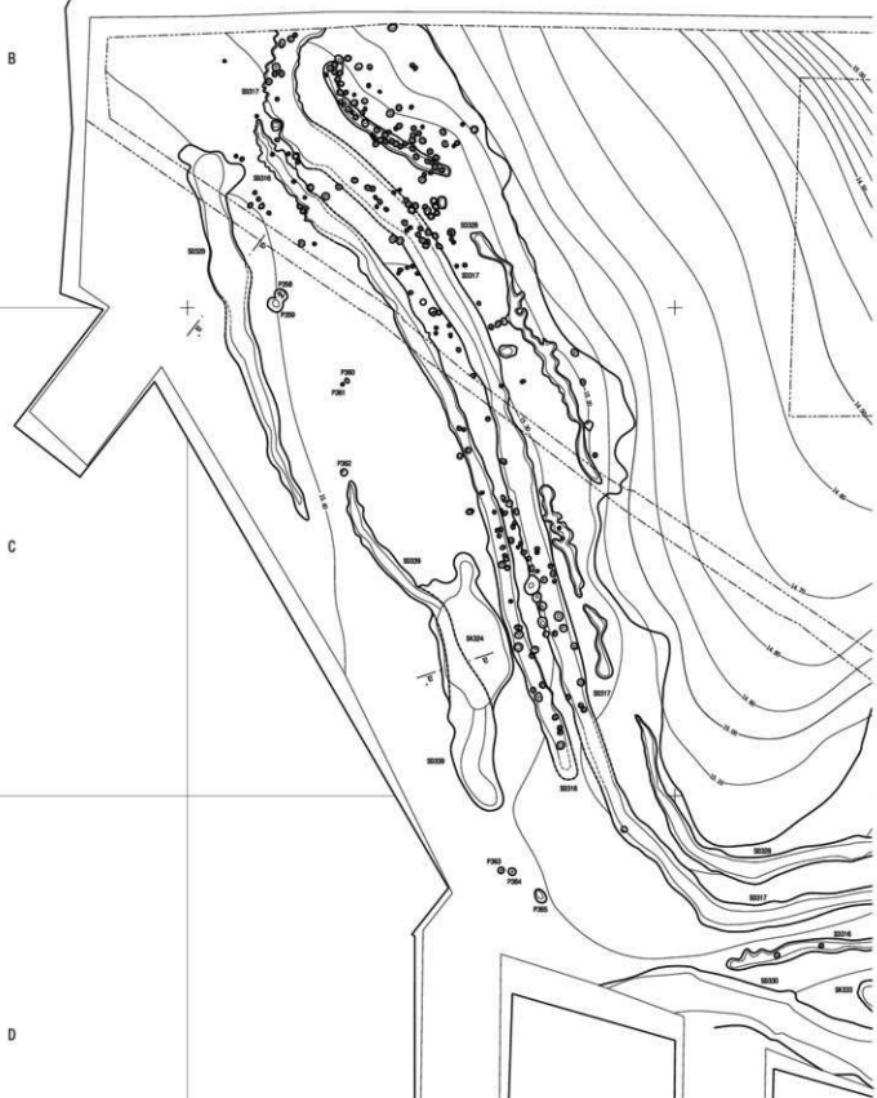
C

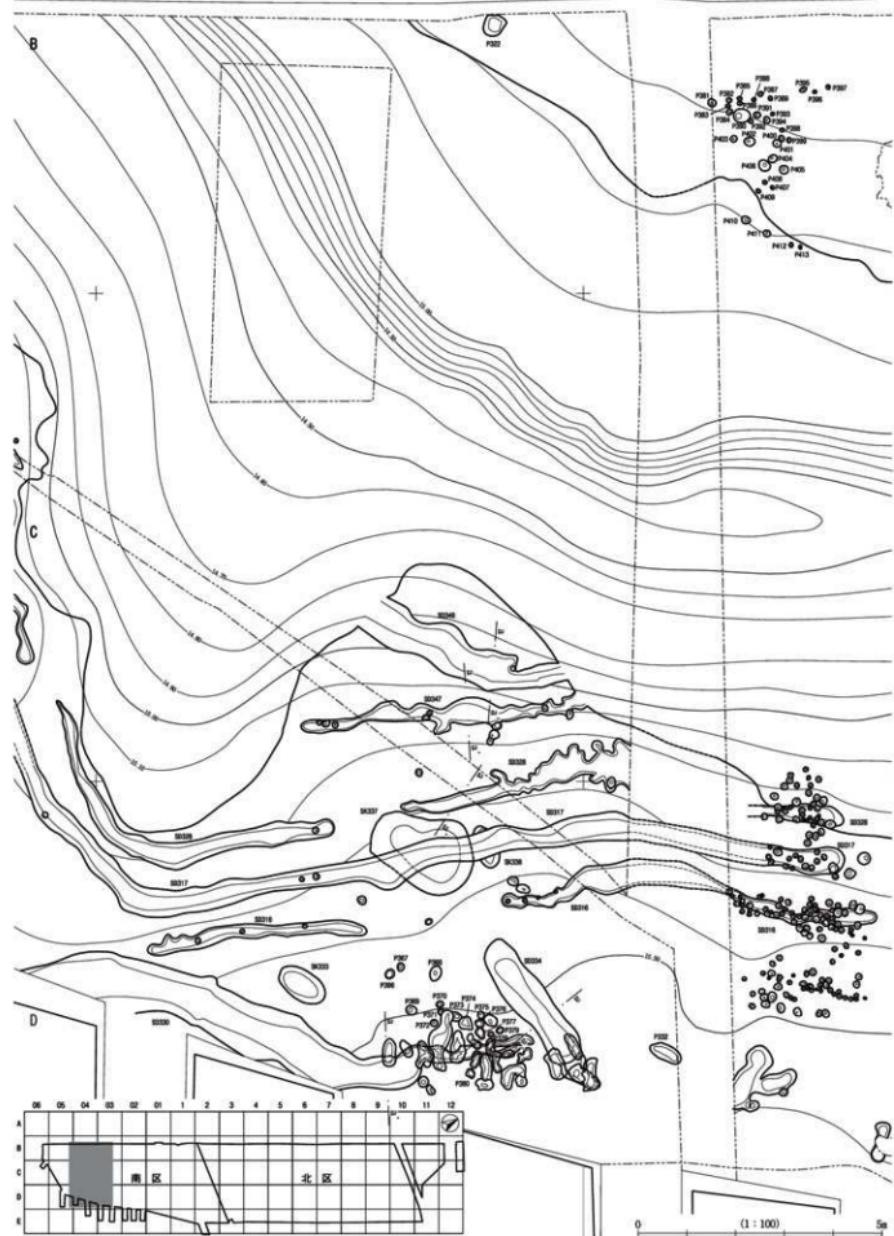
D



(1 : 100)

50





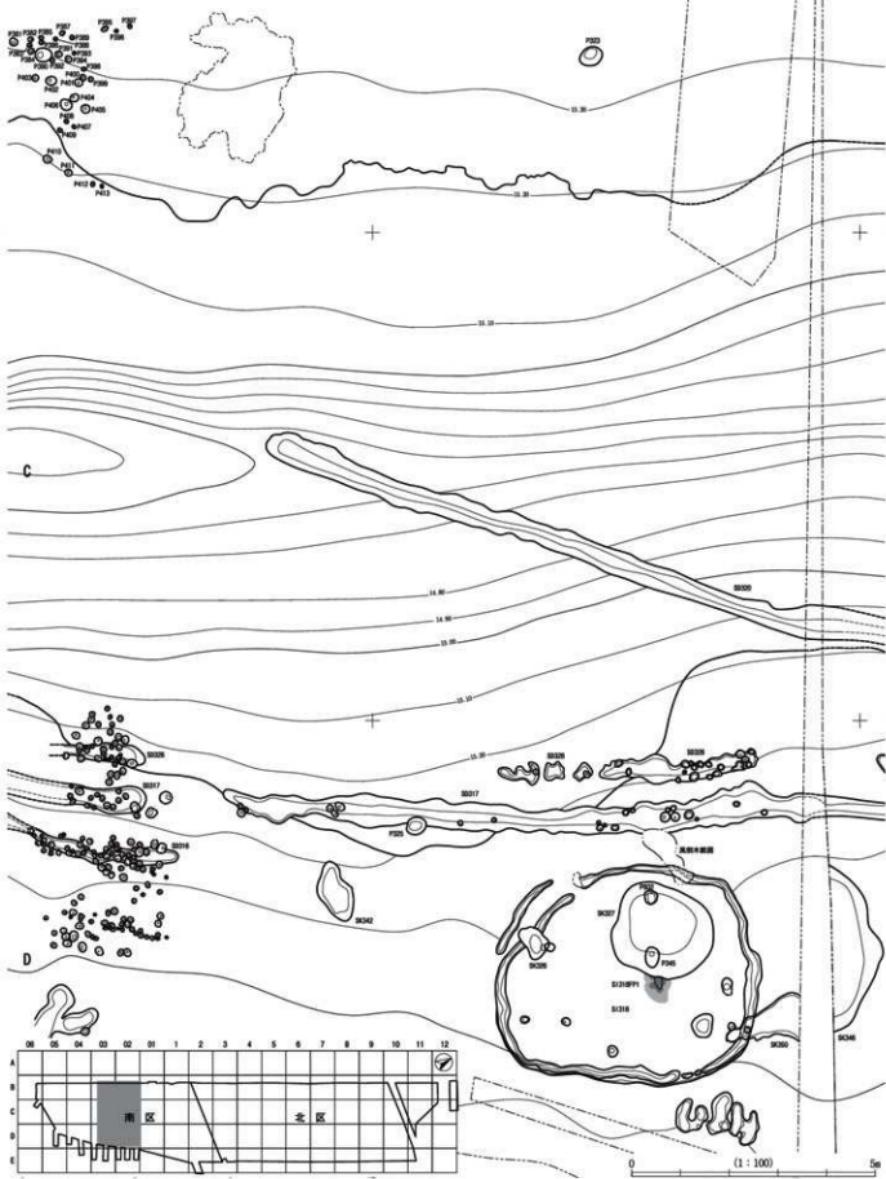


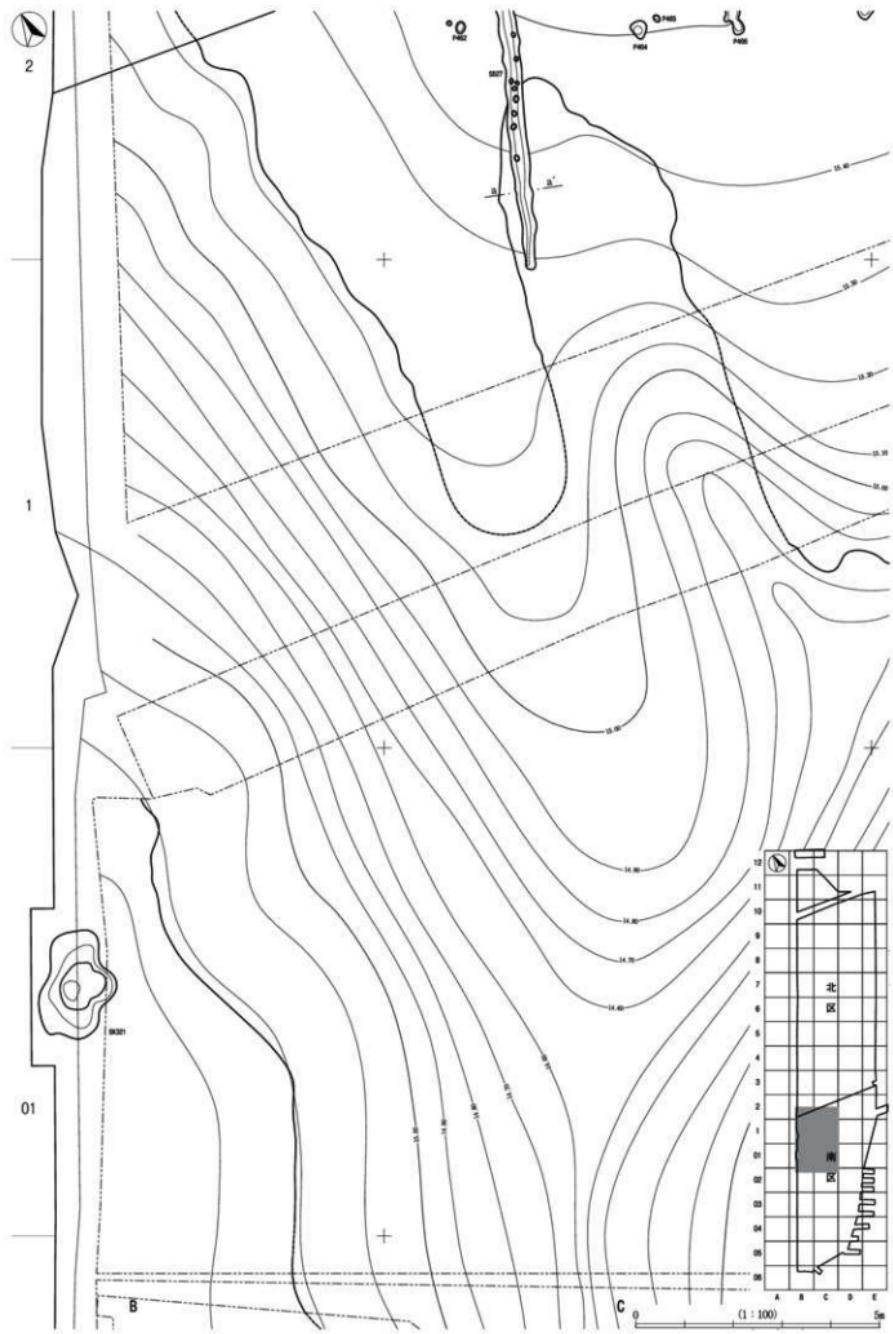
03

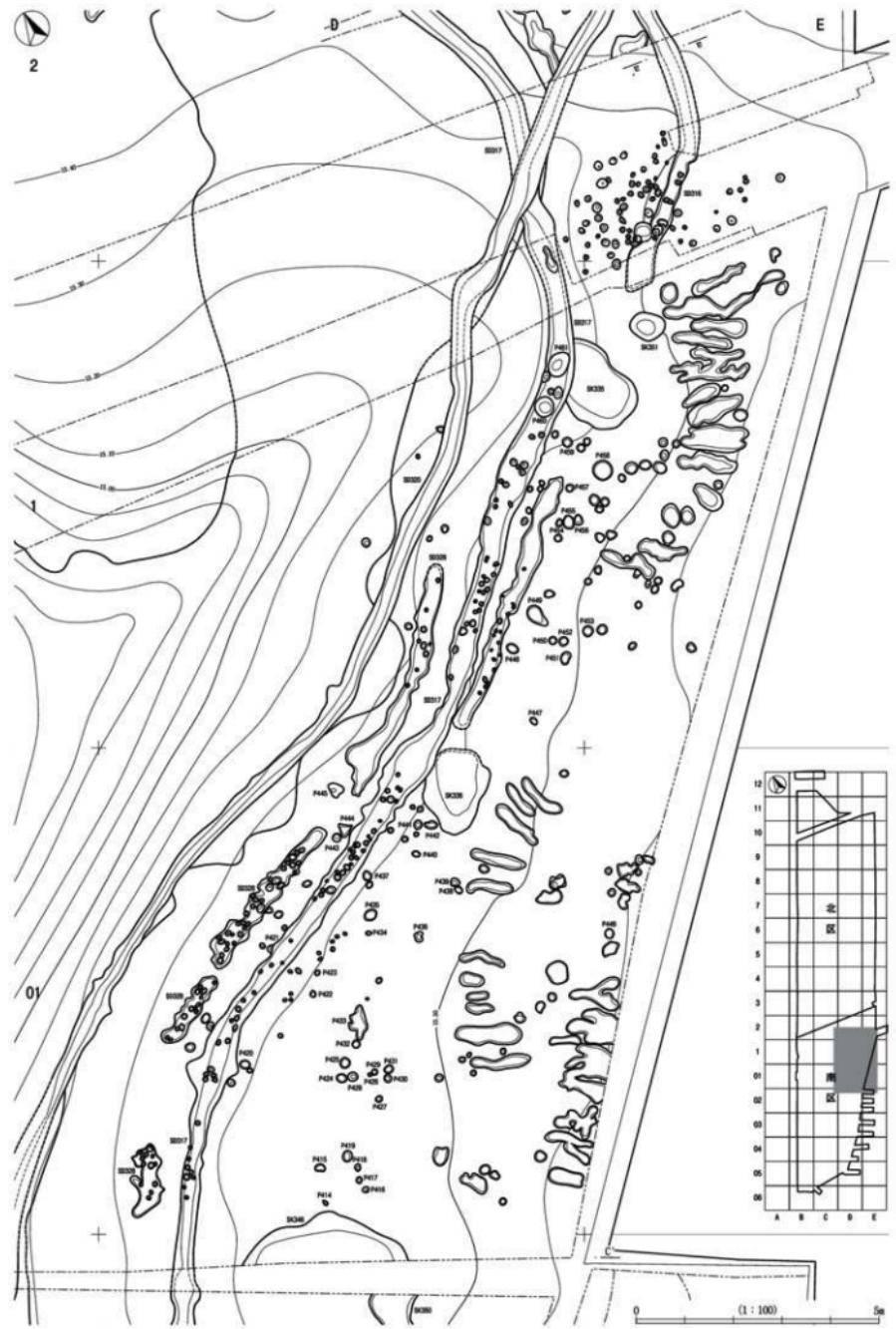
02

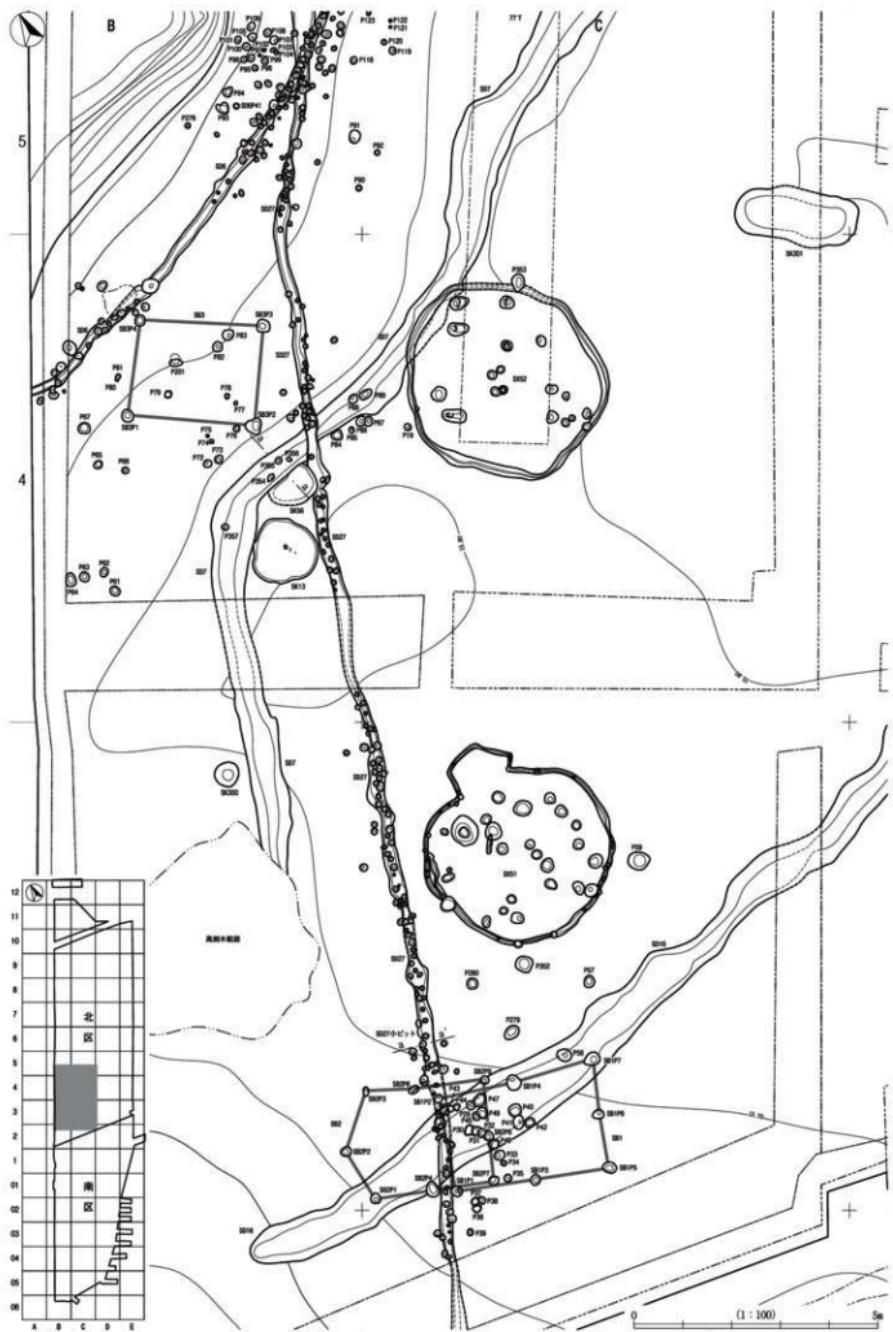
C

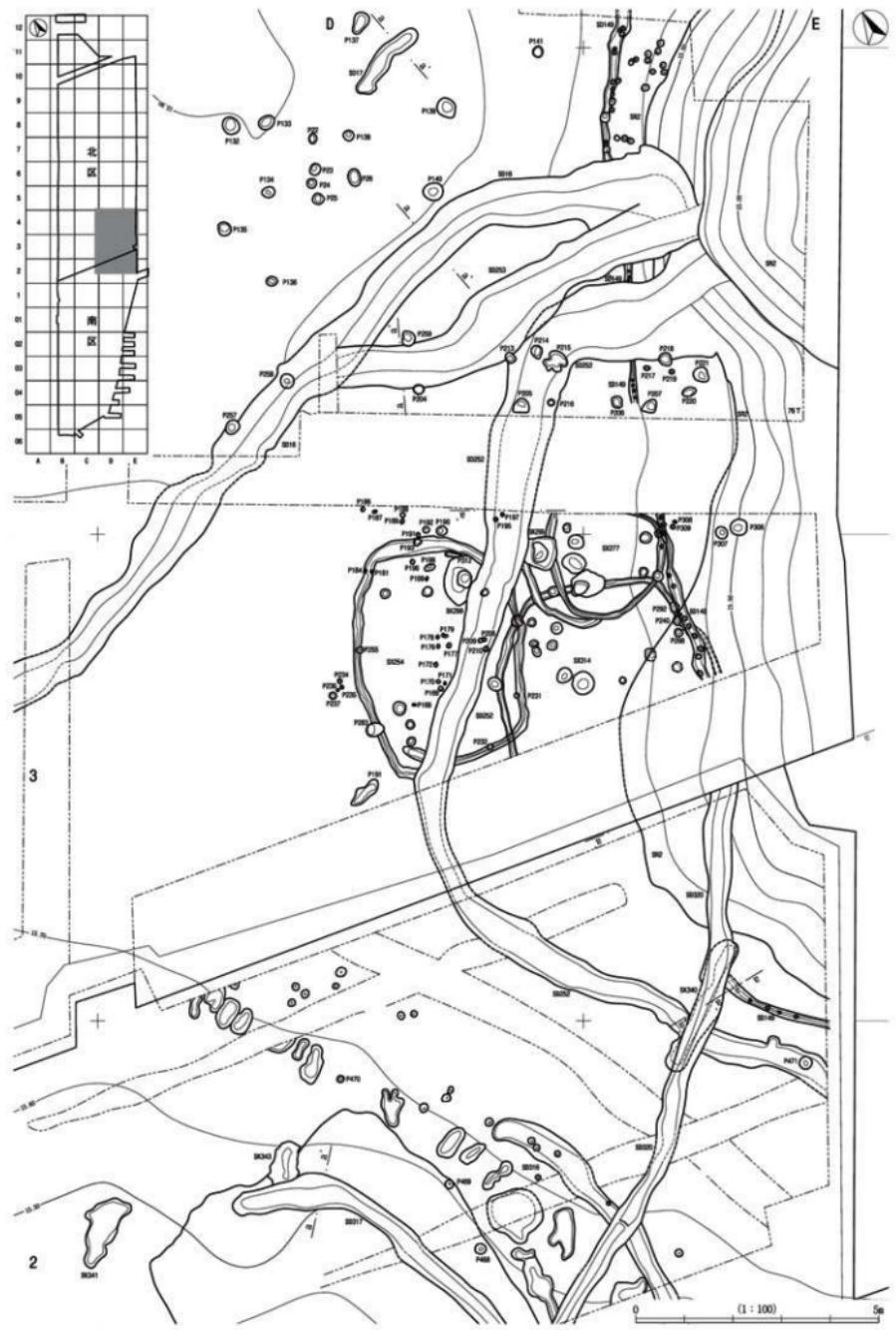
B

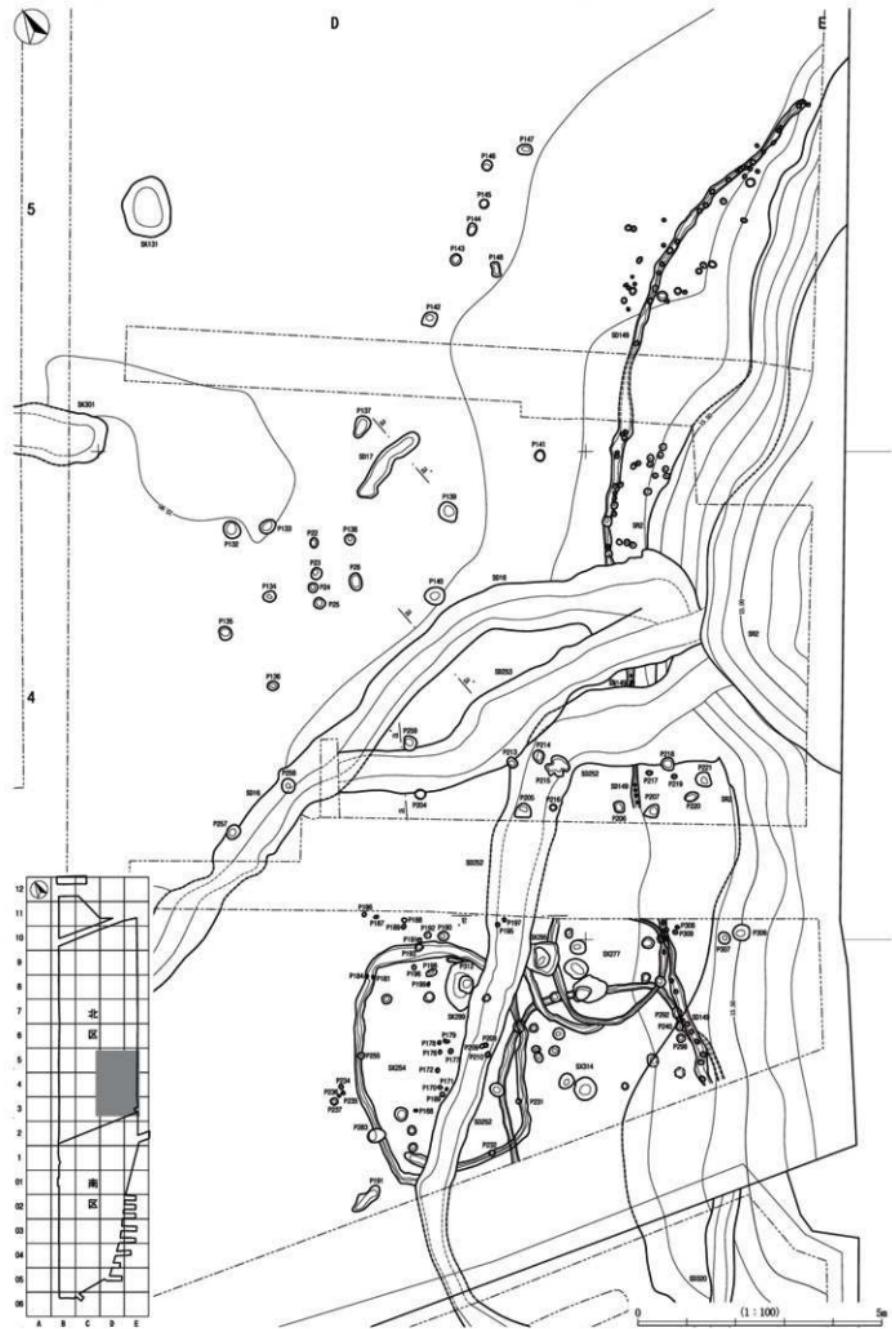


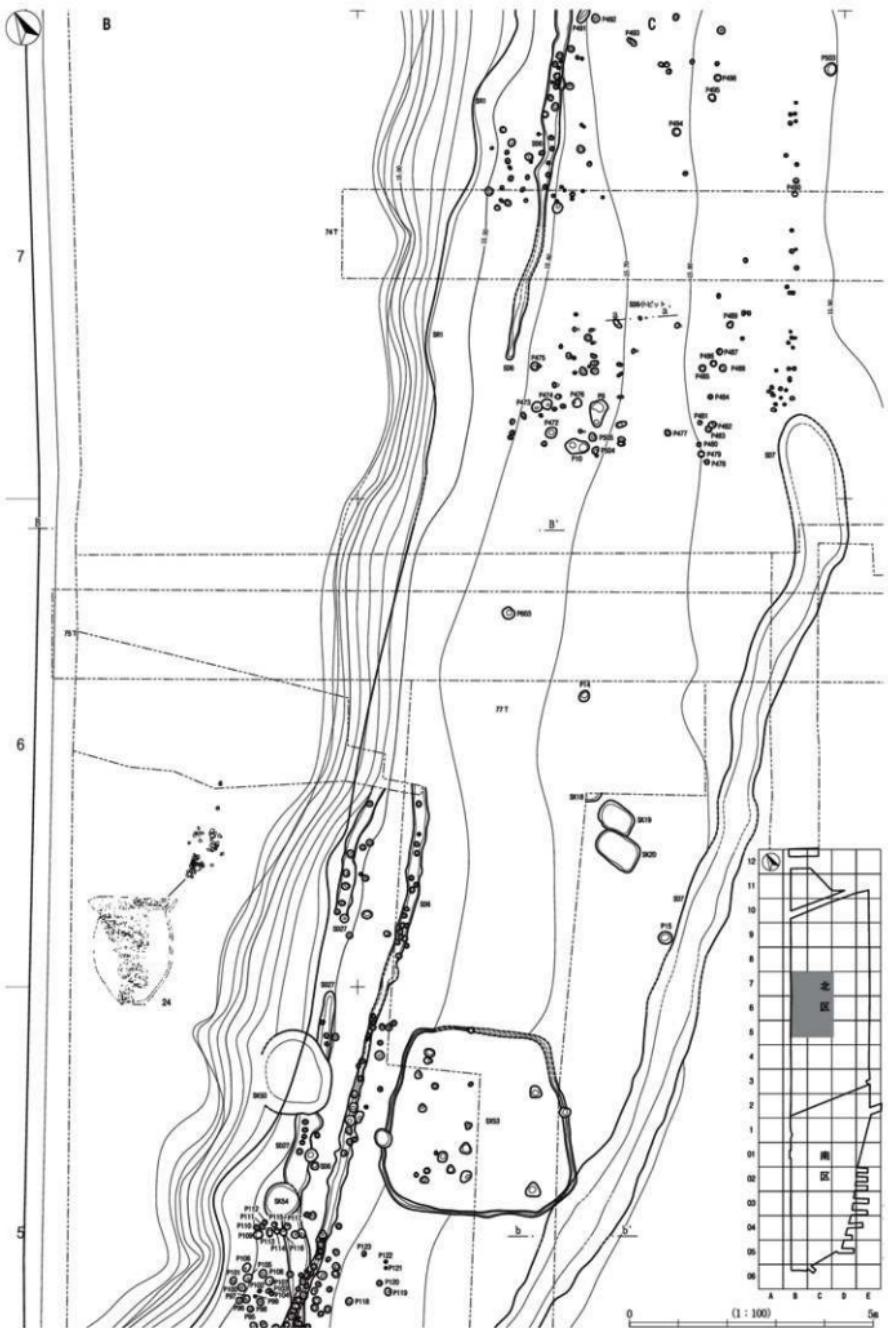








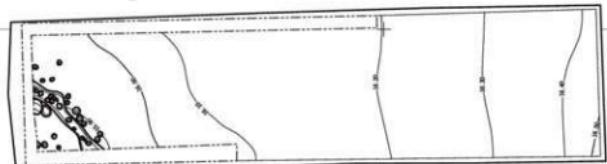




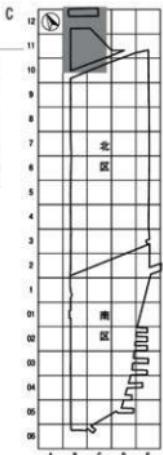




B



12

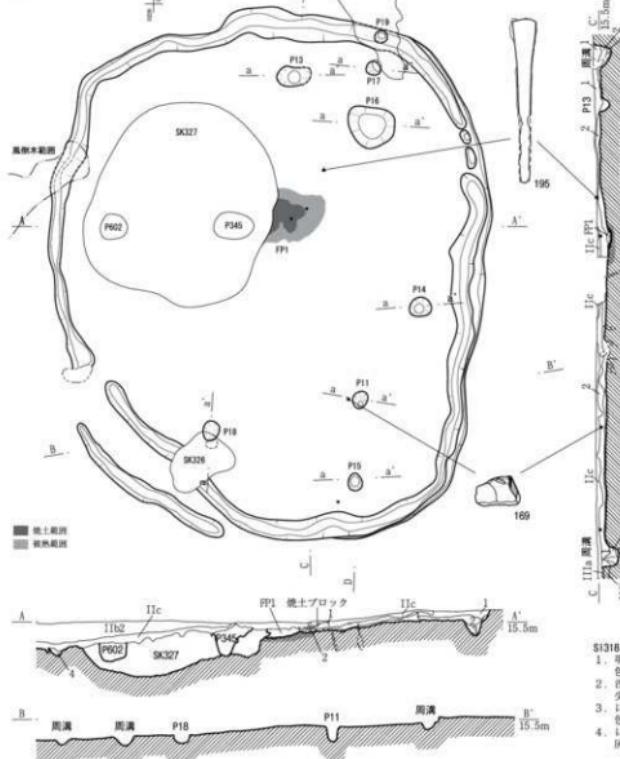


11



10

SI318



SI318

- 明黄色細砂 (10YR7/6) しまりや弱く、粘性弱い。白色砂・青灰色細砂を少量、炭化物を微量含む。
- 浅黄色砂 (5Y7/3) しまりやや弱く、粘性弱い。白色砂を少々含む。青灰色細砂を微量含む。
- にじみ黄色砂 (2.5Y7/2) しまりやや弱く、粘性弱い。白色砂・青灰色細砂を微量含む。周辺土質。
- にじみ黄色粘質土 (2.5Y6/4) しまり弱く、粘性強い。青灰色土・黄色土を微量含む。周辺土質。

P11

- 浅黄色細砂 (2.5Y7/4) しまり普通、粘性やや強い。青灰色粘質土ブロック・青灰色細砂を微量含む。
- 浅黄色砂 (2.5Y7/3) しまり・粘性弱い。青灰色粘質土ブロックを少量含む。

P13 - 17

- 浅黄色細砂 (2.5Y7/4) しまり普通、粘性やや強い。青灰色粘質土ブロックを少量含む。

P14

- 灰紫色細砂 (2.5Y7/2) しまり強く、粘性やや強い。青灰色粘質土ブロックを微量含む。

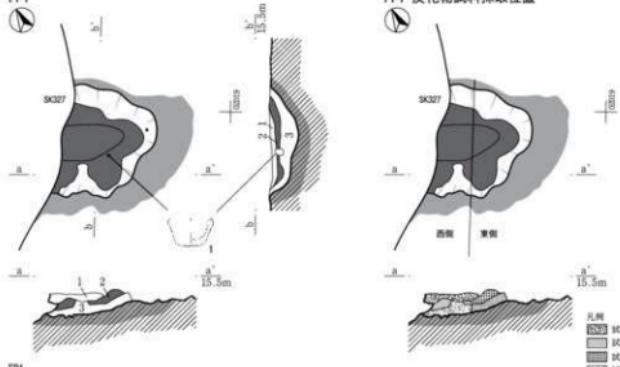
P15

- オリーブ細砂 (2.5Y4/3) しまりやや弱く、砂を中量、黄褐色粘質土ブロックを少量含む。酸化鉄の沈着が多い。

P16

- オリーブ細砂 (2.5Y4/3) しまり普通、粘性やや強い。青褐色粘質土ブロック・青灰色細砂を中量含む。

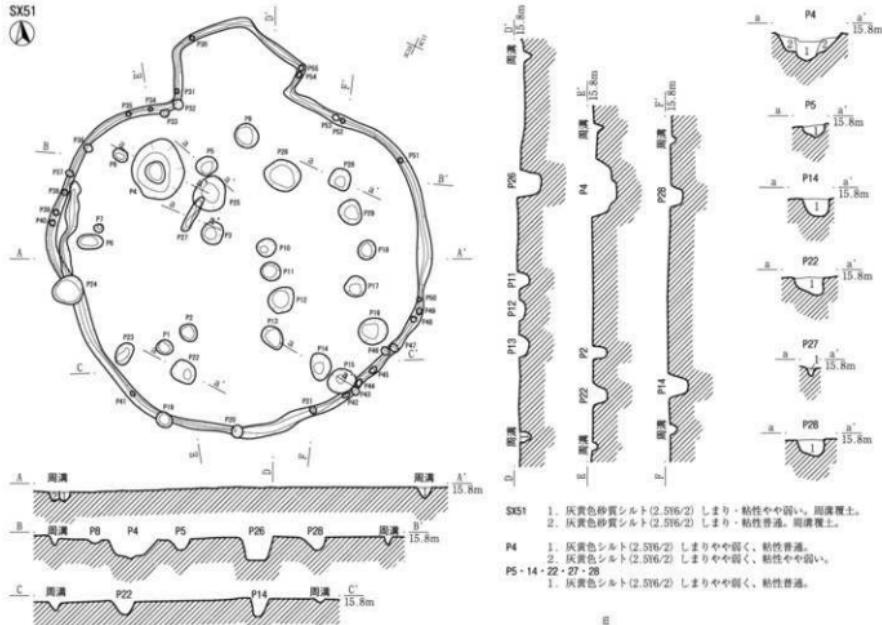
FP1



FP1

- 青灰色細砂 (5Y6/1) しまり強く、粘性普通。灰化物を中量、焼土ブロックを少量含む。
- 灰赤色土 (2.5Y5/2) しまり普通、粘性やや強い。焼土ブロックを多量含む。
- 灰白色粘土 (5Y7/1) しまり・粘性強い。

SX51



SX51 1. 広葉色鉱質シルト (2.5N6/2) しまり・粘性や弱く、周溝覆土。

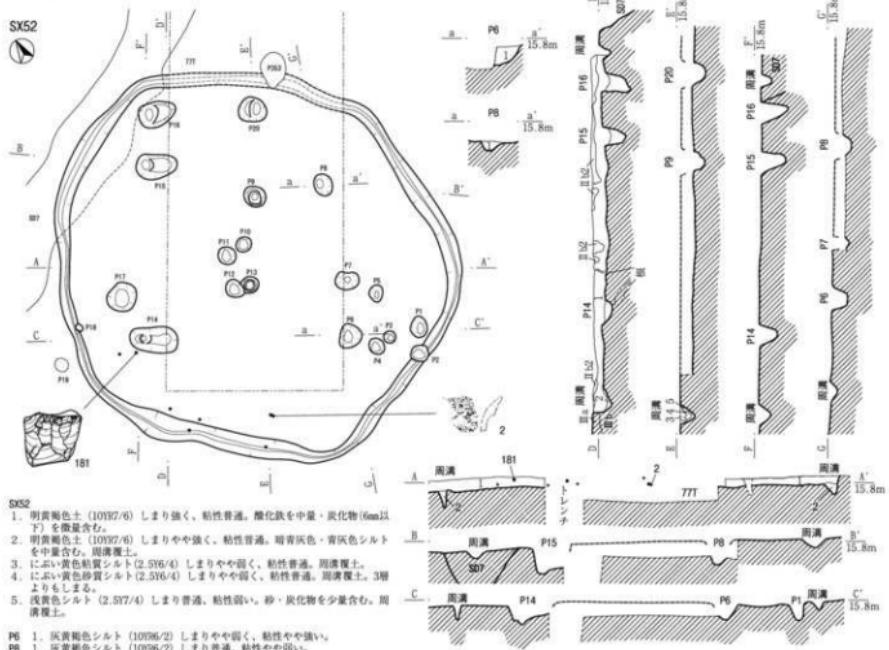
2. 広葉色鉱質シルト (2.5N6/2) しまりやや弱く、粘性普通。周溝土。

P4 1. 広葉色シルト (2.5N6/2) しまりやや弱く、粘性普通。

2. 広葉色シルト (2.5N6/2) しまりやや弱く、粘性や弱い。

P5 - 14 - 22 - 27 - 28 1. 広葉色シルト (2.5N6/2) しまりやや弱く、粘性普通。

SX52

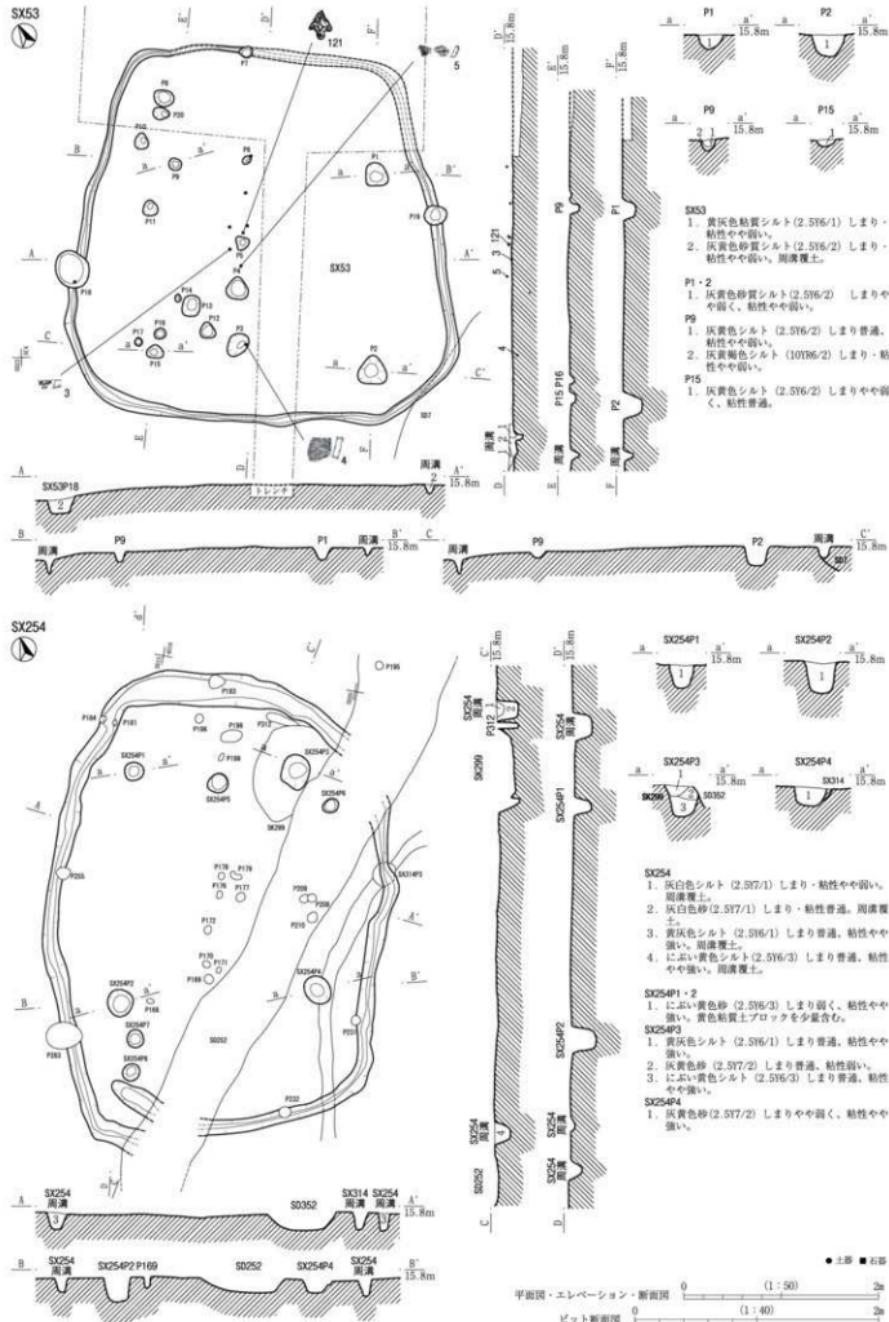


SX52

1. 明黄褐色土 (10YR7/6) しまり強く、粘性普通。酸化鉄を中量、炭化物 (6mm以下) を微量含む。
2. 黄褐色土 (10YR7/6) しまりやや強く、粘性普通。稍青灰色、青灰色シルトを中量含む。周溝覆土。
3. にふく葉色鉱質シルト (2.5N6/4) しまりやや弱く、粘性普通。周溝覆土。
4. にふく葉色鉱質シルト (2.5N6/4) しまりやや弱く、粘性普通。周溝覆土。3層よりなる。
5. 浅黄色ルート (2.5Y7/4) しまり普通、粘性弱い。砂、炭化物を少量含む。周溝土。

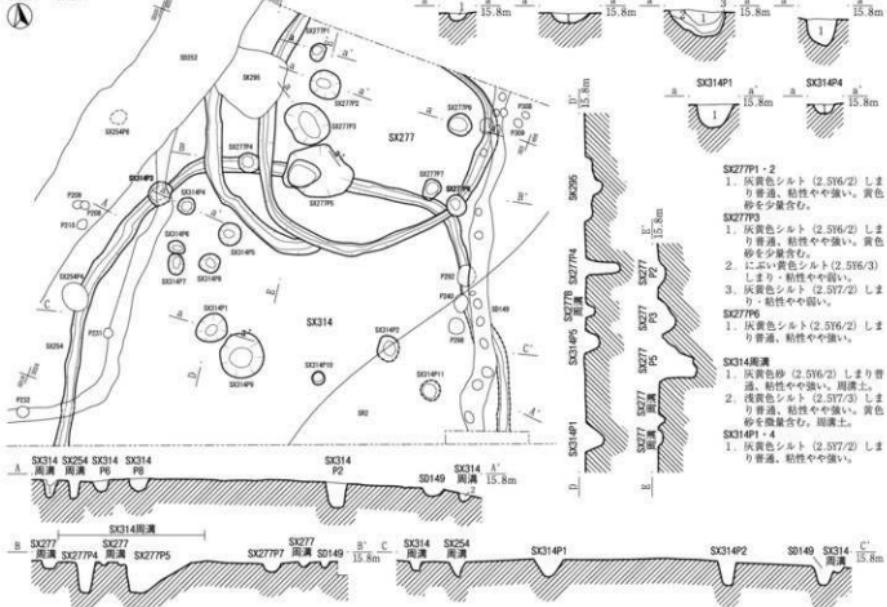
- P6 1. 広葉色シルト (10YR6/2) しまりやや弱く、粘性やや強い。  
P8 1. 広葉色シルト (10YR6/2) しまり普通、粘性やや弱い。

● 土層 ■ 石器 平面図・エレベーション・断面図 0 (1:50) 2m ピット断面図 0 (1:40) 2m

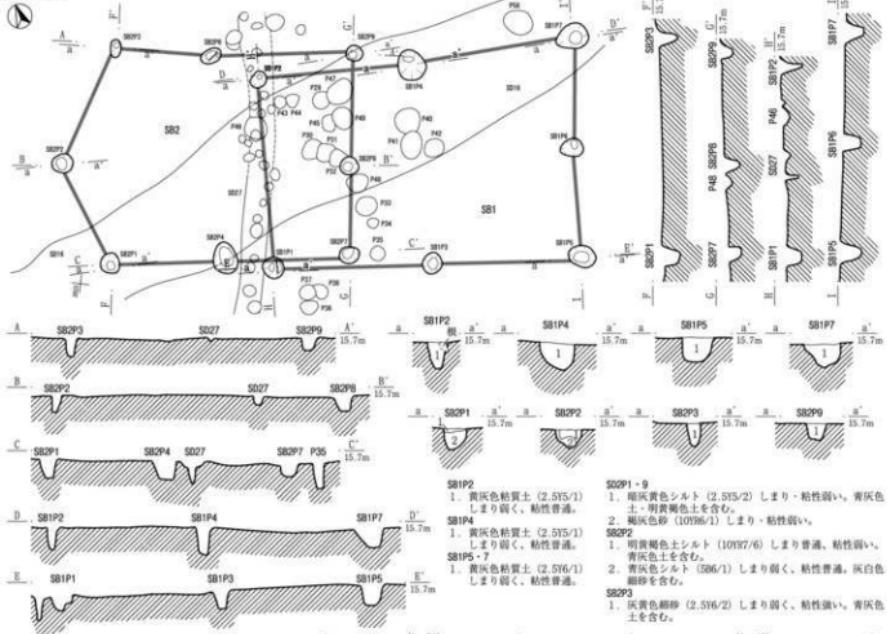


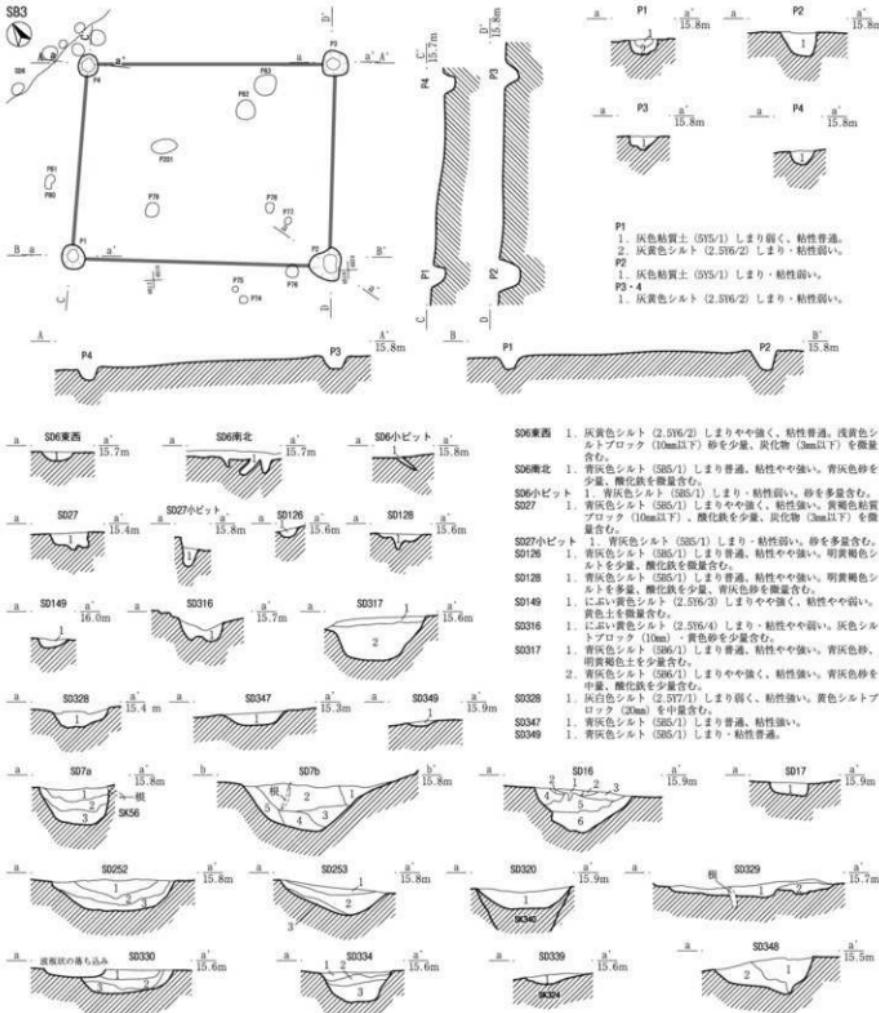
造構個別図 (4) SX277・314、SB1・2

SX277・SX314



SB1・SB2



**SD7**

1. にふる黄褐色シルト (10Y9E/4) しまり、粘性普通。白色細鉄を微量含む。
2. 灰色粘シルト (10Y9E/2) しまり、粘性やや弱い。明黄色褐色シルト (20~30mm) を少量含む。
3. 灰色粘シルト (10Y9E/2) しまり、粘性やや弱い。
4. にふる黄褐色シルト (10Y9E/2) しまり、粘性普通。酸化鉄を微量含む。
5. 灰色粘褐色シルト (10Y9E/2) しまり普通、粘性やや強い。酸化鉄を中量含む。
6. 灰色粘褐色シルト (10Y9E/2) しまり普通、粘性やや強い。

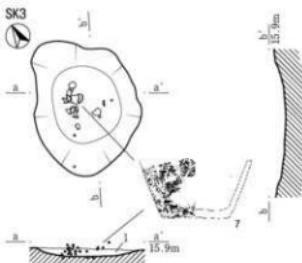
**SD17**

1. 淡黄色シルト (5Y7/3) しまり、粘性やや弱い。
2. 淡黄色シルト (2.5Y7/4) しまり、粘性やや弱い。
3. 淡黄色シルト (2.5Y7/4) しまり、粘性やや弱い。
4. 黄色シルト (2.5Y6/1) しまり弱く、粘性やや弱い。
5. 黄色シルト (2.5Y6/1) しまり弱く、粘性やや弱い。白色鉄を少量含む。
6. 黄色シルト (2.5Y6/1) しまりやや強く、粘性弱い。黄色土ブロック (10mm) を少量含む。
7. 黄色シルト (2.5Y7/1) しまりやや弱く、粘性普通。灰色シルトブロック (20mm) を微量含む。
8. 黄色シルト (2.5Y7/1) しまりやや弱く、粘性普通。灰色シルトブロック (20mm) を微量含む。
9. 黄色シルト (2.5Y6/2) しまり、粘性普通。黄色鉄を少量含む。
10. 黄色シルト (2.5Y7/2) しまりやや弱く、粘性普通。白色鉄を微量含む。
11. 黄色シルト (2.5Y7/2) しまりやや弱く、粘性普通。白色鉄を微量含む。
12. 黄色シルト (2.5Y7/2) しまりやや弱く、粘性普通。根鉄を微量含む。

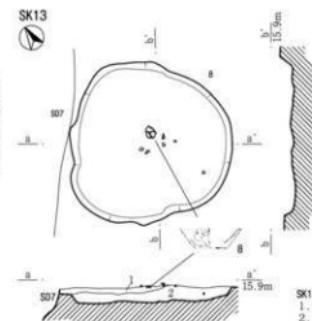
**SD330**

1. 青灰色シルト (5B5/1) しまり強く、粘性普通。炭化物 (20mm) を微量含む。
2. 青灰色シルト (2.5Y6/1) しまり、粘性普通。青灰色を中量含む。
3. 青灰色シルト (2.5Y6/2) しまり、粘性普通。青灰色を中量含む。
4. 青灰色シルト (2.5Y6/1) しまり、粘性普通。青色シルトブロック (20mm) を微量含む。
5. 青灰色シルト (2.5Y6/2) しまりやや弱く、粘性普通。青色シルトブロック (20mm) を微量含む。
6. 青灰色シルト (2.5Y6/2) しまりやや弱く、粘性普通。青色シルトブロック (20mm) を微量含む。
7. 青灰色シルト (2.5Y6/2) しまりやや弱く、粘性普通。青色シルトブロック (20mm) を微量含む。
8. 青灰色シルト (2.5Y6/2) しまりやや弱く、粘性普通。青色シルトブロック (20mm) を微量含む。

造構個別図 (6) SK3・13・18・19・20・50・54・56・131・256



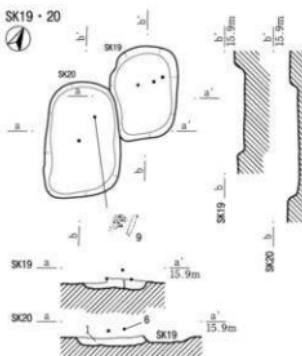
1. 青灰色シルト (2.517/2) しまり強く、粘性普通。白色細土ブロックを少量含む。無化鉄の沈着が目立つ。



1. 底黄色シルト (2.517/2) しまり。粘性やや強い。明黄褐色土を少量、無化鉄を少量含む。

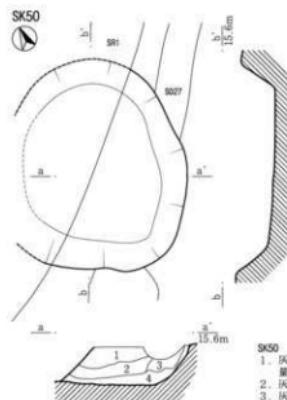
SK13

1. 青灰色シルト (10706/6) しまり普通、粘性弱い。
2. 黄灰色質シルト (2.515/1) しまり・粘性弱い。

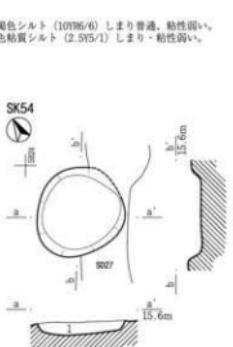


SK19  
1. 底黄色シルト (2.517/2) しまり、粘性やや強い。明黄褐色土を少量、無化鉄を少量含む。

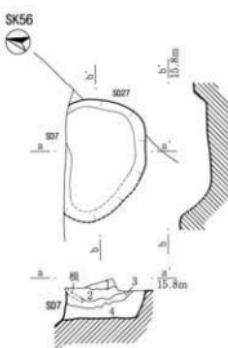
SK20  
1. 底黄色シルト (2.517/2) しまり、粘性やや強い。明黄褐色土を少量、無化鉄を少量含む。



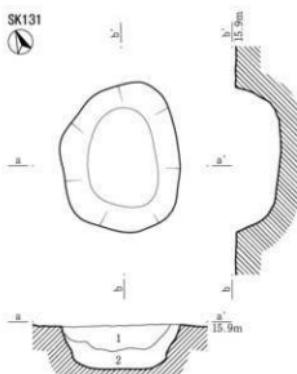
SK50  
1. 灰色砂 (516/1) しまり、粘性弱い。明黄褐色土ブロック (10mm) を微量含む。



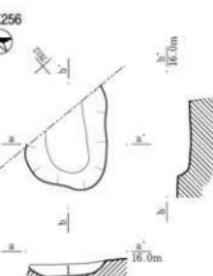
SK54  
1. 灰色砂 (516/1) しまり、粘性弱い。明黄褐色土ブロック (10mm) を微量含む。



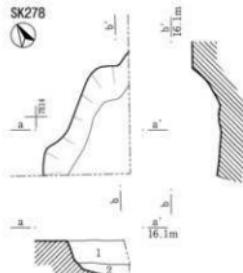
1. 青灰色シルト (5196/1) しまり、粘性普通。  
2. 底黃褐色粘質土 (10706/2) しまり・粘性普通。  
3. 底黃褐色砂質土 (10706/2) しまり・粘性弱い。  
4. 底黃褐色砂質土 (10706/2) しまり・粘性弱い。  
3層よりもややしまる。



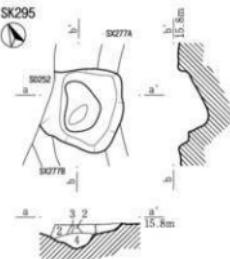
1. 青灰色シルト (10706/1) しまり強く、粘性やや弱い。青灰  
色粘土ブロック (2~5mm) を少量。底文状に含む。  
2. 青灰色質土 (10825/1) しまり・粘性強い。底黄色シルト  
を多量。炭化物 (~2mm) を少量含む。



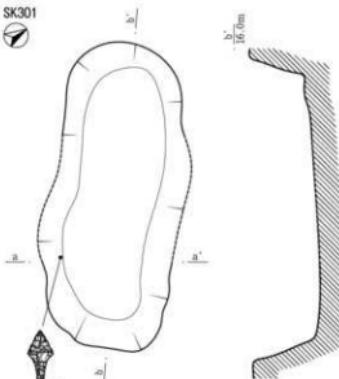
SK256  
1. 青灰色シルト (386/1) しまり強く、粘性や  
やや弱い。底黄色粘土ブロック (1~3mm) 、無  
化鉄を少量含む。



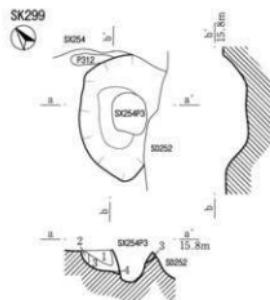
- 明青灰色シルト (5B7/1) しまり強く、粘性弱い。青灰色シルトブロック (3~5mm) を多量、酸化鉄を中量含む。
- 灰オリーブ色シルト (5Y6/2) しまり強く、粘性弱い。難化鉄を多量含む。



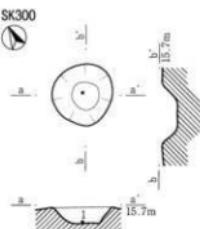
- 明青灰色シルト (10B7/3) しまり普通、粘性やや弱い。灰シルトを少量含む。
- 灰青褐色シルト (10Y6/2) しまり普通、粘性やや強い。
- 灰青褐色シルト (2.5Y7/2) しまり普通、粘性弱い。
- 灰青褐色シルト (2.5Y7/2) しまり普通、やや強い。



- 灰青色粘質シルト (2.5Y6/2) しまり弱く、粘性やや強い。
- 灰青色粘質シルト (2.5Y6/2) しまり弱く、粘性やや強い。砂を多量含む。
- 灰青色シルト (2.5Y6/2) しまり弱く、粘性普通。砂を中量含む。
- 灰青色シルト (2.5Y6/2) しまり・粘性弱い。砂を中量含む。
- 灰青色砂 (2.5Y6/2) しまり・粘性弱い。
- 灰青色砂 (2.5Y6/2) しまり・粘性弱い。5層よりもやや厚い。

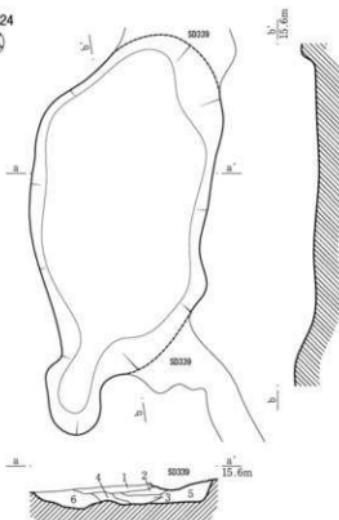


- 灰青色砂 (2.5Y6/2) しまり普通、粘性やや弱い。シルトを少量含む。
- 灰青色砂 (2.5Y6/1) しまりやや弱く、粘性弱い。
- 明青灰色シルト (2.5Y6/3) しまり・粘性やや弱い。
- 灰青色砂 (2.5Y6/2) しまり普通、粘性弱い。



- 灰青色シルト (2.5Y7/2) しまりやや強く、粘性普通。明青褐色土、黄褐色砂を少量含む。

SK324

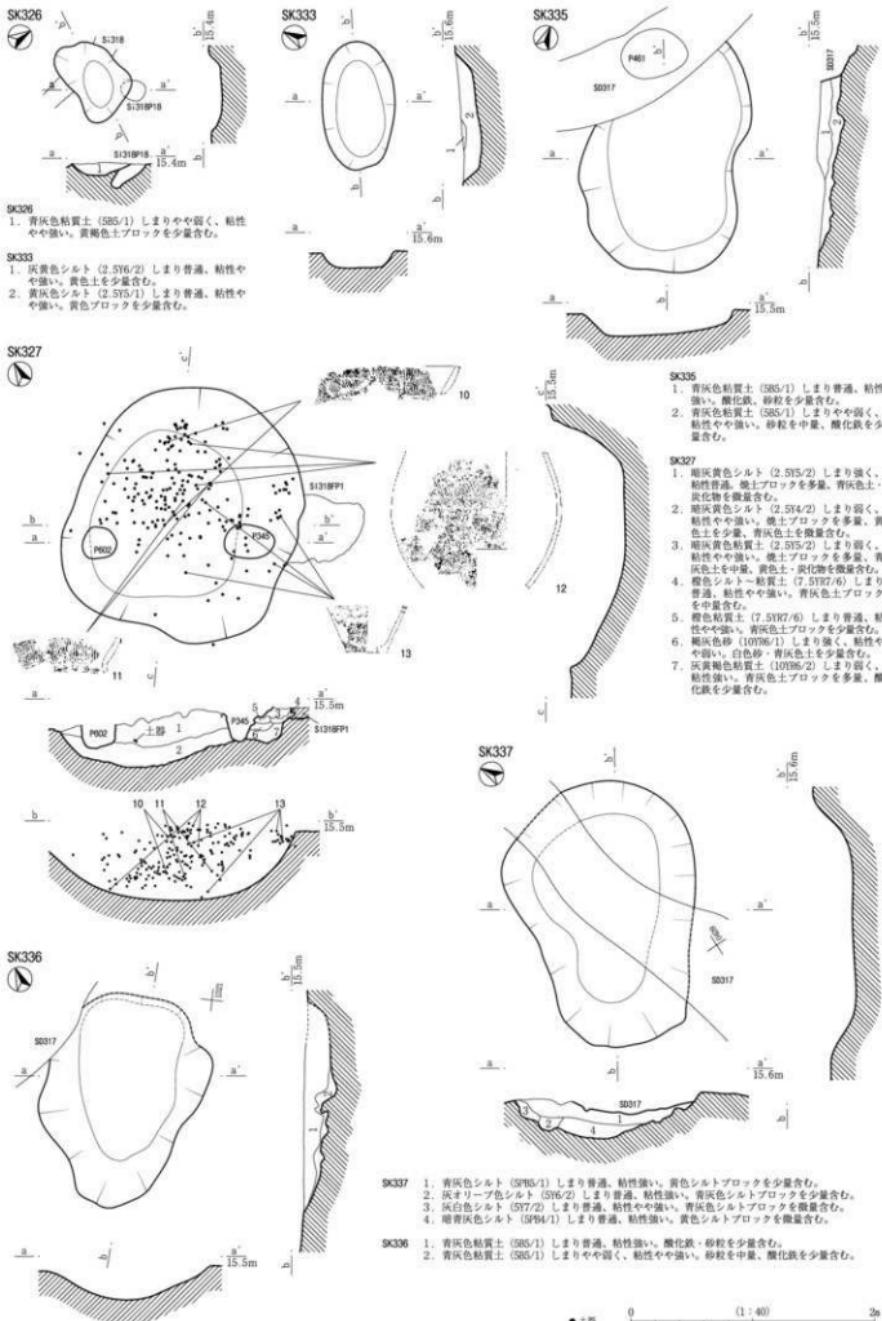


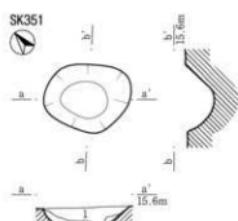
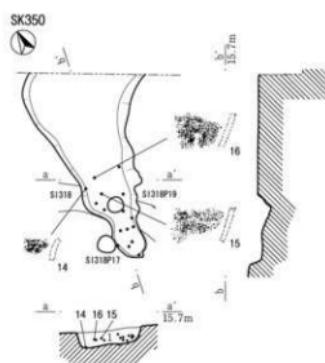
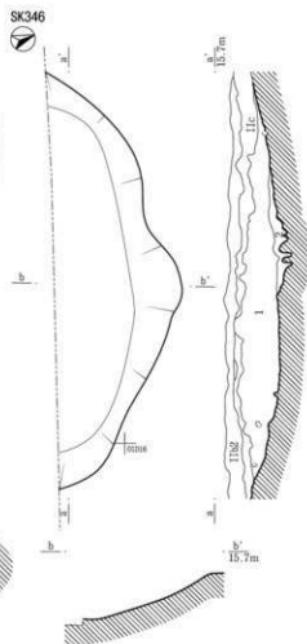
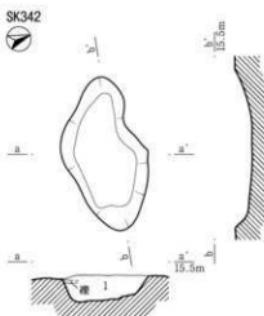
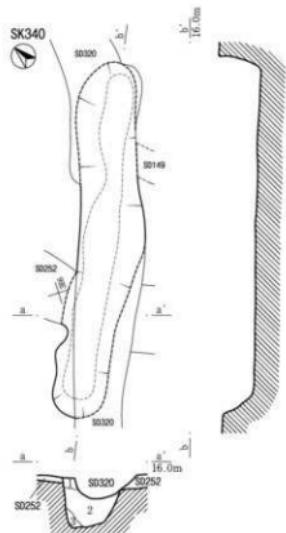
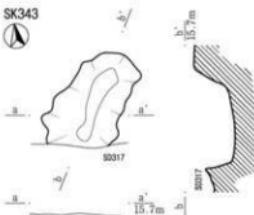
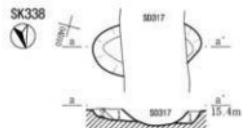
- 青灰色シルト (5B6/1) しまり普通、粘性強い。青色土を微量含む。
- 明青灰色シルト (2.5Y6/3) しまりやや強く、粘性普通。淡茶褐色砂を微量含む。
- 明灰褐色シルト (2.5Y5/2) しまりやや強く、粘性普通。
- 灰青色シルト (2.5Y6/2) しまり強く、粘性普通。
- 灰青色シルト (2.5Y7/2) しまり・粘性やや弱い。
- 明青灰色シルト (2.5Y6/3) しまり・粘性普通。淡茶褐色砂を多量含む。



- 青灰色シルト (5B5/1) しまり普通、粘性強い。難化鉄を少量、黄褐色色プロック (5mm 以下) を微量含む。
- 青灰色粘質土 (5B5/1) しまり普通、粘性強い。難化鉄、黄褐色土を微量含む。
- 青灰色粘質土 (5B5/1) しまり普通、粘性強い。難化鉄、黄褐色土を微量含む。
- 青灰色粘質土 (5B5/1) しまり普通、粘性強い。難化鉄、黄褐色土を微量含む。
- 明青灰色シルト (10B5/2) しまり普通、粘性やや弱い。難化鉄、青灰色シルトを少量、難化物 (3mm 以下) を微量含む。

造構個別図 (8) SK326・327・333・335・336・337

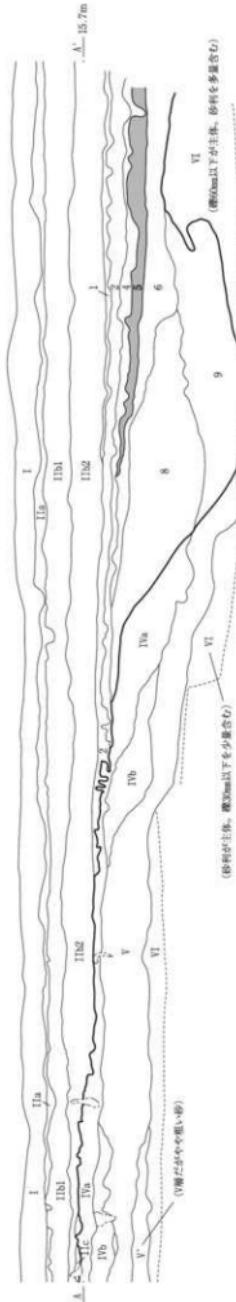




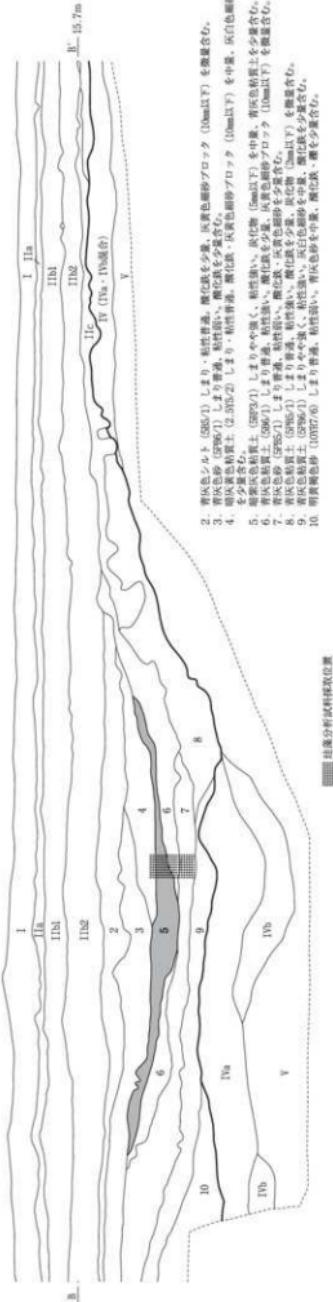
● 土面  
0 (1:40) 2m

## 遺構個別図 (10) SR1

SR1 土層断面A (98・CSE)

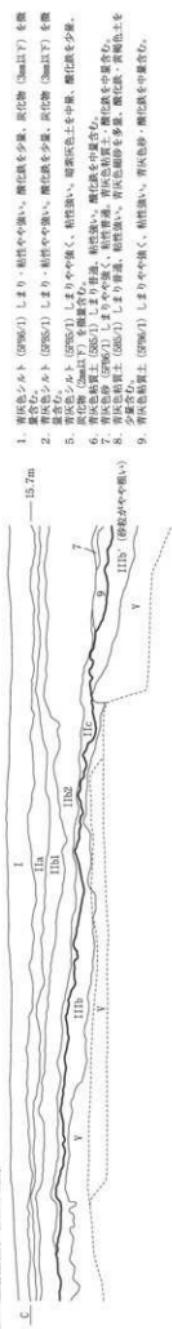


SR1 土層断面B (68・CSE)



土壤剖面位置

SR1 土壌断面 (028~E区)



(IIb層だが、粘利を多量含む。)

(VI層だが、粘利を多量含む。)

(V層だが、粘利を多量含む。)

(IV層だが、粘利を多量含む。)

(IIIc層だが、粘利を多量含む。)

(IIIb層だが、粘利を多量含む。)

(IIIa層だが、粘利を多量含む。)

(IIb層だが、粘利を多量含む。)

(IIa層だが、粘利を多量含む。)

(I層だが、粘利を多量含む。)

(IIb層だが、粘利を多量含む。)

(IIa層だが、粘利を多量含む。)

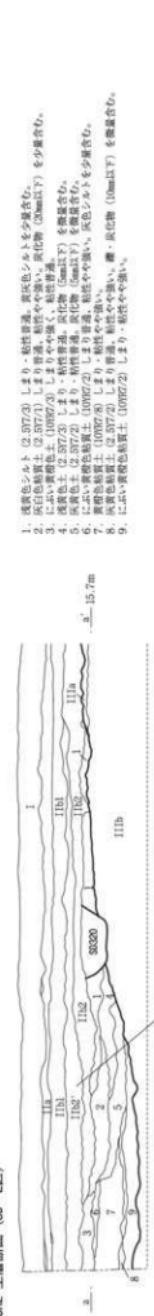
(IIb層だが、粘利を多量含む。)

1 : 80

比例

20

SR2 土壌断面 (30・E区)



(IIb層だが、粘利を多量含む。)

(IIb層だが、粘利を多量含む。)

(IIb層だが、粘利を多量含む。)

(IIb層だが、粘利を多量含む。)

(IIb層だが、粘利を多量含む。)

(IIb層だが、粘利を多量含む。)

(IIb層だが、粘利を多量含mu。)

(IIb層だが、粘利を多量含mu。)

(IIb層だが、粘利を多量含mu。)

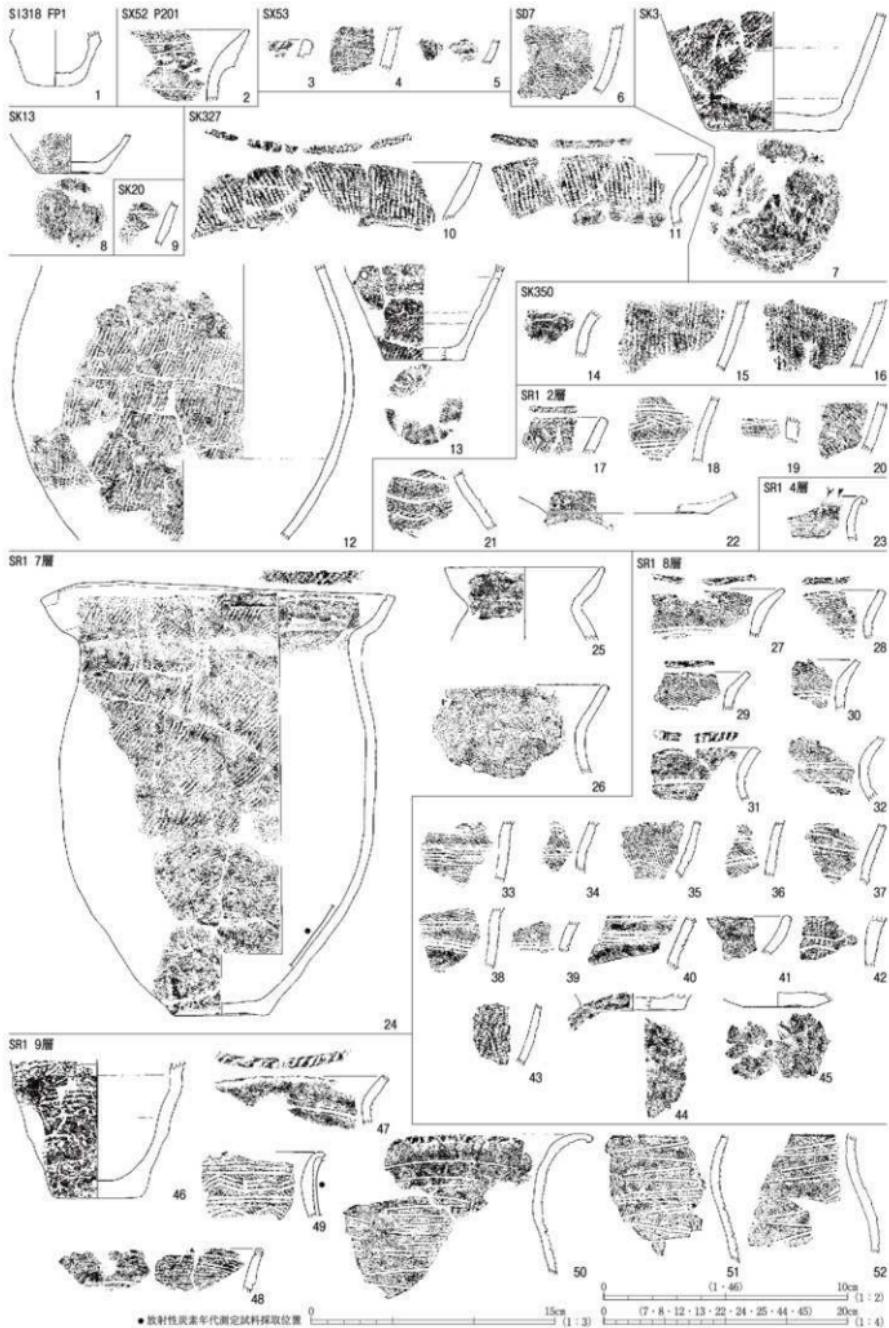
(IIb層だが、粘利を多量含mu。)

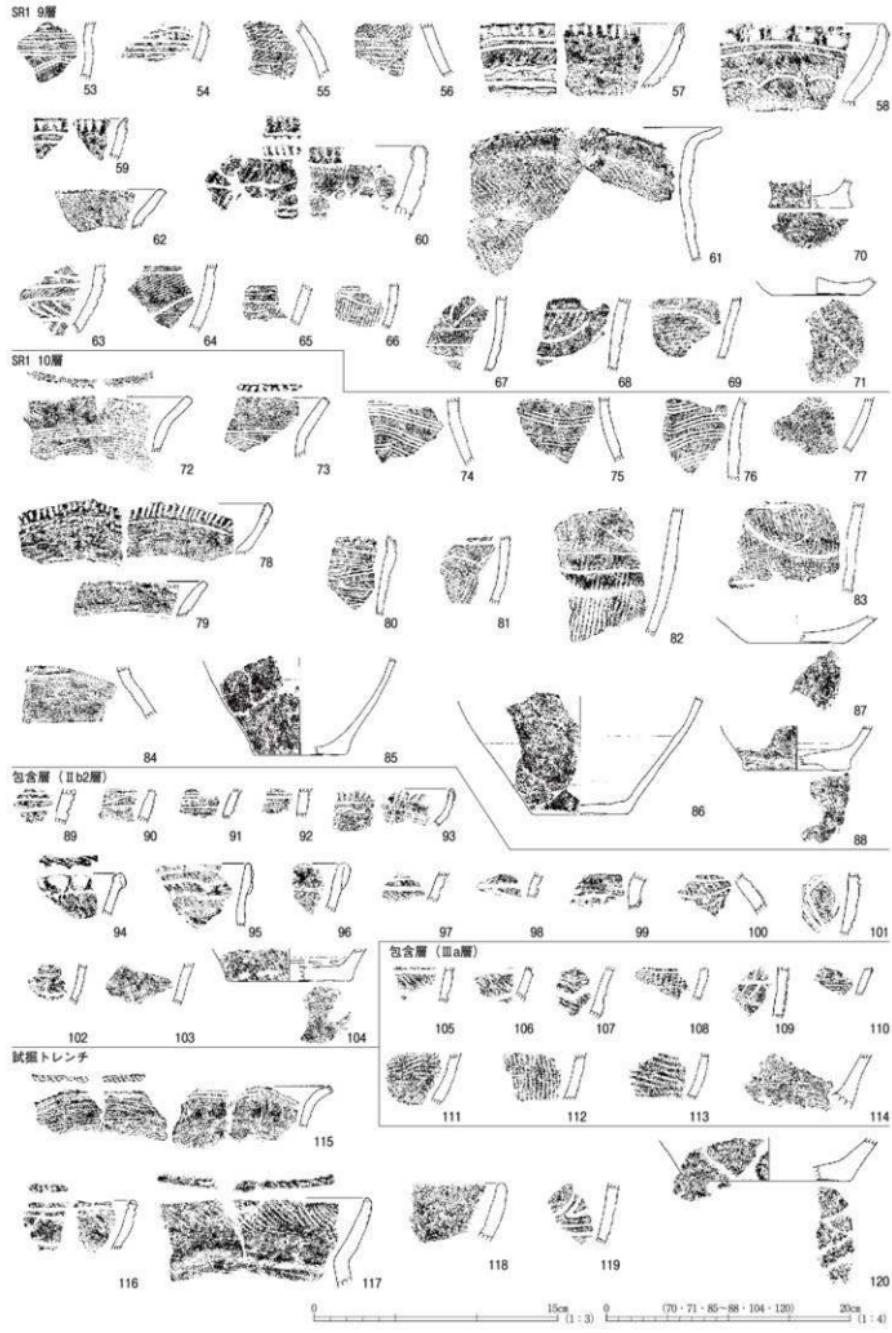
(IIb層だが、粘利を多量含mu。)

1 : 80

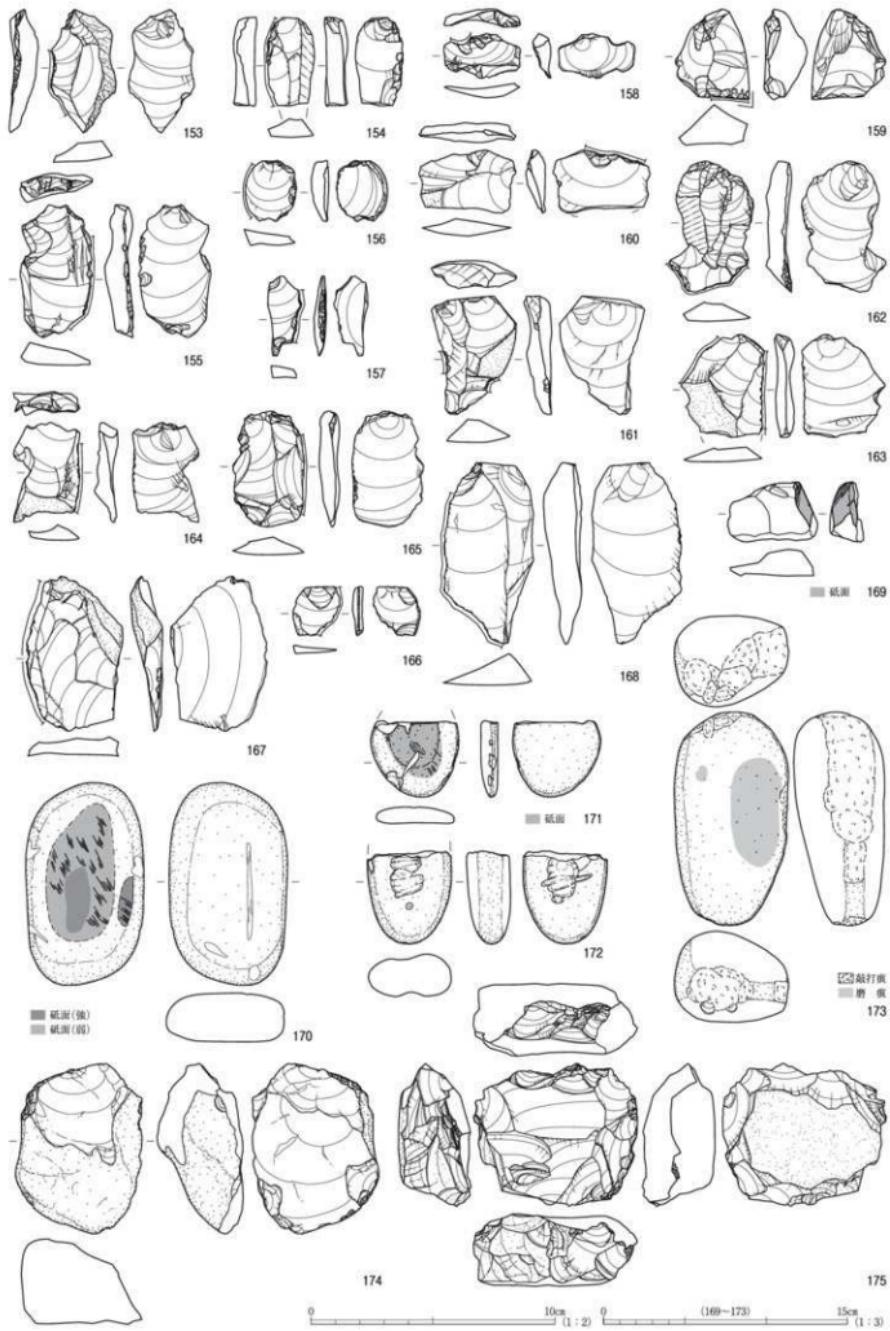
比例

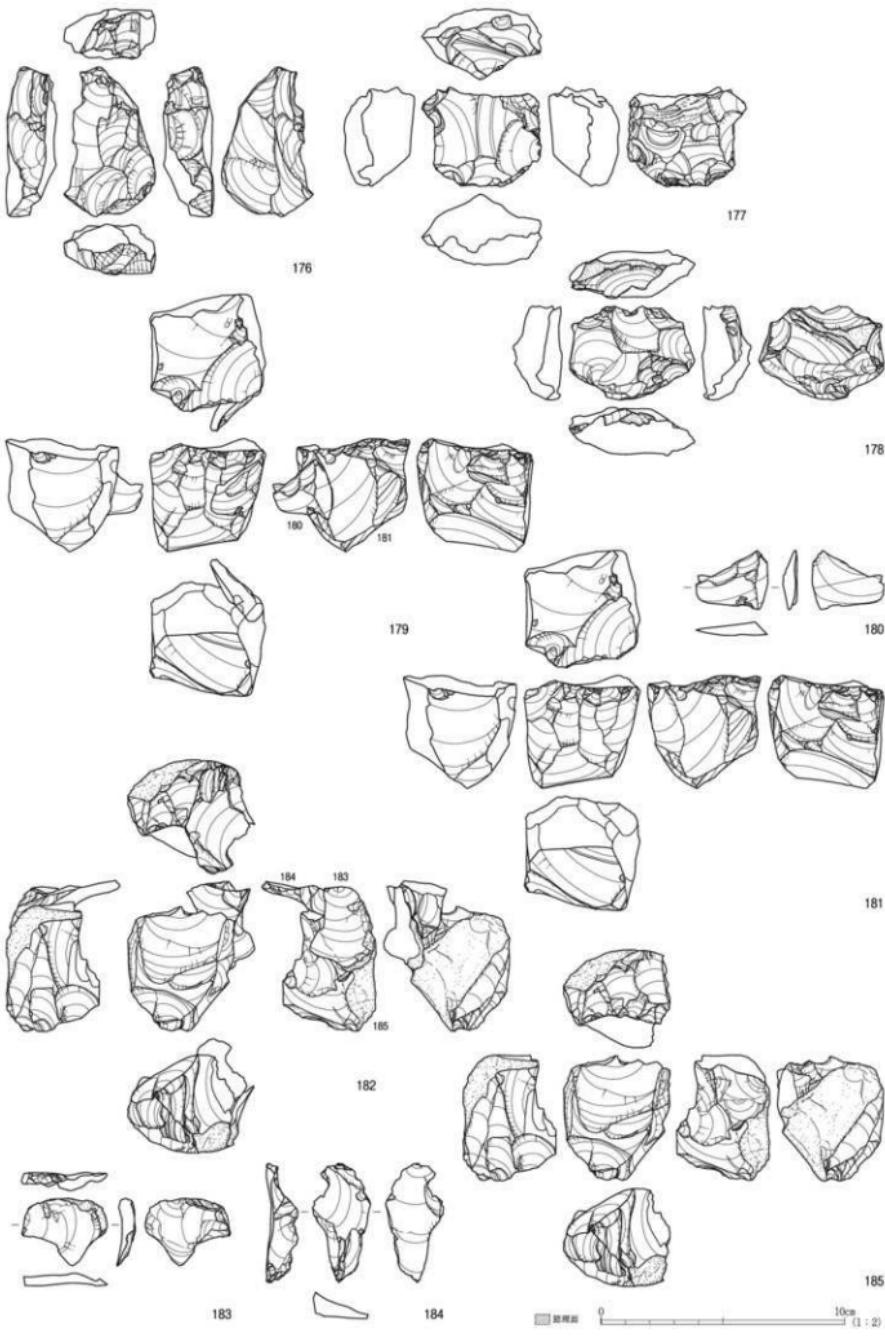
20

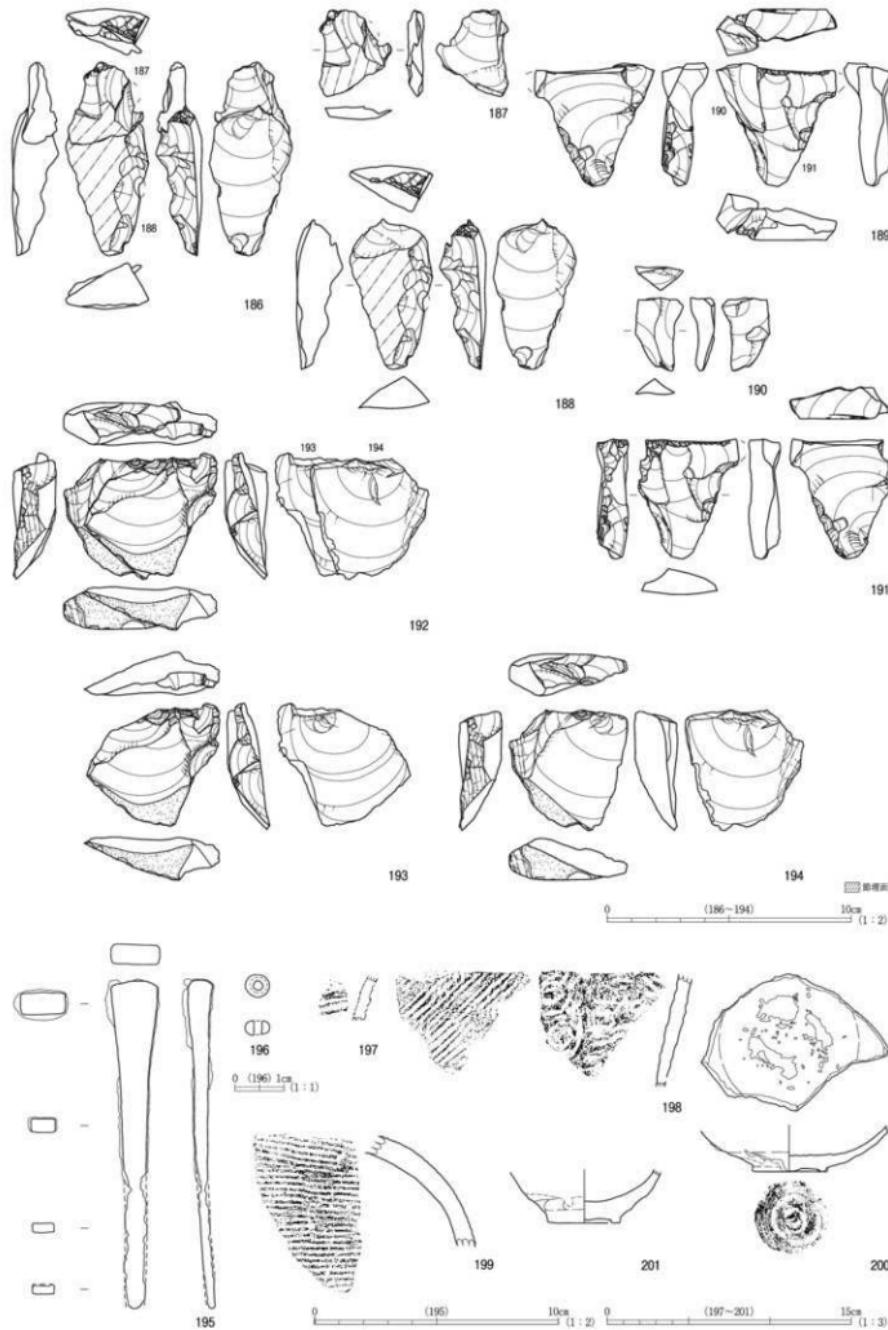










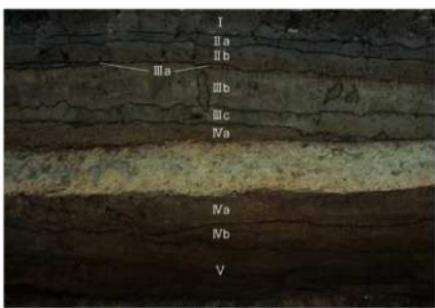




遺跡遠景（東から）



遺跡遠景（北から）





3~7区遺構集中部全景



南区全景



SI318 完掘状況 (西から)



SI318 FP1 土層断面 (南から)



SI318 FP1 土層断面・ミニチュア土器 (1) 出土状況 (東から)



SI318 金属製品 (195) 出土状況 (北西から)



SI318 P17 土層断面 (南から)



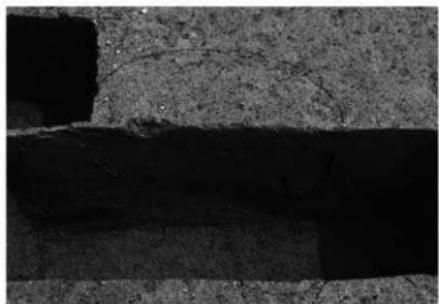
SX51 完掘状況（東から）



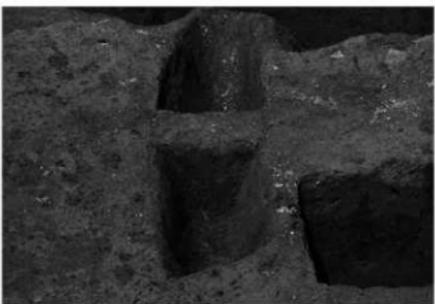
SX51 東側土層断面（南から）



SX51 P14・15 土層断面（南から）



SX51 P22 土層断面（南から）



SX51 P27 土層断面（南から）



SX52 完撤状況（東から）



SX52 土層断面（東から）



SX52 南側遺物出土状況（南から）



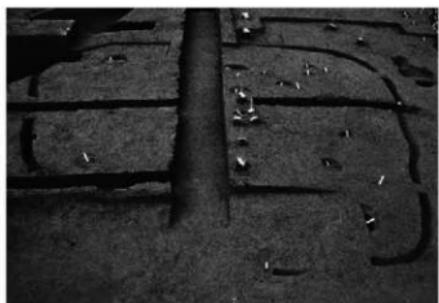
SX52 P1~4・6 土層断面（南から）



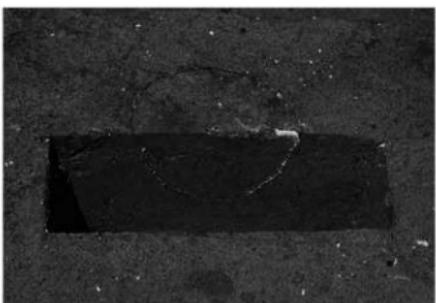
SX52 P8 土層断面（南から）



SX53 完掘状況（東から）



SX53 遺物出土状況（北から）



SX53 P1 土層断面（南から）



SX53 P2 土層断面（南から）



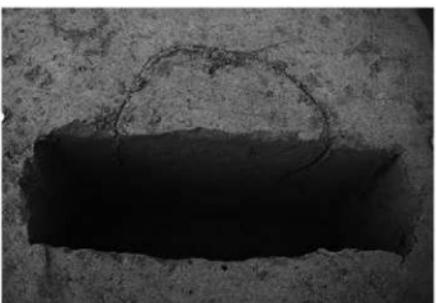
SX53 P9 土層断面（南から）



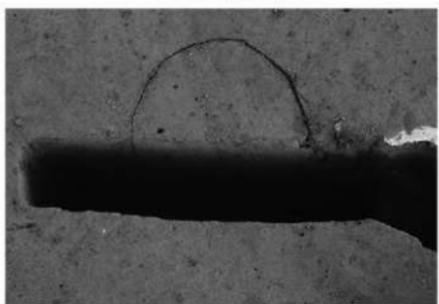
SX254 完掘状況（南から）



SX254 北西側周溝土層断面（東から）



SX254 P1 土層断面（南から）



SX254 P2 土層断面（南から）



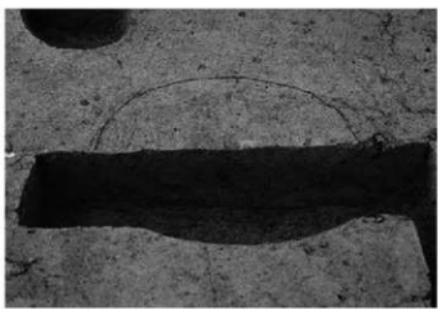
SX254 P4 土層断面（南から）



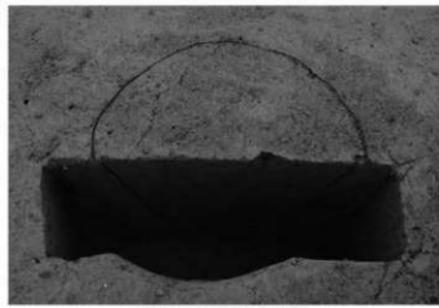
SX277・314 実掘状況（南から）



SX277 土層断面（北から）



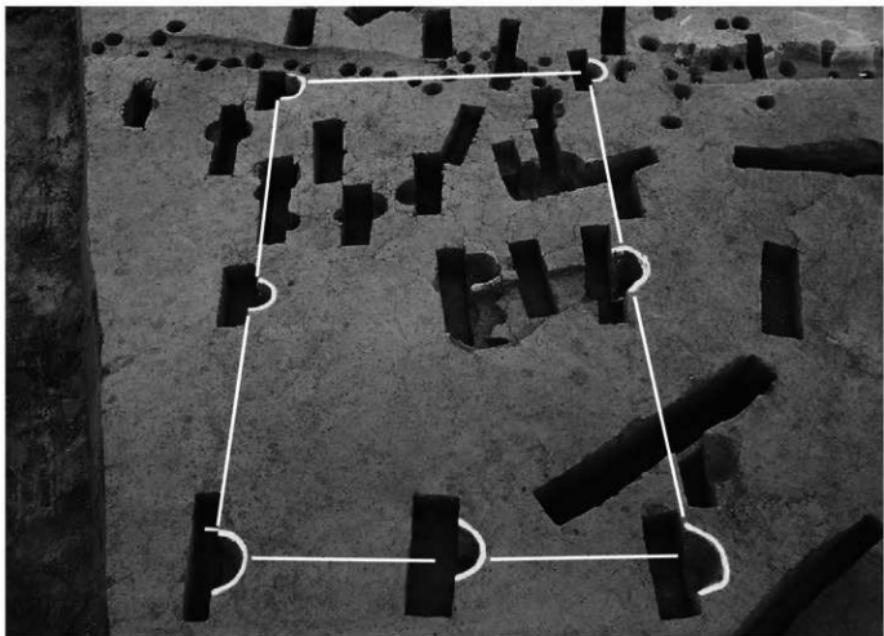
SX277 P2 土層断面（南から）



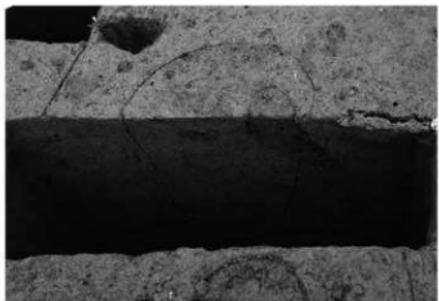
SK314 P1 土層断面（南から）



SK314 P2 土層断面（南から）



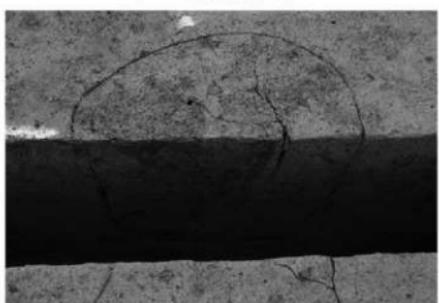
SB1 全景 (東から)



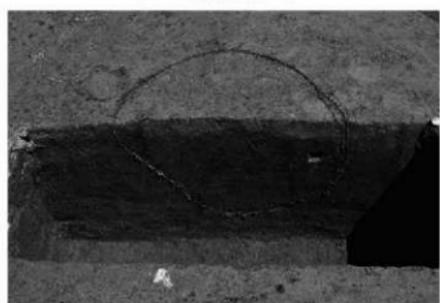
SB1 P2 土層断面 (南から)



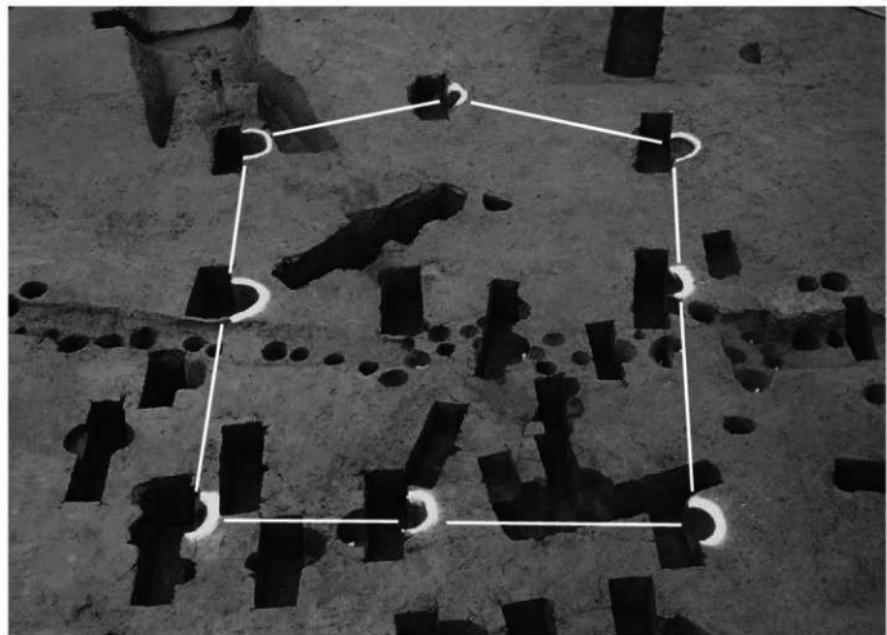
SB1 P4 土層断面 (南から)



SB1 P5 土層断面 (南から)



SB1 P7 土層断面 (南から)



SB2 全景 (東から)



SB2 P1 土層断面 (南から)



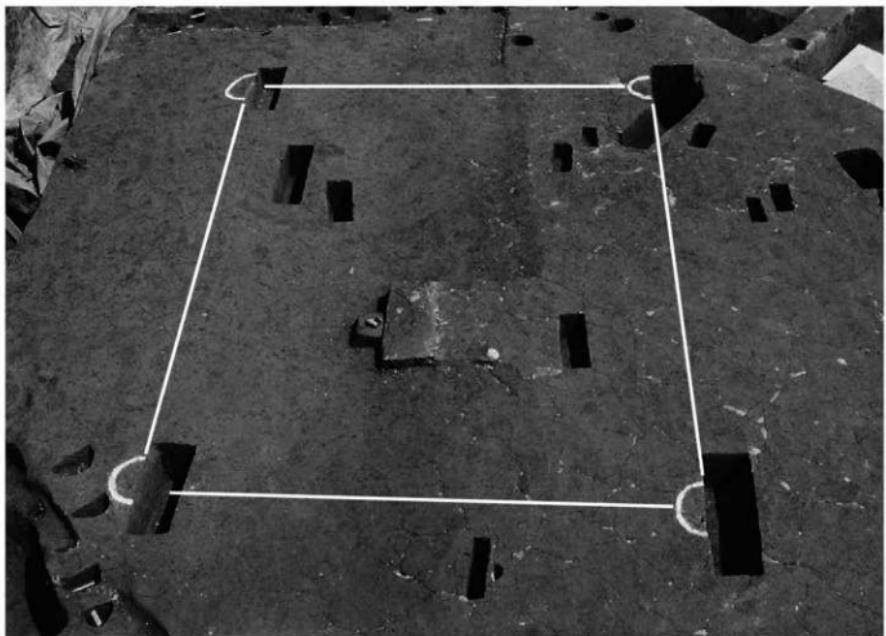
SB2 P2 土層断面 (南から)



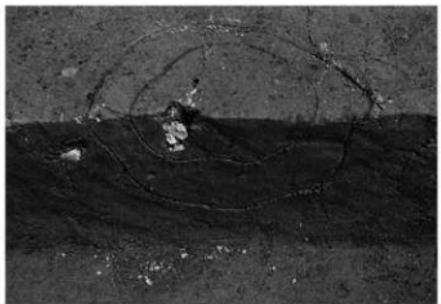
SB2 P3 土層断面 (南から)



SB2 P9 土層断面 (南から)



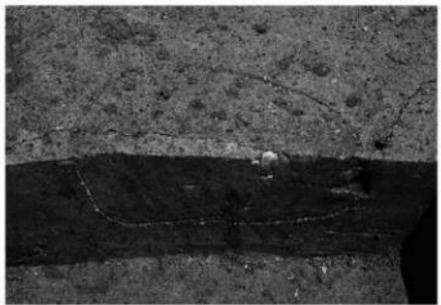
SB3 全景 (西から)



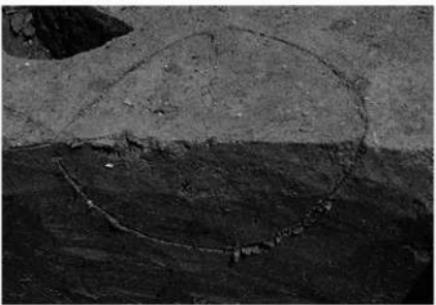
SB3 P1 土層断面 (南から)



SB3 P2 土層断面 (南から)



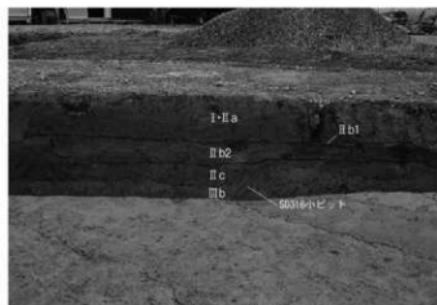
SB3 P3 土層断面 (南から)



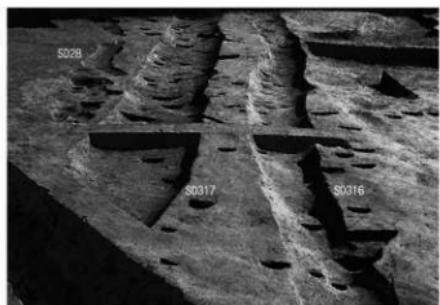
SB3 P4 土層断面 (南から)



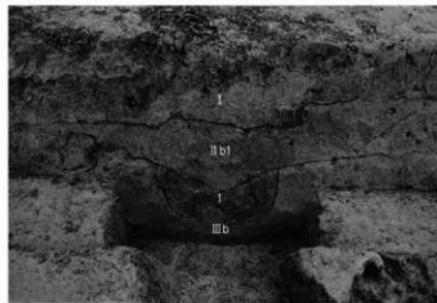
05C区 SD316・317 検出状況（南東から）



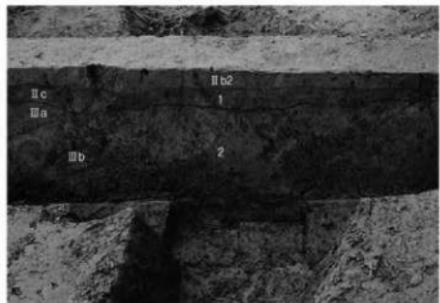
05C区 SD316・317・小ピット 土層断面（北西から）



05C区 SD316・317・小ピット 土層断面（南西から）



2E区 SD316 土層断面（北から）



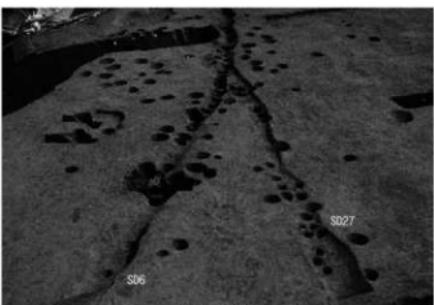
2D区 SD317 土層断面（東から）



05C区 遺構完掘状況（南東から）



3~7区 遺構完掘状況（北から）



5B区 SD6・27 文差部分完掘状況（南から）



7C区 SD6 小ピット検出状況（東から）



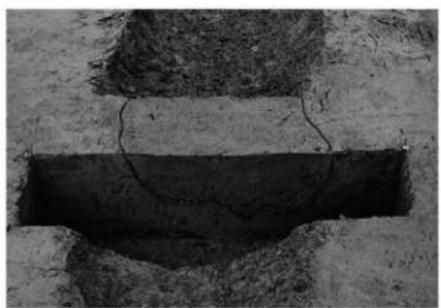
7C区 SD6 小ピット土層断面（南から）



7C区 SD6 土層横断面 (北から)



9C区 SD6 土層横断面 (西から)



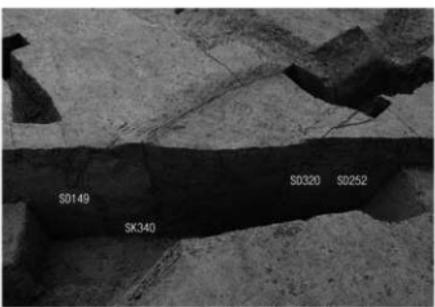
2C区 SD27 土層断面 (南から)



3C区 SD27 小ピット土層断面 (南から)



4D区 SD16 土層断面 (西から)



2・3区 SD149・252・320、SK340 土層断面 (北から)



4D区 SD252 土層断面 (西から)



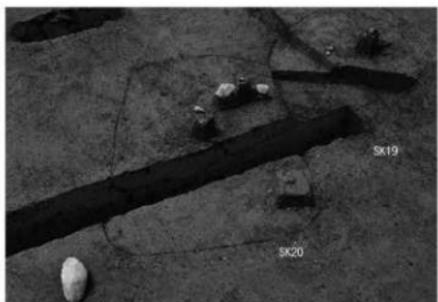
04区 SD334 土層断面 (南から)



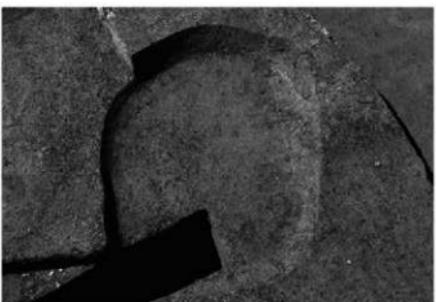
SK3 土層断面・遺物検出状況 (西から)



SK13 土層断面 (南から)



SK19・20 遺物出土状況 (東から)



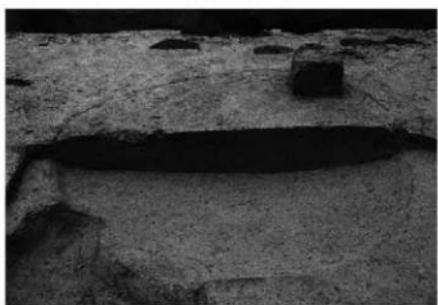
SK19 完掘状況 (東から)



SK20 完掘状況 (東から)



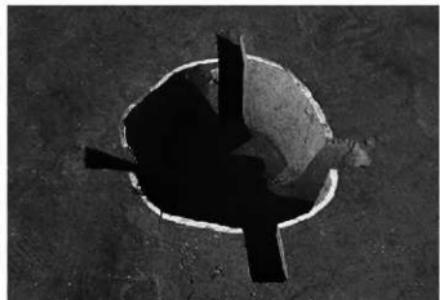
SK50 土層断面 (南から)



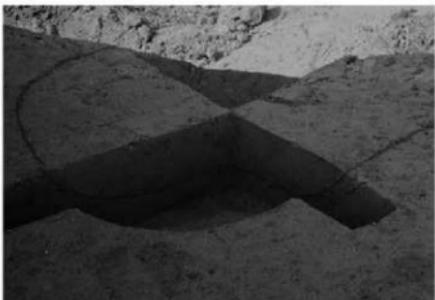
SK54 土層断面 (南から)



SK131 土層断面 (東から)



SK131 壁掘状況 (南から)



SK256 土層断面 (南から)



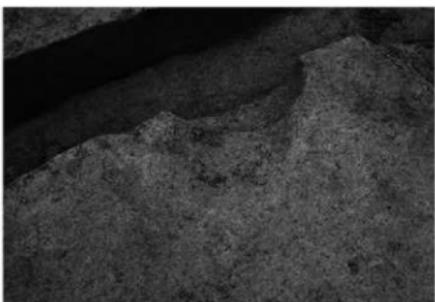
SK278 土層断面 (北から)



SK295 土層断面 (南から)



SK299 土層断面 (南から)



SK300 壁掘状況 (南西から)



SK301 土層断面 (西から)



SK301 壁掘状況 (西から)



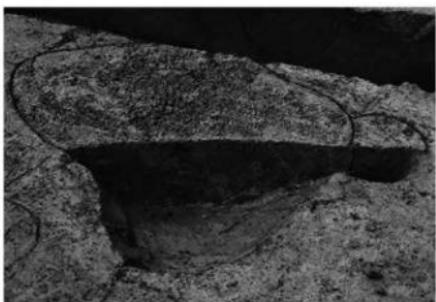
SK321 土層断面 (東から)



SK321 完掘状況 (東から)



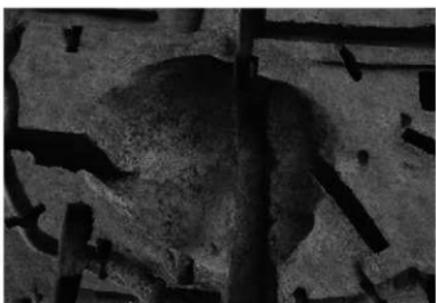
SK324 土層断面 (南から)



SK326 土層断面 (東から)



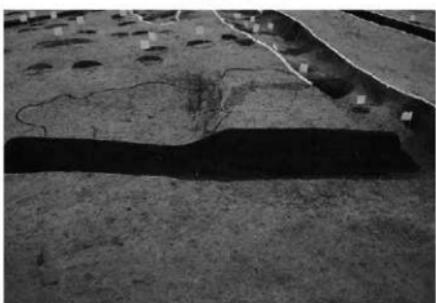
SK327 完掘状況 (南から)



SK327 完掘状況 (西から)



SK333 土層断面 (西から)



SK335 土層断面 (北から)



SK336 土層断面（西から）



SK337 完掘状況（南から）



SK338 土層断面（北から）



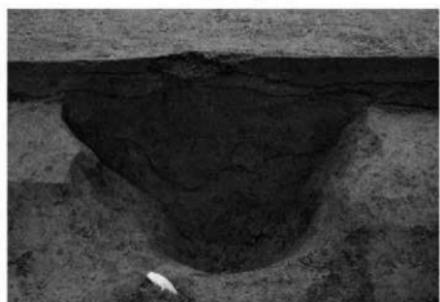
SK340 完掘状況（南西から）



SK341 土層断面（南から）



SK342 土層断面（東から）



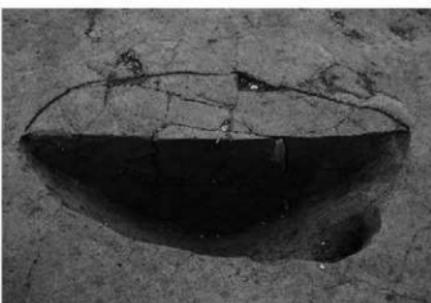
SK343 土層断面（南から）



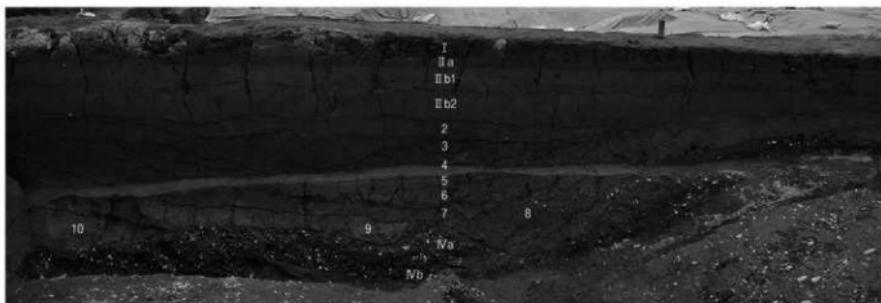
SK346 完掘状況（南東から）



SK350 潜物出土状況 (南東から)



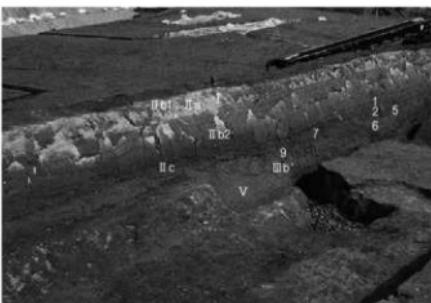
SK351 土層断面 (南から)



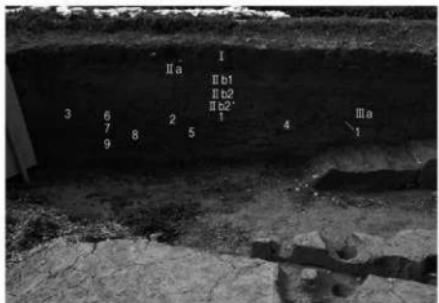
6B・C区 SRI 土層断面B (南から)



9B・C区 SRI 土層断面A (北西から)



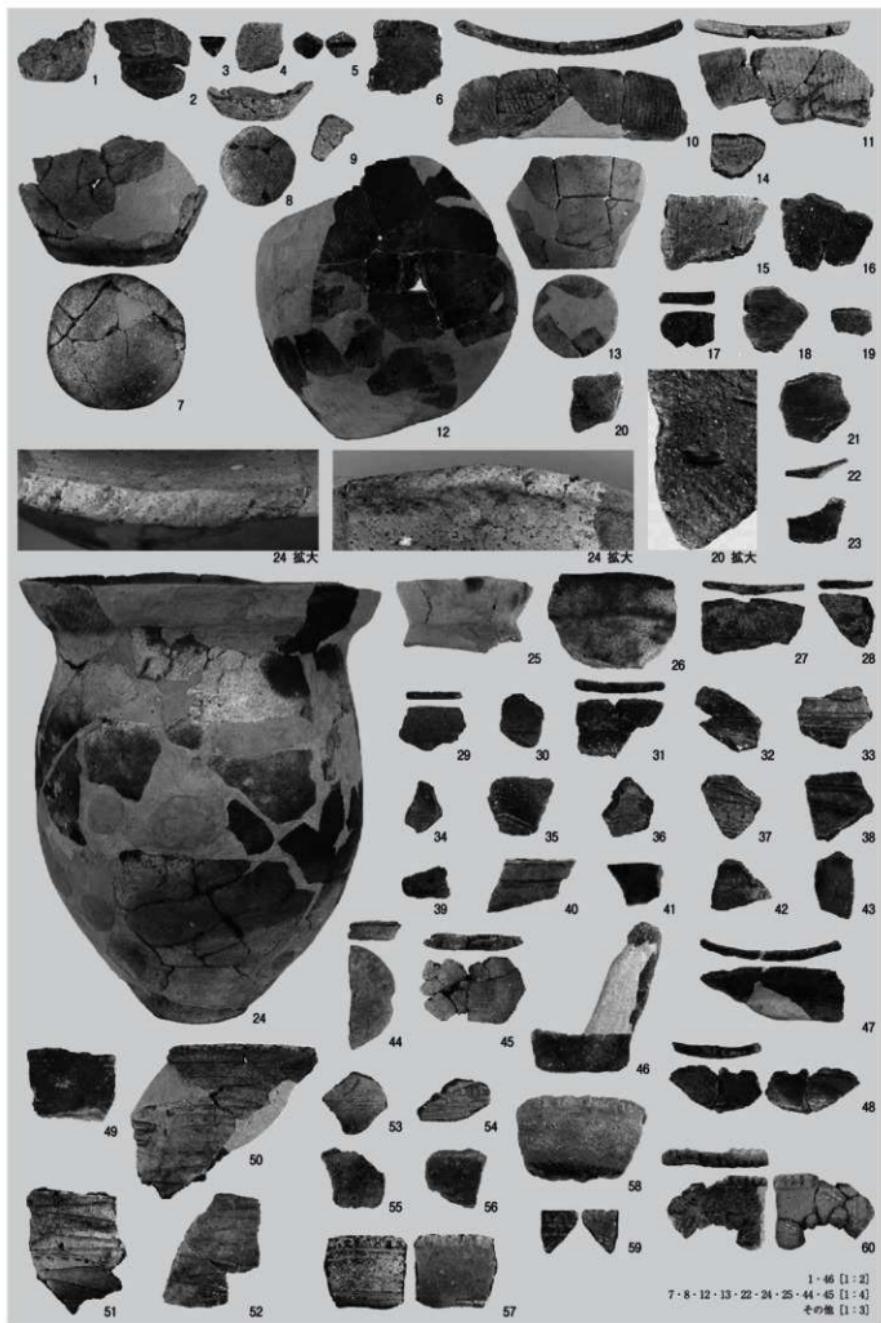
02B～E区 SRI 土層断面C (南西から)



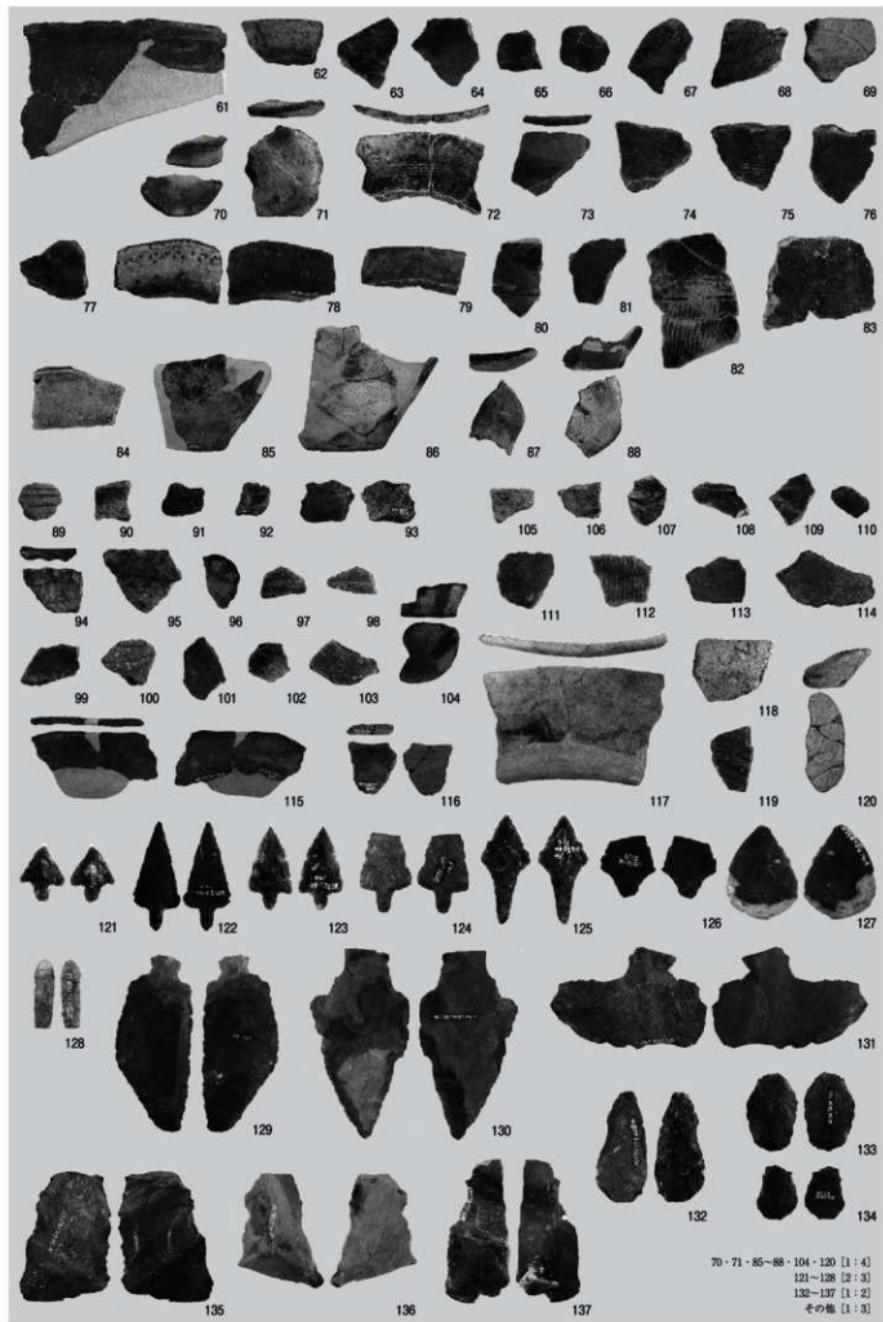
3D・E区 SR2 土層断面 (北から)



6B区 SRI 9層潜物 (24) 出土状況 (南から)



1-46 [1:2]  
7-8-12-13-22-24-25-44-45 [1:4]  
その他 [1:3]

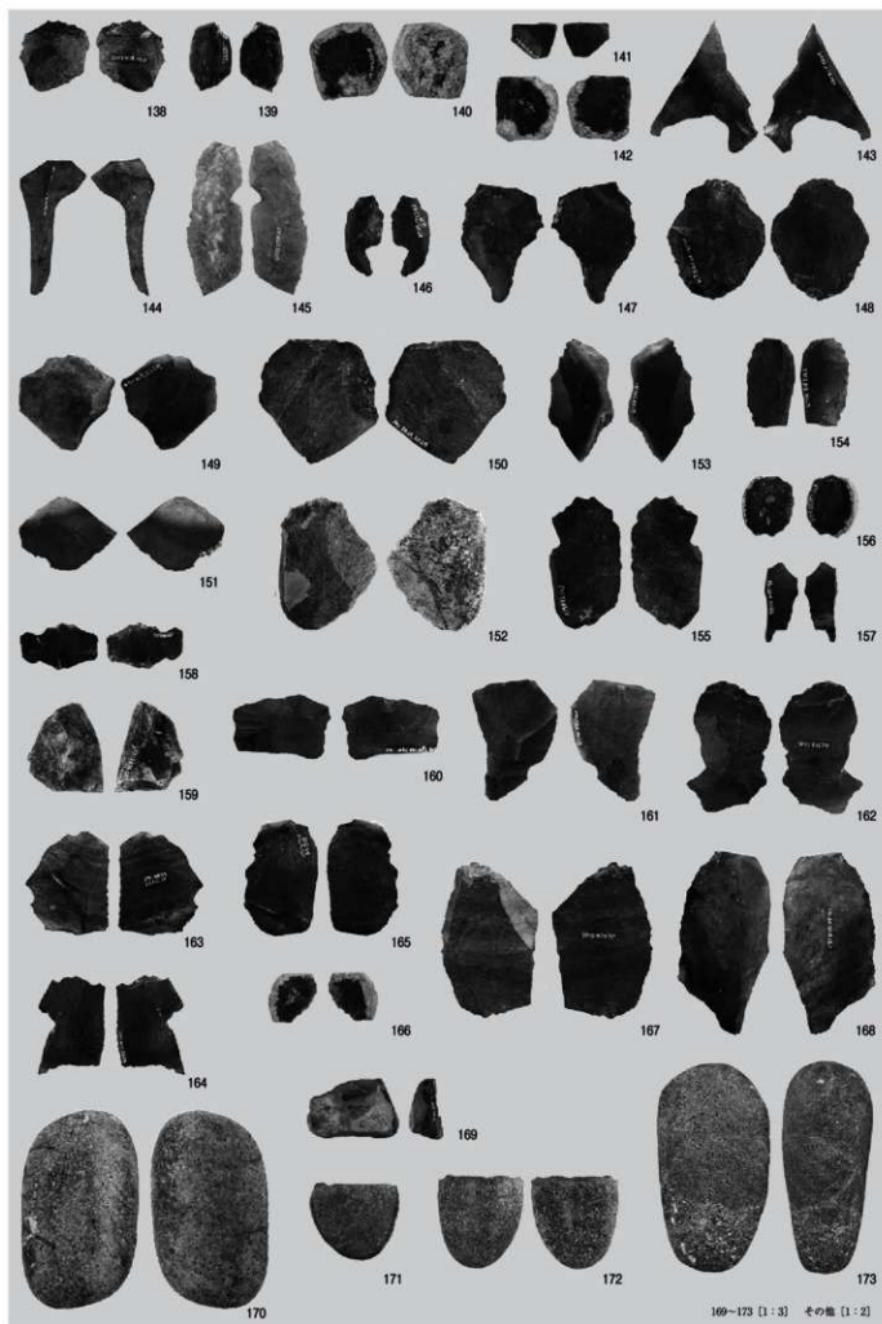


70・71・85~88・104~120 [1:4]

121~128 [2:3]

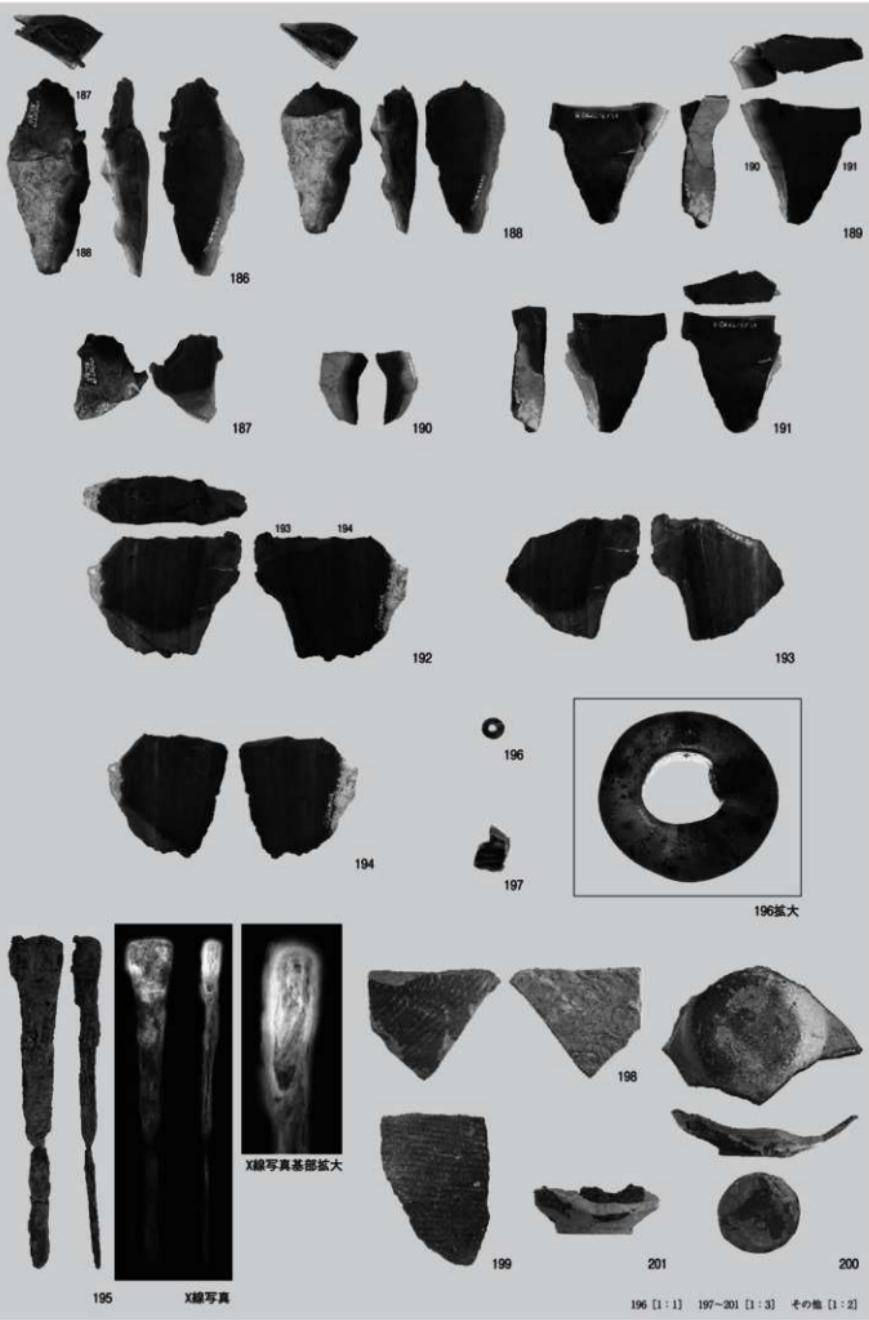
132~137 [1:2]

その他 [1:3]





全寸 [1:2]



196 [1:1] 197~201 [1:3] その他 [1:2]

## 報告書抄録

ふりがな	どうのまえいせき						
書名	堂の前遺跡						
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書						
巻次	XXXIV						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第213集						
編著者名	石川博行 北村和徳 吉田好孝（株式会社シン技術コンサル） 高橋 敦 伊藤真水（パリノ・サーヴェイ株式会社） 鈴木俊成（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団）						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 株式会社シン技術コンサル						
所在地	〒 956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地1 電話 0250 (25) 3981 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒 370-1135 群馬県佐波郡玉村町板井 311-1 電話 0270 (65) 2777 株式会社シン技術コンサル						
発行年月日	西暦 2010 (平成 22) 年 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
堂の前遺跡 <small>新潟県村上市 下保字高田 2351-2</small>		152129	611	38 度 14 分 47 秒	139 度 31 分 15 秒	20080415 ~ 20081118	4500 m <sup>2</sup> 日本海沿岸東北 自動車道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
堂の前遺跡	集落	弥生時代	堅穴住居 (1 軒) 性格不明遺構 (6 基) 掘立柱建物 (3 棟) 溝状遺構 (10 条) 溝 (11 条) 土坑 (31 基) ビット (435 基) 自然流路 (2 条)	弥生土器 石器 金属製品 ガラス小玉	県北の平野部で弥生時代後期 前半の堅穴住居を検出した。 自然流路に沿った小ビットを 伴う溝状遺構を検出した。		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第213集  
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXIV  
堂の前遺跡

平成22年3月30日 印刷 発行 新潟県教育委員会  
平成22年3月31日 発行 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1  
電話 025 (285) 5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1  
電話 0250 (25) 3981  
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 株式会社 第一印刷所  
〒950-8724 新潟市中央区和合町2丁目4番18号  
電話 025 (285) 7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第213集『堂の前遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	38度14分47秒	38度14分58秒
抄録	東経	139度31分15秒	139度31分04秒